

---

# 真剣で俺が転生者！？～その男【奉先】

ラドゥ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真剣で俺が転生者！？その男【奉先】

### 【Nコード】

N2940Y

### 【作者名】

ラドゥ

### 【あらすじ】

道のあるいていたらトラックに轢かれてしまった主人公。

彼が最後に願ったのは、「新たな人生を歩む」というものだった。

次に彼が目を開けたら、目の前には神様が！？

どうやら彼を轢いたトラックは、神様が戯れに人間界に紛れ込ませた3トトラック『転生トラック』で、それに轢かれた主人公は転生をすることになった。

次の人生こそ、悔いのない人生を送ろうとはりきる主人公だが、転生するのは、かろうじて名前だけは聞いたことがある、『真剣で私に恋しなさい!』通称『マジ恋』の世界。

はたして主人公は、転生者最大の特権、『原作知識』がない状態で無事にすごすことができるのか!?

今ここに、あらたな武人が誕生する!活目して待て!!(別に待たなくていいです)

-----

マジ恋の二次を読んでいて、つい我慢ができず、書いてしまった。

反省も後悔もしていませんが。

『それではラドウの2作目、『真剣で俺が転生者!??』その男【奉先】をどうぞ!!--』

秋葉原の通り魔事件を元にするのは不謹慎だというご意見をいただき、主人公がただ交通事故にあつて、そのトラックが転生トラックという設定にしました。

不愉快な思いをした方々、誠に申し訳ありませんでした。

プロローグ？ 交通事故ですか。 修正しました（前書き）

どうも、現在遊戯王GXの二次小説を書かせてもらっているラドゥウ  
といます。

最近マジ恋の二次小説を見ていたら我慢ができなくて書いてしま  
いました

遊戯王のほうも書き始めたばかりなのorz…………

まあ、反省も後悔もしていませんが（笑）

それではござー！

ブローグ？ 交通事故ですか。 修正しました

ブローグ？ 通り魔ですか。

やあ、みんなこんにちわ。俺の名前は『篠宮四季』しのみやしき

趣味は二次小説を見ることが、料理をつくること。あとはしいていうなら読書かな？まあそんな感じのオタクが入った社会人さ。

俺は今、

「大丈夫か、君！？」  
死にかけています。

大丈夫かじゃねえだろ、見りゃわかんだろてめえ。と、心配してこちらを見ている人に八つ当たりてきな感想を抱く。

俺はただ道を歩いていただけなのだが、そこに急に3トトラックが突っ込んできたのだ。そのときに周りから聞こえた悲鳴から推察すると、どうやら俺は交通事故にあっただらしい。体中に痛みが駆け巡る中、やっと聞き取れた情報だ。

これで俺が当事者じゃなかったら、他人事なんだからなあ。俺が被害者だからなあ……。

ああ……目が霞んできたぜ……。

おいおいまじでやべえな、これは。

ていつか救急車はまだかよ、死んじゃうぜ、俺。

ああ、なにが悪かったのかね。

まったく、しょうがねえな。

死にたくねえなあ。

俺はまだなにもやれてねえ。

俺はいつも怠けて生きてきた。

勉強もそこそこ手を抜いてたし、運動も疲れるからって、一生懸命やっけてない。

一応剣道部に入ってたが、結局幽霊部員になっちまったんだっけ。

今の会社だって、親戚の紹介で入ったようなもんだし。

せめて誰かに誇れるもんが欲しかったなあ。

ああ……。こう思うと、悔いの残る人生だった。

.....

そういや、この間読んだ二次小説で、トラックに轢かれて転生する  
つてのがあったけど、

ハハ、そんなことあるわけねえよなあ。

.....

もし、

もし神様が本当にいるのなら、

もう一度チャンスをください。

もう一度やりなおす機会をください。

.....

なあんて。そんなことあるわけないよなあ。

ああ、瞼が重くなってきた。

眠い.....

もう、ゴールしてもいいよね？

なんてな。って、ギャグって見たけどやばいな。本当に眠い。

ああ、もういいや。おやすみなさい。・・・・・・・・・・・・・・・・

そうして俺は瞼を閉じた。最後に聞いたのは、

『叶えよう、その願い。』

どこか神秘的な男性の声だった。

その日の夜、ニュースで放送された交通事故の被害者の名前のなかに『篠宮四季』の名前があったという。 . . . . .

プロローグ？ 終わり

プロローグ？ 交通事故ですか。 修正しました（後書き）

どうでしたかって、まだプロローグだからわかりませんよね、すいません。

次は主人公様と邂逅します。どんな神様にしようか悩む。

以上、ラドウでした！！

プロローグ？ 転生トラックですか。 少し修正しました（前書き）

前回のあらすじ

3トラックに轢かれて主人公死亡

連投します。

プロローグ？ 転生トラックですか。 少し修正しました

プロローグ？ 転生トラックですか。

そこは草原だった。それはまるで緑色のカーペットのようだった。

空は、漆黒に包まれていて数多の星が輝いていた。

しかし、空に浮かぶ二つの月が、ここが、普通の場所ではないことを教えてくれる。

そんな場所に彼はいた。

彼の名前は『篠宮四季』

これから始まる物語の【主人公】である……。

サイド：四季

「う、ん？・・・あれ？なんだここ？」

起きたらそこは草原だった。

いや、おかしいことをいつているのはわかってるが、事実周りが緑色の草原が広がっているのだから仕方ない。

「・・・・・・・・。」

とりあえず空を見上げる。

どうやら今は夜のようだ。

一面の星空が、とても美しく見えた。空気がきれいなせいかな都会では絶対に見れないような星の数だ。

「は・・・・・・・・？」

そこで見つけた。

それは月。それはまあいい。

いつもよりきれに見えるのはまあいい。空気がきれいな証拠だろう。

だが、

「月が二つ?・・・」

そう、月が二つ)・・・(あるのだ。月は一つしか見えないはず)・  
・(なのに・・・

「ここはいつたい・・・?」

そういえば、なんで俺はここにいるんだ。

俺は確か・・・・・・・・

「っ!?!」

そこで俺は思い出してしまった。

迫りくるトラック。

体に走る衝撃。

辺りに広がる悲鳴。

冷たくなっていく体。

そう俺は、

「俺は死んだはず？」

『その通りじゃ』

「っ!?!」

急に聞こえた声に、俺は急いで身構える。辺りを見回すが、人っ子一人見つからない。

「誰だ!どこにいる!?!」

『おお、すまんすまん。驚かせてしまったようじゃな?とりあえず上を見てみなさい。』

「上……?」

俺はとりあえず、その声にしたがい上に首をむけると、

「ほっほー！ー！ー！」

「うおお！？！」

突然白髪の老人が現れた。

土の中から。

「ふおふおふお。いいりあくしょんをするの、お主。気に入ったぞ。」

「な、なんで土の中から現れてんだよ。」

わざわざ上をむけなんっていつてさ？

「いやあ、神仲間のタバネちゃんが、この方法で、悪戯した話しを聞いているの？つい真似したくなっちゃんじゃないよ。」

「じゃよじゃねえよくそじじい。」

なんて迷惑なやつらなんだ。そのタバネってやつもろくなやつじゃねんだろうな。

………ん？

あれ、いまこいつ。

「なあじいさん。」

「なんじゃ、ちなみにわしの名前はダンビルドアじゃ。ビルと呼んでくれい。」

「なにその hogwarts 校長の紛い者みたいな名前！？確かにそれっぽい格好してるけども！しかも略称微妙だし。って俺が聞きたいのはそうじゃねえよ！？さっきあんたなんだった？」

「なんのことじゃ？」

ダンビルドアもどき、ビルは首を傾げる。爺がその仕草をやってもかわいくもなんともないんだが。

「あんた、さつき『神仲間』っていったが、じゃああんたまさか。」

「おお、そういうことかの。」

ビルは手のひらに拳をポンと乗せる仕草をする。……それは古くないか？

「お主の察するとおり、わしの名前は、ガイア＝ダンビルドア。俗  
にいう

神様じゃよ。」

そうして俺は神に出会った……

-----

「ここは『狭間の世界』。わしら、神が住まう【天上界】と、君らが住まう【人間界】。その間にある世界じゃ。ここには主に、死んだあとに転生するものを招待しておる。」

ビルは自分の髭をなでながら、この世界のことについて話す。まあ聞きたいことはいろいろあるがとりあえず、

「ここにいるってことは、俺は転生するってことか？」

「そうじゃ。」

俺の疑問に期待通りの答えを返してくれた。そうか、そうかそうか。どうやら俺は望み通り第二の人生を送れるようだ。

その喜びをかみしめっていると、ふと疑問が浮かび上がった。それは、

「なあ、なんで俺は転生できることになったんだ？」

そう、俺が転生することになった理由がわからない。テンプレは、神様がミスしてとか、神様が暇つぶしに殺してとか、そんな感じだが、いったい……？

俺の疑問にダンは一っこりと笑みを浮かべて答える。

「簡単じゃよ。お主最後の願いを覚えているかの？」

「最後の願い？」

確か俺が最後に思ったのは、

「……やり直すチャンスがほしい……」

まさかつ！？

「あんたは、俺の願いを叶えてくれるために、俺をここに呼んだのか？……」

だとしたら、なんとこの人は慈悲深いのか。

おれの問いにダン是好々爺前とした笑みを浮かべる。

「それはの？」

全く関係ないの。」

「関係ねえのかよ!?!」

思わず突っ込みしまった俺は悪くないはずだ。

「お主が轢かれたトラックがあるじゃろ?」

憤ってる俺をスルーして、ダンは話しを続ける。この爺っ、干物にしてやるうか(怒)

俺は怒りをおさえてダンの問いに答える。

「……ああ、それがどうした?」

「まあ、そう怒るでない。そのトラックは実はわしが大分昔に混ぜたトラックでの?その名も『転生トラック』という。」

「『転生トラック』?」

なんだそりゃ。

「うむ、大分昔に面白半分混ぜたのじゃが、わしも忘れておつての。そのトラックで轢いたものは違う世界に転生できるといふ代物なのじゃが、まさか今更発動するとはの。ふおふおふおふお。」

「……てーと、あれかい。おれが転生する理由は、これといつてない?」

「そういつことじゃの。」

「人の心を読むんじゃねえよ。はあ、なんか疲れちゃった。それで、俺はどこに転生するんだ？」

おそらく、漫画かなんかの世界に転生するんだろうが。

「おおそうじゃそうじゃ。お主が転生するのはの。」

そういつて、ダンはローブ？のポケットを探る。

「おつとあったあった。お主の転生する世界は、【真剣<sup>まじ</sup>で私に恋しなさい！】、通称【マジ恋】と呼ばれる世界じゃの？」

「マジ恋？ああ、名前だけは聞いたことがある。でもなあ。」

俺、PCゲームってやったことないから、わからねんだよなあ。まあ、学園物らしいから、主人公らしき人に近づかなければなんとかなるかな？（人それを『フラグ』という（by作者））

「まあ、ドラゴンボール並の戦闘シーンがあるが、大丈夫じゃろ。」

………生きていられるかな俺。

「そうじゃそうじゃ、お主には能力をやらねばの？」

「能力？」

「俗にいう『ちーと』というやつじゃ。」

それは助かる。マジ恋がどんな世界か知らないが、チートがあれば、自分の身くらい守れるだろ。

「ほれ、これがお主の能力じゃ。」

そういつて、ダンから一枚の神を渡される。おおこれがつて、

「こづいうのって自分で決めるんじゃないの？」

「他はどうか知らんが、ここではわしが決めるんじゃない。」

まあいいか。まああまりに弱すぎたら抗議くらいはするがな。

そういつて俺は自分の能力が書かれてある紙を見てみた。



- ・ 答えを導く者 アンサー・トーカー
- ・ 成長限界突破
- ・ 最強の気
- ・ 努力すればなんとかなる程度の能力
- ・ 幸運 A
- ・ 完全記憶能力
- ・ 星の本棚
- ・ 『刀語』の見稽古

こいつは俺にこんな能力を渡して、なにをさせようというのだろうか。少し不安になった。

「久しぶりの転生者だから、わしががんばっちゃた」

「がんばりすぎだろ、ダンエ・・・」

「はあ、まあいいか。ありすぎて困るもんじゃないしな。」

「じゃあ、そろそろ転生させるぞ?」

そのダンの言葉に俺はサッと身構える。こいつのことだ、転生させるときはテンプレてきに落とし穴に決まって「ではそこにある門から転生してくれい。」「は・・・?」

ダンが指差したほうを見ると、いつの間にか、立派な門が。

「・・・そうだよな、いくらこいつでもそんなベタな真似しないよな。」

俺は溜息をつきながら、門の扉へと歩いていく。

「おい、ダン。」

「?なんじゃい。」

「サンキューな?俺の願いを叶えてくれて。」

ダン は俺のセリフにぽかんとした顔になる。なんだよ、人がせつかくお礼をいってんのに。

しかし、それもつかの間、じつにやさしい笑みを浮かべた。まるで、孫をみる老人のように。

「ふおふおふお、礼はいらんぞ。お主が転生するのは偶然であって、わしの意味ではないからのお。」

「それでも、転生させてくれたのはあんただ。だから俺はあんたに礼をいうのさ。」

そう、こいつのおかげで俺は第二の人生を送れるのだから、感謝くらいしなくてはな?

「ふむ、それではありがたくもらっておくとするかの?」

「おお!もらっとけ、もらっとけ。…….…….そんなじゃあな。」

「うむ。達者での?」

そうして俺は門へと、いや、新しい人生へと歩みを進める。ここから第二の人生がはじまるんだ。気合い入れていくぞ。

「おっしゃ!いくぜ、お「パカ」…….パカ?」

おそろおそろ下をみるとその口は、

深い穴が開いていた。

「やっぱりこんな落ちかよおおおおおおお！?!?!」

「達者でのー!」

あの爺、こんど会ったら絶対ぶんなくる。

俺はそう、心に誓ったまま、穴の底の底へと、落ちて行った。

サイド：ビル

ふむ、いったようじゃの？

「しかしなにか、面白い人間じゃったのお。」

なにか不思議な魅力があつたの？ああなにかとは自分でもよくわからんのだが。

「まあええかの？」

次は悔いのない人生を祈っておるよ？篠宮四季よ。……………

「おっと、タバネちゃんのお茶会の時間じゃ、いそがなくてはの。」

遅刻して、新しい実験台にされるのはごめんじゃからの。まあが  
ばるのじゃよ、四季よ……………

サイド：四季

「奥様おめでとございます。元気な男の子ですよ。」

看護婦が俺を抱きながら、俺の母親らしき人に俺を見せる。

どうやら俺は赤ん坊から人生を歩むようだ。

……まあ母親がちょっと病弱そうなのは別にいい。美人だし。

……赤ん坊スタートなのも百歩譲っていい。

しかし、しかしだ、

なぜ、なぜ俺の父親が、

「ほぐら、私がパパよ。いないないぶるあああああああ！！！！」

なんで俺の父親が筋肉隆々なオカマなんだあああああ！？

病院で大声を出した父親は、看護婦さんたちに連行されていった。母親らしき人は「しょうがないパパでちゅねえ？」と俺にふってきた。

ていうかあれに同様しないってすげえな母親。

これからどんな人生を送ることになるのか、とても不安になった転

生初日だった。

「ほっ、うん、飯でちゅんっ？」

「はぶー！？」

「いーちー！？」

プロローグ？ 終わり

プロローグ？ 転生トラックですか。 少し修正しました（後書き）

プロローグはこれで終了です。

どうやら私の書く主人公は平穩を求める傾向にあるようです。 チキンですね（笑）

・ まあ、今回の主人公はそれほどでもない感じにするつもりですが・

次は一気に飛びます。 5歳くらいかな？

以上、ラドウでした！！

**登場人物紹介一【オリ主一家編】**

**主人公設定と鬼道流、呂家について修正**

まこちゃんさん、さっそくの感想ありがとうございます。

ご期待にそえるように頑張りたいと思うのでこれからもよろしくおねがいします。

今回は人物紹介オリ主編です。少しネタばれも入ってるので、それが嫌な人はユーザーンしてください。

それではどうぞ！

## 登場人物紹介一【オリ主一家編】

主人公設定と鬼道流、呂家について修正

主人公 篠宮四季 しのみや しき

今回の話のオリ主。転生者。

道を歩いていたら、3台トラックにひかれて死亡してしまう。実はそのトラックは神様が地上にランダムに混ぜた『転生トラック』だった。そうして彼は『真剣で私に恋しなさい!!』の世界に転生した。

彼のチートは以下の通り

アンサー・トーカー

- ・ 答えを導く者
- ・ 成長限界突破
- ・ 最強の気
- ・ 努力すればなんとかなる程度の能力
- ・ 幸運 A
- ・ 完全記憶能力
- ・ 星の本棚
- ・ 『刀語』の見稽古

ちなみにこれらはオリ主が望んだわけではなく、神様が調子にのってつけた。これらのチートをもらった主人公は喜びはせず、「俺にこれだなにをしろと？」と呆れたという。

現在五歳。

容姿は赤みがかった茶髪で、女性が羨みほどの艶をもっており、後ろにヒモで縛っている。きつすぎないほどに釣り上がった目。肌は黒く、顔は10人に7、8人が「かっこいい」と思うほどには整っている。

実家は居酒屋【トビウオ】という店で、昼は定食屋もやっていて、それを手伝ったりしている。

料理が得意だったが、母親が家事が壊滅的で、父親は店でいそがしいため、家事のスキルは自然と上がって行った。(上げないと死活問題だったため)

自分のチート能力を制御するため、こっそり修業もどきをやっていたが、両親に見つかり、父親の流派、【鬼道流】を習い始める。

特技：家事全般

趣味：新技開発、料理、読書、ゲーム

将来の夢：料理人？

武士テーマは「笑」「どんな苦難も笑い飛ばす」

好きなもの、こと：おもしろいもの、おもしろいやつ、家族、友達、ゲーム、甘味

嫌いなもの、こと、苦手なもの、こと：理不尽、家族や友達を侮辱するもの、人の話を聞かないやつ、戦闘狂、川神百代(嫌いではない)

現在推定四十代弱

主人公の父親。居酒屋【トビウオ】のマスター。

筋骨隆々のオカマキャラだが、ちゃんと女性も（・・・）好きで、妻の晴美にぞっこん。晴美が死んでからは恋愛関係になった相手は一人もいない。

普段はオカマ口調だが、店に迷惑客がきたときや、真剣なときにはちゃんと男口調で喋る。イメージは『恋姫無双』のオカマ管理者

実は、武術集団【呂家】の現筆頭。16代目【奉先】であり、幻の武術、【鬼道流】きどうりゅうの現継承者。

『川神鉄心』、『ヒューム』と同世代の武人で、両者とも交戦したことがある。鉄心のことを『鉄心ちゃん』と呼び、ヒュームのことを『ヒュームちゃん』と呼ぶ。

国からの依頼などで、テロリストの壊滅や、犯罪者の捕縛を手伝ったりすることもある。

特技：人の話を聴くこと、料理、戦闘

趣味：息子の成長を観ること、美容研究

将来の夢：息子と酒を飲み交わすこと。

好きなもの、こと：晴美、四季、料理、鍛練、卵焼き

嫌いなもの、こと、苦手なもの、こと：人に迷惑をかける客、家族を侮辱するもの、怒った晴美

しのみや はるみ  
篠宮晴美

主人公の母親。

年齢不明。

元々【呂家】の一員だったほどの武術家だが、元々体が病弱なたね、一線を退いた。

しかしその腕は健在で、数秒だけなら、奉山を吹き飛ばすほどの力を持つ。

奉山曰く、「瞬間的な力なら呂家最強。」イメージは『かたながたり刀語』の病弱で最強な姉。

特技：夫の調教（えっ？）

趣味：日向ぼっこ

将来の夢：息子の成長を見届けること

好きなもの、こと：奉山、四季、夫の作った料理、お客様の喜んだ顔  
嫌いなもの、こと、苦手なもの、こと：激しい戦闘（体がもたない）  
、家族を侮辱するもの、料理、ごきぶり

料理が壊滅的で、主に【トビウオ】の看板娘（笑）をしている。

【居酒屋『トビウオ』】  
川神学園近くにある居酒屋。

昼には定食屋としても開いており、安くてうまいと、学生にも評判。他にも川神院に挑戦しに来た武術家なども利用したりする隠れた名所。

ここは一種の安全地帯となっており、ここでもめごとを起こしたら篠宮一家にボコボコにされて、店から叩き出される。常連客には『板垣一家』、『くまちゃん（正式な名前不明）』、『鉄心』、『ル師範代』、『宇佐美一家』などがある。

【呂家<sup>りゅうか</sup>】

元々は大陸の武術家一族で、【戮家<sup>りくか</sup>】とも呼ばれている。

現在は武術一族ではなく、一族以外の武術家も所属している武術集団となっている。【川神院】が『最高の武術家』を目指す集団ならば、【呂家】は『最強の武術家』を目指す集団。

また、入れるものは最低限の実力があるものに限られており、様々な武術家を受け入れるのは、【呂家】の強さの純度を保つためでもある。

【呂家】の強さ【呂家】の中でも最強の存在には、呂家の歴史上、最も有名な武人の字である、【奉先】の称号が与えられる。

【呂家】の武術家は強さへと、最低限の実力さえあれば所属は問われないため、様々な場所に存在し、実は政治的な影響力もある。

元ネタは、『修羅の門 第貳門』から。

### 【鬼道流】

主人公が使う流派。戦国時代に端をはつする武術で『気の放出』より、『気での身体強化』を重視しており、その本気の速さは達人でも見えないほどだという。

『人』の弱さを脱し、自らを『鬼』とすることを命題とする武術。

また、森羅万象に宿る気、『然気』を利用する技術も持っており、マナを利用した技も多数ある。

鬼道流の達人一人で、通常の達人千人を相手どれる。『最速』の武術とも呼ばれている。

主人公が、鬼道流の技をみたときには、「なにこのネタ流派」とつぶやいたらしい。

まあ、こんな感じですよ。これは主人公五歳のときのプロフィールな  
んで、また更新するかも。

以上、ラドゥでした！！

## 第一話 鬼道流へきどつりゅうですか。

前書きで謝罪があります。

修正

前回のあらすじ

主人公、『マジ恋』の世界に転生しました。

フェアリー王さん、八雲さん家の食事当番さん、次元賄賂さん、まこちゃんさん、無さん、exajokerさん、rittoさん、パリさん、kazuchiさん、感想にご指摘ありがとうございます。励みにさせていただきますので、これからもよろしくおねがいします。

この小説ですが、秋葉原の事件を元にするのは、いくらなんでも不謹慎だというご指摘をいただき、ただの交通事故にあったという設定に変えさせていただきました。

私の考えなしの行動のため、ご不快な思いをした方々、本当に申し訳ありませんでした。

第一話 鬼道流へきどつりゆゑですか。

前書きで謝罪があります。

修正

第一話 鬼道流ですか。

サイド：四季

どうも〜！前回『マジ恋』？の世界に転生した、篠宮四季です。ただいま俺は、

「ぶつらあああああ！！！！」

「ぎゃあああああああああ！?!?!！」

襲われています

いや、本当はちがうんですけどね？

今、俺に襲いかかっているのは『篠宮奉山』。  
見た目は色黒の筋肉の鎧につつまれた大男で、とてつもなく暑苦し  
いこの男は、実は俺の父親なんです。

なんでこんなことになっているかというよ、

「修行中によそ見はよくないわよん」

「うお!？」

あ、あぶねえ。何でただのパンチで地面が碎けてんだよ、おい。

そう、今俺は父さんに修行をつけてもらっている。

なんでこんなことになっているのかというと、回想〜ドン!

〜1時間前

俺は今、両親と1対1で正座でむきあっている。(正座はなんとなく雰囲気ですいている)

何か真面目な話があるということなので、こっぴどくむきあっているということなのである。

目の前にはいるのは2人。

1人は父親、『篠宮奉山』。居酒屋【トビウオ】の店主で、昼にだしている定食も一手に引き受けており、その暑苦しい見た目からは想像ができないほどの凄腕の料理人である。

なよなよとしてオカマ口調なのが玉に瑕だが、それが逆に親しみやすいのか、よくお客さんの愚痴や相談を聞いているようだ。

もう1人は、母親『篠宮晴美』。綺麗な赤い髪にスツキリと整った顔。

その白い肌からは、まるで病人のような印象を受けるが、その見た目で侮ることなかれ。その気になれば、大の男を吹き飛ばすほどの力がある。

以前、うちの料理に虫が入っているといちやもんをつけてきたチンピラを、むかいの通りまで吹き飛ばしたのは記憶に新しい。

我が家のヒエラルキーの頂点である。

ちなみに、家事、特に料理が壊滅的を通り越して破滅的で、一度手料理を食べたのだが、天上界にいるダンと再会してしまったほどである。

それ以来、母が台所への立ち入りを禁止されたのはいうまでもない。

いまは、トビウオの看板娘（笑）をして「四季君、後でお話ししましょう?」……すいません、勘弁してください、お母様。

ま、まあこのようにキャラが濃くも尊敬できる両親たちである。

「四季ちゃん。」

おっと話しが始まるようだ。ちなみに、母さんは俺のことを「四季君」。父さんは「四季ちゃん」と呼ぶ。

「なんでしよう、父さん。」

「もうっ！パパって呼んでっていったじゃない！……まあいいわ。四季ちゃん、あなたももう五歳になるわね？」

「はい。」

そう、この世界に転生してから、俺ももう五歳になる。

……辛かったなあ。

転生物にありがちな羞恥プレイもそうだったが、父さんが何回も俺にキスしてきたり、はやく自分で行動したいから、一生懸命立ちあがったんだよなあ。……生後三カ月くらいに。

今思えば、いくらなんでも早すぎたよな、ハイハイの段階飛ばしてるもんな。

普通の家族なら気味悪がられても仕方ないはずなんだけど、家の家族はすげえ喜んでくれたなあ。……はしゃぎすぎた父さんを、母さんが地面にたたきつけた場面を見たとき、絶対に母さんには逆らわないようにするって誓ったけなあ。

「（遠い目でどこみてるのかしら、この子）大丈夫、四季君？」

おっと、思い出にふけていたら、母さんに心配されてしまった。

「すみません、大丈夫ですよ母さん。父さん話の続きを。」

「そうね。それでね四季ちゃん。あなた、

武術をならつゝ気はあるかしら?」

「.....は?」

-----  
-----

「父さん、武術とはいつたい?」

おかしい、なぜ急に武術？確かにここ、川神市は武術が盛んな町だが、家は居酒屋。家には関係ないはず。

俺が、父さんのいったことを考えていると、

「あなた、話しをはしよりすぎですよ？」

母さんが父さんをいさめる。どうやら、父さんはまだ俺に説明していないことがあるらしい。

「実はね、四季ちゃん。家は元々、とある武術を伝え続ける家庭なの。といっても、道場とか開いてるわけじゃないんだけどね？・・・  
・・・篠宮家の男子は五歳になったらその武術を習得するための修業をしなければならぬしきたりなの。」

「・・・まさか我が家にそんな裏設定があったとは。ということとは、どおりでただの料理人にしては、ビルからビルに飛び移ったり、川の上を走ったり、叫び声で窓ガラスを割ったり、でたらめな身体能力をしていると思った。（気づけよ、おい）」

ん？ということとは、その父さんを地面にたたきつけたことのある母さんっていったい・・・？

チラッと母さんの方を見ると、

「なにか（ニッコリ）」

「い、いえ別に。」

これについては触れないでおこう。

しかし、これはチャンスかもしれない。俺にはダンからもらった『最強の気』があるから、このまま、ただ体を鍛えるだけでも、それなりに強くなると思うが、どうせならちゃんとした技術も習得しておきたい。

ならば、

「父さん、つまりその武術を俺に教えてもらえるというわけですね？」

「そうだけど、無理はしなくていいのよ。いやなら「いえ、教えてください。」理由を聞いていいかしら？」

「理由？」

父さんが真剣な顔で、俺に聞いてくる。なんのことだろう。

「武術とは、いふなれば凶器。使い方を間違えたらただの暴力になってしまう。武術を使うものには常に責任がつきまとうの。だから、あなたの理由によっては……。」

教えることはできないということか。

ここで適当なことをいうのは簡単だが、父さんのあの目の前では、なんとなく嘘は通じない気がする。

まあ、変な理由じゃないし、いいか。

「俺は、理不尽をなことを防ぐための力が欲しいんだ。」

「理不尽？」

「そう。この世界にはたくさん理不尽がある。イジメなんかはその最たる例だね？俺はそれを撥ね退ける力が欲しいんだ。」

自分の力を試したいっていうのも、もちろんあるけどね？

「…………それは正義の味方になりたいということかしら？」

父さんが少し険しい顔になる。それも仕方ないかもしれない。真剣な意味で正義の味方を目指すなんて、子供か、よほどの狂人おこくとよこくらいだろう。

だけど、父さんの問いに俺は首を横に振る。

「俺はそこまで、おひとよしじゃないさ。ただ、目の前の、俺の周りの人に降りかかる理不尽も撥ね退けられればいいと思っているけどね？」

俺は父さんの目をしっかりと見て答える。ここで目をそらしたら、なんとなくだめな気がしたからだ。

しばらく見つめあっていたが、急に父さんがほほ笑む。どうやら合格したらしい。

「そう。なら修業は明日から始めるわ、それでいいかしら？」

どうやら、さっそく修業を始めるらしい。まあ、こちらは願ってもないことだが。

「はい、わかりました。それと父さん。」

「なにかしら？」

不思議そうに父さんは唱える。しかし、俺はまだ大切なことを聞いていない。

「俺が習う武術はどういう武術なのですか？」

それをいうと、父さんは「ああ、忘れてたわ。」「とつぶやくと、俺の質問に答えてくれた。

「その武術は『最速』。」

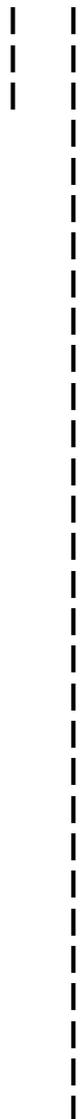
極めればその力は達人千人を葬るほど。

自らを鬼へと変える道をたどる、それすなわち

鬼道流。<sup>きどうりゅう</sup>

「

．．．．．どうでもいいけど、タメすぎじゃね？  
と思った俺は空気が読めないやつなのかもしれない。



と、いうわけで、現在父さんに修業をつけてもらっている最中なの  
である。

最初は基礎能力の向上のために、教わったばかりの気の身体強化を  
覚えるといったものだが、これは実は子供のころから自分なりに練  
習していたために、あっさりと成功した。（父さん曰く、まだまだ  
錬度がたりないらしいが）

それで今は身のこなしの練習のため、気の身体強化を使って父さん

の攻撃を避け続けているというわけである。

あるんだが、

「ぶらあああああ！！！」

ドゴオオオン！！

「うわあああああ！？！」

「まだまだいくわよ！！！」

「ちよゝま。」

ドドドドドドオオン

「六王銃！！！」

「ちよつ！著作権、って岩が粉々に！？」

・・・・・・・・・・・・・・・・俺、生きていられるだろうか？

「す・き・あ・り？」

「あ

チュドーーーーン！！！！

第一話 終わり

第一話 鬼道流へきどつりゆゑですか。

前書きで謝罪があります。

修正

どうだったでしょうか。

この話を書くにあたって、元々書いてあった設定をいくつか変えさせていただきました。混乱させてしまったなら、申し訳ありません。

次回はどんな話を書くかまだ未定です。そろそろ原作キャラをだしたいんだけどな・・・

以上、ラドウでした。

## 閑話 『我が息子』（前書き）

本編を楽しみにしていた人すいません。閑話が二話連続で入ります。短いですがご勘弁を。

今回は父親、奉山が息子、四季をどう思っているかについてです。それと、原作キャラ、『釈迦堂』への批判じみたことも二話連続で入りますが、作者も、奉山も晴美も釈迦堂が嫌いではなく、武術家、『力を持つもの』としての在り方を危険視しているだけなので、ご理解ください。普通にトビウオにも顔をだしている設定ですしね。

それと、赤日黄色さん、今夜のおかずさん。ご指摘と感想ありがとうございます。これからもがんばりますので、よろしくお願いします。

## 閑話 『我が息子』

閑話 『我が息子』

サイド：奉山

私の名前は篠宮奉山。

川神市で、居酒屋トビウオをやらせてもらっているわ。

お昼ごろには定食もだしてるから、川神市に来たときは、ぜひよつてちょうだいね？

私には一人の息子がいるの。

その子の名前は『篠宮四季』。

四季ちゃんは晴美ちゃん似の可愛い子でね？私の自慢のむ・す・こ？なんだけど、今日はその四季ちゃんの話を見せてもらおうね？

我が家には、その昔から伝わる武術があるの。

具体的にいうと、我が家というより、私に伝わったんだけど。

その武術の名前は『鬼道流』ていって、戦国時代に、大陸から入ってきた武術を基盤とした武術で、『最速』の武術、その強さは、戦国時代の武士千人を葬り去るほどのもの。

この流派は自分の子供の中で、最も才能を持つ子供に伝えられるもので、これだけ見れば、『一子相伝』のようなものだが、それは違うのよね。

才能があれば、養子でもかまわないんだから（……………）。

その強さゆえに、鬼道流の達人は、『鬼』に例えられるほどのもので、私にも一応、『鬼神』という通り名があるんだけど。失礼しちゃうわよね？私のような漢女おとめにそんな名前つけるなんて。

…今、字がちがわなかった？

……まあ、いいわ。続けるわね？

それで、私はその鬼道流を、今四季ちゃんに教えているというわけ。

鬼道流は私の家系に伝わる武術で、継承者が、最も才能があると思  
った者に伝えるというもの。

まあ、才能云々の問題は大丈夫だと思うわ。

四季ちゃんは、鼻屑目に見ても天才。いえ、『鬼才』といってもいいわね。

気の量は、膨大。今はまだ操りきれていないみたいだけど、潜在能力でいうなら歴代一位の量ではないかしら？

反射神経も一級品。頭も悪くない。

でも、一番驚くべきなのは、その学習能力。

気での身体強化はまだわかる。修行を始める前に自分なりに練習していたみたいだしね？（五歳という年齢を考えればそれでも充分何  
だけどね？）

問題は身のこなし、回避の修行中に気づいた。

（これは私の動き…！？）

そう、四季ちゃんはこの修行中に、私の動きを身につけ、自分の動きに取り入れていた（……）のだ！

（有り得ない…！？）

そう普通はあり得ないのだ。いくら自分が、わざわざ、目視できる

ほどのレベルに抑えている（……）とはいえ、五歳児が、最速の武術たる鬼道流の達人である自分の動きを捉え、その動きを粗削りながらコピーするなどということわ。しかも、その動きはどんどん鋭くなっていく。

奉山は、息子の才能の高さに喜ぶと同時に、不安に思う。

大きすぎる力は、人を支配することを、奉山は経験上知っているからだ。

川神院の『しゃかどつ ぎょつぶ釈迦堂刑部』。

あの武道の殿堂ともいえる場所で、師範代を担っているあの男が例としてわかりやすいだろう。

奉山は『闘争を楽しむ』ということに関しては、別に構わないと思っっている。

確かに行き過ぎはよくないが、『人』であるからには、自らの力を他者と競い合うことに喜びを感じるのは当然だと思っているからだ。奉山が、釈迦堂を危険だと思っ理由は、『誰が相手でも、力を容赦なく振るう』ことにある。

実際に見たわけではないが、川神院に入る前は、いくつか傷害事件を起こしているようだ。

奉山は確かに闘争を楽しむのはいいと思っっているが、闘争にも値しない弱者（武力的な意味で）相手に、理由もなく武を振るうことは、あつてはならないと思っっている。

自分の息子は類い希なる才能を持つて産まれたが、力に呑まれ、あの男と同じような道を辿ることになるのではないかと、奉山は不安になつたのだ。

しかし、

『自分と自分の周りに降りかかる理不尽をはねのけるほどの力が欲しい』

息子が語った思い。

『自分のためだけ』ではなく、『他者も守るため』にも強くなりたいという心の叫び。

他人が聞いたら、息子の思いを『きれいごと』と笑うかもしれない。

しかし、奉山が見た息子の目には嘘はなかった。

(なら……)

ならば、自分は息子の背中を押してあげよう。  
自分は息子を助けてあげよう。

それが息子のためならば。

(いざとなったら私が止めればいいだけだしね)

「さてと……」奉山は奉山の攻撃に当たって気を失っている息子を見る。

「今は、気を失っているこの子を起こしてあげるのが父親としてすべきことよね？」

「この愛しい我が息子を……」。

閉話 『我が息子』 終わり

閑話 『我が息子』（後書き）

どうでしたでしょうか？

『マジ恋』の二次創作を見ると、鉄心が百代の在り方に心配しているような描写をなんとか見たことがあるので、才能チートを持っている主人公を父親である奉山が心配する描写があってもいいのではないだろうかということを書きました。

今回は母親、晴美が奉山と四季について考えている話です。それが過ぎたら本編に入ります。

以上、ラドウでした！！

閑話 『母として』（前書き）

今回は奉山と四季について、母親晴美が考えていることの話です。また短いですがご勘弁を。それと呂家について、もう少し詳しい説明があります。

お気に入り気づいたら60超えていたんですが、100超えたらなにかやったほうがいいんですかね？

……まあいいや！ではどぞ！！

## 閑話 『母として』

閑話 『母として』

わたし、篠宮晴美には一人の息子がいる。

その息子の名前は『篠宮四季』。

わたしの愛する夫、『篠宮奉山』との間に産まれた愛しい息子だ。

お手伝いもしてくれて、聞き分けもいい、自慢の息子なのだ。……  
親としては、わがままのひとつでもいつてくれたらなおいい。（もちろん、わがまますぎるのも困るけどね？）

その息子が、最近夫に武術を習いだした。  
夫の使う『鬼道流』は自分の子供のなかで、もっとも才能のあるものに教える武術。

これは『一子相伝』のように思えるが、才能があるなら、一族でなくてもよく、最悪、養子でも構わない、『才能』を重んじる流派。

確かに息子ならその後継者たる才能があると思う。

普通に荷物を運ぶときに自分で気の身体強化を使っていたみたいだしね。……本人はばれているのに気づいていなかったみたいけどね。

何故私がそんなことを知っているかというと、私自身も武術家だからだ。いや、『元』武術家というべきか。

【呂家】という集団がある。

この集団は、武術家の集団ではあるが、決して『武術の流派の一門』ではなく、『様々な武術家が集まった集団』であり、武術の殿堂、『川神院』が、『最高の武術家を目指す』集団ならば、『呂家』は『最強の武術家を目指す』集団であり、要するに、『流派の枠を超えて、切磋琢磨しよう』という集団なのである。

もちろん川神院のように、流派の技を門外不出としている流派などは参加していないが、自らで一流派を築きあげた『剣聖・黛十一段』、ドイツ軍人の名家である『エーベルバツ八家』なども参加している。

私はその呂家の武術家の一員だった。

これでも呂家の幹部候補の一人にも数えられたんだから！……でも私は武術を辞めなければならなくなった。

私は元々病弱で、今も、『葵医院』だったかしら？その病院に通っているのだけれど、長年の闘いの日々が祟って、病状が悪化したようなので、それで仕方なく武術家を引退したの。

ああ、勘違いしないでね？

私は今、とても幸せなの。

愛する夫と自分のお腹を痛めた子供に囲まれて。不満をいうなら、夫も四季君も、私に料理を作らせてくれないことだけだ。

ちよつと失敗しただけで、台所の立ち入りを禁止するのは酷いと思わない？

……そりゃあ、お鍋の底に穴をあけたのは悪いと思ってるけれど……。

話しをもどしましょう。え〜と、どこまで話したかしら？そうそう、四季君が夫に武術を習い始めたところだったわね？

夫は、最初四季君に鬼道流を教える気はなかったらしいわ。

それでなんでか理由を聞いてみたのよ。四季君は親の鼻屑目なしで見ても、天才と違っていいほど才能があったから。

聞いてみたら、どうやら夫は四季君が、鉄心さんのところの釈迦堂さんのようになるのを恐れていたみたいね。

『釈迦堂形部』しやくわだうがたべ

武道の総本山といわれる【川神院】の師範代にふさわしい実力を持っているが、その性質に問題がある。

「人間的には嫌いじゃないんだけどねえ。」

闘争を好むのはまだいい。あまりにひどすぎなければ、闘争を好む性質は自らの技能を上げるきっかけになるからだ。

問題は『力を振るうのに容赦がない』というところだろう。詳しくは知らないが、川神院にくる前にも、ちょっとした問題を起こしていたようだし。

もともとあの人は、川神院の精神性を尊重する性質にあってはいないようだ。たまにここにきて、愚痴っていたし。近いうちに川神院を追い出されるのではないかしら？まあひよっとしたら、あの人にとってはそれが一番いいのかもしれないけれど。

夫はそんな彼のように、四季君が平気で力を振るう人間になってしまつのではないかと、心配しているようだ。

……ばかねえ。

四季君がそんなことになるわけないじゃない。

四季君はやさしい子。いつもお手伝いをしてくれるし、近所のおじいちゃんやおばあちゃんの手助けもしてくれる。

入園して一カ月しかたっていないのに、生徒たちのまとめ役になってくれて、仕事がとつても楽になったと幼稚園の先生もいつてくれたのよ？……最後の先生として仕事しろよ、と思わないでもなかったけど。

それになにより……私とあなたの息子なんだから？（惚気）

そういうと、夫は決心したようで、無事四季君に鬼道流を教えることになった。今では日曜や、幼稚園から帰ったら修業をする日々になっている。

ちなみに四季君たちが修業しているのは川神市の中にある、呂家が所有している山。そこを修行場としているの。こういうとき、呂家に所属してよかったと夫がいつていたわね。

いろいろ悩んでいたくせに、息子に教えることがうれしいのか、とてもいい顔をしていたわねえ。四季君もうれしそうにしていたし。なんか嫉妬しちゃうわ。

それにしても遅いわねえ。もう7時になるんだけど。朝の修業から

まだ帰ってこない。そろそろ朝ごはんにしたんだけど、冷めちゃ  
うわ。(朝ごはんは奉山が作った)

「(チラッ)」

……台所への立ち入りは禁止されているけど、料理を温め  
るくらいならいいわよね。……それともう一品作るくらい  
なら作ってもいいわよね？

夫と息子が頑張っているんだもの。これくらいはしないと。私が二  
人を支えてあげないとね。

母として……

「さすが、奉山さんいい味ね。……でもこれを入れてもい  
いんじゃないかしら？」

ちやぽんっ

その日、篠宮四季は幼稚園を休み、居酒屋トビウオは臨時休業することになったのはいうまでもない。

「ごめんなさい（涙!）」

閉話『母として』 終わり

閑話 『母として』（後書き）

どうでしたでしょうか。元武術家として、母親として晴美さんが考えていることを書いてみました。

晴美さんは夫と息子を見守って、支えてあげようというスタンスなようです。

いいお母さんですね。料理以外は（笑）

ちなみに、このお母さんは好きな男のタイプは『自分より強い男』というタイプ。好みの男と結婚でき、愛しい息子を産むことのできた彼女は間違いなく幸せといえるでしょう。よかったね。

今回は本編。幼稚園の様子を書きます。………そういえば五歳といえば幼稚園はいつてんじゃね？と思って書くことにしたのは秘密だ。（秘密にする気がない）

今回はこれまでで。

以上、ラドウでした！！

## 第二話 幼稚園ですか。（前書き）

投稿です。

前回のあらすじ

武術の修業を始めた。

今日は主人公幼稚園での話。上手く書けたか心配です。

一応原作キャラもです。

ではござ。

## 第二話 幼稚園ですか。

第2話 幼稚園ですか。

サイド・四季

父さんに稽古をつけてもらいはじめてから、すでに1ヶ月近くたった。

自分でいうのもなんだが、めきめきと力をつけている………たぶん。

比べる相手がいないから、いまいち自分の強さがわからないんだよねえ。

それをいつたら父さんは、もう少し上達すれば、相手を用意するといっていた。

なんか「鉄心ちゃんの孫娘なんかがいいわねえ。強いっていったし。」とかいっていた。

………やばいな。なんかおかしなフラグがたった気がする。

今は気功波の練習をしている。

『気功波』は、本来、体内にある気を体外に放出する攻撃方法で、ドラゴンボールのかめはめ波を思い浮かべてもらえればわかるだろ

う。

鬼道流は体の身体強化を重視するため、いらないうちに思うか、そうでもない。

手札は多いほうがいいし、気功波は気の制御能力をあげるのに役にたつ。

鬼道流の気功波の技は二つ。

一つは『魔弾<sup>またん</sup>』。

小型の気功波で、威力はないが、数がうてるのと、追尾能力を持っているのが利点。

もう一つは、奥義『鬼道砲』。

両手の手のひらを前にむけ、脇に構え、その手のひらに気を収束。そして放つという貫通能力に特化した技。

……操気弾とギャリック砲ですね、わかります。

ていうか、操気弾はともかく、なんで王子砲！？そこは普通にかめはめ波でよくない？そこんどこどうなんだ？

(川神流ですでにかめはめ波もどきがあったから、こっちは王子砲もどきにしようと思った。反省も後悔もしていない！)(by作者)

っ！？誰の声だ、今の。……まあいいや。

そついうわけで、今はその二つの技をいつもの修行場で練習している。

ああ、ちなみに俺がいつも修業をしている場所は、呂家が所有している場所で、その山奥で行っている。

呂家ってなにかって？

【呂家】

それは大陸の武術家一族に端を発する集団。

これは、川神流が『最高の武術家』になることを目指す集団とするなら、呂家は『最強の武術家』を目指す武術集団で、要するに、『流派の枠を超えて切磋琢磨しようぜ！』というのを目的としているらしい。

ちなみにそのなかで最強の武術家は、呂家の歴史上最も有名な武術家の字である、『奉先』の称号を得るといふ。

………今代の『奉先』は家の父さんだったりする。

………本当、トンデモ設定多くないか、うちの両親。母さんも元は呂家の武術家だったらしいし。まあ母さんが強い理由がわかったのはよかったけど………。

まあ、呂家の説明はこれでいいだろう。これが結構規模の大きい組織で、全国に修行場を持っているようだ。なんか申し訳ないな。呂

家の一員でもない俺がつかっちゃって。

まあ、最近はこの感じで修業に励んでいる。そして、俺は今、

「こんにちわ、四季君」

「こんにちわ、先生。」

幼稚園にいます。

え？なんで幼稚園にいるのかっていわれても、もう俺も五歳だから普通に幼稚園に行くぞ？決して作者が、「あれ、五歳ってことはこいつもう幼稚園いつてんじゃね？」とか急に気づいて書いたわけじゃないですよ？（メタ発言）……………本当ですよ？

まあそんなわけで、今回は俺の幼稚園での華麗なる（笑）日々を見てもらおう。……………さっきから誰にいつてるんだ、俺は？まあいいや。

「あ！四季君！！」

ん？おお！あれは！！

「くまちゃん、おはよう！」

「おはよう。四季君。」

こいつの名前は『くまちゃん』。(本名は知らない)。食べるのが好きで、家にも両親とよく来るので、自然に仲良くなった。

「くまちゃん、ほらこれ、家の新作！」にしんのパイ」。試食頼むよ！」

そういつて俺は幼稚園バックからしんのパイがいった籠をくまちゃんに渡す。(明らかにカバンの面積より籠のほうが大きいのは気にしない方向で)

くまちゃんは、子供ながらその舌の評価は確かで、うちの父さんも認めているほどなので、ときどきこうして試食を頼んでいる。

「わあ、本当にできたんだあ。」

「ああ、以外に大変だったんだぜ？結構臭いがきつかったから、それを消すのにいろいろ香草をためしたりしたり。俺も手伝ったんだ！」

今、俺がくまちゃんに渡したのは『にしんのパイ』。このあいだ、幼稚園で皆と一緒にみた『魔女で宅急便』に登場したニシンのパイをくまちゃんが食べてみたいといったのでうちで作ってみようという

ことになったのだ。

「お昼にあいつ（・・・）も誘って一緒に食べようぜ？」  
「うん。」

そういえばあいつはどこだろう。一緒に食べるならあいつも誘わないと。

「くまちゃん、忠勝は？」

「ああ、忠勝君なら、「よう。「あ、来た来た。おはよう忠勝君。」

今来たこいつは『源忠勝』<sup>みなもたかつ</sup>。うちの常連客の、『宇佐美巨人』<sup>うさみ きょじん</sup>さんの息子で、年齢の割に精神年齢が高く、話があい、仲良くなった。仲良くなった理由の一つにはお互いキャラの濃い父親のことを愚痴りあっていたというもある。

「よう、忠勝。例の物が完成したんだが、お前も食べるだろ？」

「・・・。。。。本当に作ったのかよ。お前もよくやるな。」

「まーな！。お客のにーずに答えてこそ料理人だろ？で、食べるか？」

「ああ、じゃあもらう。勘違いすんなよ！ただ料理がもつたいないからもらうんだからな！」

「わかってるよ。」

お前が素直じゃないことがな。

「二人ともそろそろ教室入らないと。」

くまちゃんの声が聞こえる。おっとっ！もうそんな時間か。

「じゃあいこうぜ忠勝。」

「ああ。」

そうして、俺たちは教室に入っていた。

あ、ちなみに俺たちは『バラ組』だよ。興味がない？そうですか（しょぼん……）

-----  
-----

「それでは二人一組になってくださいね。」

バラ組の山田先生がクラスの皆に呼びかける。しかし、

キヤッフキヤッフ。

効果は今一つのようだ。

「あわわわ。」

先生はあわてているだけで、どうしていいかわからないようだ。・  
・  
・  
しょうがないなあ。

俺は席を立ち、手を叩く。

そうすると、クラスの皆の視線が俺に集まる。あっ！くまちゃん菓子食ってる。あとで注意しないと。

「先生が困ってんだろ。お喋りはそこまでにして、とりあえず二人一組になるうぜ。」

俺がそういうと、クラスの皆は俺のいうとおり動きだす。先生のほうを見ると、

「（キラキラキラ）」

もの凄い感謝の目で見られた。正直そんな目で見えてくるくらいなら、もうちよつと、ちゃんとしてほしいのだが……。まあこの先生はなったばかりらしいから、しょうがないか。……。まあこの人のフォローばかりしていたら、いつのまにかクラスのまとめ役み

たいになつてしまつたんだが。

「さつてと。」

人のことばかり気にしていないで、俺も相方見つけないと。そういつて辺りを見回していると、

「あ、あの。」

「ん？」

遠慮がちな声が聞こえたほうにむくと、そこにはピンク色の髪の小柄な女の子がいた。確か……

「甘粕だつたけ？」

確か甘粕真与つていう名前だつたな。

「ひゃい、いっしょに組んでもらつてもいいでしゅか？はわわ、噛んじやつた。」

……どこのはわわ軍師だお前は。

「とりあえず、落ち着け。俺なら大丈夫だから。よろしくな甘粕。」

「は、はいよろしくお願いします。」

今日は二人一組になつて相手の似顔絵を描く時間。

あまり自信はないが、下手なものを書く相手に失礼なので、黙々と一所懸命に書いていると、

「篠宮君は凄いですね。」

甘粕が話しかけてきた。なんの話だ？

「なんの話だ？って顔してますね？」

「む。口にだしてたか？」

「顔にでてました。」

そういつて甘粕はほほ笑む。

む。ポーカーフェイスには自信があつたんだが。

「篠宮君はすごいです。さっきも山田先生のことも助けてたし。」

「あれはそうしないと、話しが進まなかったからだ。」

「それだけじゃありません。篠宮君はいつも困っている人に手を差し伸べてました。篠宮君は皆に慕われています。」

「……………」

むう。確かに懐かれている自覚はあつたが、こつも真正面からいわれるとむず痒いものがあるな。

俺が内心悶えていると、

「それに比べて私は……………」

甘粕が暗い顔をしている。なんだなんだ。どしたあ。

「どうしたんだ、いつたい。」

「私は皆よりおねえさんなのに、頼りないし、助けようと思ってもどうにもできない。さっきも先生を助けようと思ってても、どうにもできませんでした。」

そつえば、視界の隅でこいつがおろおろしているのを見た気がする。あれは先生を助けようとしてたのか。

「私は篠宮くんみたいになれないのかなあ。」

なにいつてんだこいつ。

「そんなの当たり前じゃん。」

「っ！」

だって、

「俺は俺、お前はお前だろ？」

「ふえ？」

なんか涙目になってこっちを見てきた。なんで涙目？（あなたのせいです）

「俺には俺、お前にはお前。それぞれの良さがある。だからそう悲観することないだろうに。」

俺は知っている。幼稚園で転んでけがをした子がいたら、真っ先に近寄って絆創膏をあげていたことを。落ち込んでいたらその子の話を聞いて自分なりに慰めていたことを。誰かが誰かに乱暴をしていたら体をはって止めていたことを。そのやさしい性格が、この子の良さだと思う。

「篠宮君……。」

ほめられたことがうれしいんだろう。少し頬を赤くして甘粕がこっちをみってくる。

「それに、今できないならがんばって、将来できるようになればいいいな。」

「っ！？そ、そうですよね！将来なら私もいろいろ成長していると思っしー！ー！」

「あ、ああ。」

どうしてだろう。彼女が成長するビジョンが思い浮かばないんだが……特に身長。

「さ、そんなことよりさっさと描いちゃおうぜ。時間がなくなる。」

「はわわ。そうですね。」

ちなみに、俺が描いた絵を見て、「絵も上手いんですね……。」と、甘粕がさらに落ち込んだのは余談である。

そんな感じの、楽しくも愉快的な幼稚園生活を送っています。

こんな日々が続けばいいなあ、と思う四季であった。

「以外においしいね。」

「本当だな。」

「癖になりますね。」

おい、勝手に食べるな。俺も食う。

以上、篠宮四季の華麗なる（笑）日常でした！！

第二話 幼稚園ですか。 終わり

## 第二話 幼稚園ですか。（後書き）

どうでしたでしょうか。

初原作キャラがまさかのくまちゃん。でも主人公が料理屋の息子だから、美食家のくまちゃんができてもいいと思うんですよ。というか本名知らないんですが・・・調べたらでてくるかな。

忠勝は、巨人さんならうまい居酒屋があればいくと思うし、転生者の主人公は元々精神年齢が高いので、結構話があうと思うので友達にしてみました。

この時期には、まだ忠勝は引き取られていないというつつこみはなしでお願いします。

委員長をだしたのはなんとなくノリです。にしんのパイをだしたのもノリですww

あとわかっているとありますが、忠勝たちが食べているのはにしんのパイなのでそこのところよろしくおねがいします。

次はアンケートです。ヒロインとルートに関してです。出してほしいヒロインがいる人はぜひ答えてほしいと思います。

それでは、ラドゥでした!!

アンケート&情報提供求む。だしてほしいヒロインがいる人はぜひ答えていって  
連投です。

予告どおりのアンケート。

本当ならS組サイドにする予定でしたが、風間ファミリー入りした  
主人公も書いてみたかったのでアンケートにしました。

もしハーレム入りして欲しいヒロインなどがいたらぜひ答えていっ  
てください。

アンケート&情報提供求む。だしてほしいヒロインがいる人はぜひ答えていって

この『真剣で俺が転生者！？』その男【奉先】』を書いておくにあたって、元々S組サイドよりの話しを書くことと思っただんですが、一回それを置いておいて、あらためて方針を決めておこうと思います。

・ヒロインについて

この小説は、主人公ハーレムものですが、すでに決まっているヒロイン、小雪、百代、クリス、揚羽の他に、後三人ほどにしようと思っっています。今回はそれを決めようともいません。候補は以下の通り。

エントリーナンバー1、女は愛。二次小説では王道。椎名京。

エントリーナンバー2、風間ファミリーのポストマスコット。勇往邁進、川神一子。

エントリーナンバー3、礼を尊ぶ刀の達人。引っ込み思案な武道四天王。黛由紀江。

エントリーナンバー4、お嬢様と閣下の他は全てが有象無象に等しい親ばかり中將の刺客、マルギツテ・エーベルバッハ。

エントリーナンバー5、庶民は皆、高貴な此方の下僕。川神学園きつての噛ませ犬、不死川心。

エントリーナンバー6、準の嫁は俺の嫁！？。F組委員長、甘粕真与。

エントリーナンバー7、武術なんてできないけれど、オシャレなら

だれにも負けない。和菓子屋の娘、小笠原千夏。

エントリーナンバー8、作者は詳しいことは知らない。知っているのは西から来た武術家ということと、武道四天王ということだけ。情報提供求む。納豆小町。松永燕。

エントリーナンバー9、動くのはめんどくさいからいや。お昼寝と家族が大好き。板垣家最強。板垣辰子。

エントリーナンバー10、気に入らないやつは半殺し、名前をバカにするやつは全殺し！？大食漢のゲーマー。板垣天使。

エントリーナンバー11、そろそろ婚期が迫ってるので、結婚したい。けどヒゲはいや。あるいみ最強！？小島梅先生。

エントリーナンバー12、まさかのエントリー！？超大穴。そもそもヒロインじゃないんだが・・・板垣竜平

以上がヒロイン候補になっております。また最後のはシャレなのでご理解ください。(笑)

ちなみに京が三人のうちの一人名に選ばれたら、自動的に川神ファミリールートに行きますので、よろしくお願いします。

・勢力について

次は主人公が所属する勢力のことです。主人公の立ち位置を決めます。候補は以下の通り。

1・王道！風間ファミリールート

これは主人公が風間ファミリーにはいるルート。小雪も一緒にセツトで入ります。また前のアンケートで、京が入ったら自動的にこのルートになります。

このルートだと主人公がF組入りになります。冬馬たちはS組です。

2・これまた王道！葵ファミリールート

二次小説ならこっちも結構王道ですね。このルートだと、主人公はS組になります。また、風間ファミリーとは険悪な仲にはならず、健全なライバルみたいな感じにする予定です。この場合だとゲームなんかと違い、冬馬たちは敵になりません。

3・その年齢で！？川神学院教師ルート

主人公には完全記憶能力があるので、こっちもできなくはないかと。この場合はアンケートの結果に限らず、梅先生がヒロインになりますww

4・どこにも属さず。平穩が大事ルート

このルートは平穩を求めて主人公が2-Cに所属するルート。小雪も主人公を追って2-Cに所属します。最もこのルートだとなんだかんだで主人公は巻き込まれることになりましたがww

5・あえてどこにも属さず。アウトロールート

どこにも属さず、料理の修業に専念するルート。しかし、川神市の危機のためには立ちあがるという。作者的には書く自信がない（キツパリ

この二つがアンケートの内容です。答え方としては、例えばヒロインならば、

- 1・京
- 2・一子
- 3・由紀江

というような感じで書いてください。

ルートはそのまま書いてくだされば結構です。

期間は日曜日の朝8時までとします。振るっての参加。お願いします！

次は情報提供の件です。前に書いたとおり、作者はマジ恋の知識は二次創作でしか知りません。なので詳しい情報がわからないところがあるので、「このイベントは大事!」「こいつの過去にはこういうことがあった。」「これ忘れちゃ、マジ恋の二次なんて書きちゃだめだろJK。」という情報があったらぜひ教えてください。

今ぜひ教えてほしい情報は、

- ・英雄がテロにあった詳しい時期。
- ・松永燕の詳しい情報

特に二つ目は欲しいです。どんな武术を使うのか、何年なのか、何組なのか、風間ファミリーに入るのか、そもそも男か女か(女です

ね、冗談です）などなど、お手数ですが、お願いします。

他にも、「このイベントは書いてほしい。」「こんな日常がみたいなあ。」などのリクエストも受け付けてるんで、亀更新でもかまわないなら、どうぞおねがいします。

**アンケート&情報提供求む。だしてほしいヒロインがいる人はぜひ答えていって**

アンケートへの答えは、本文に書いてあるとおりに、感想版に投稿  
してくれば結構です。

ぜひ参加お願いします。できれば情報提供もしてほしいな。

ここにいけば、詳しい情報が手に入るみたいなものでもいいので、  
ぜひお願いします。

期限はタイトル、本文にも書いたとおり、11月13日日曜日の朝  
8時までなんで、それまでにぜひお願いします。

以上、ラドウでした!!

### 第三話 白の少女ですか。(前書き)

アンケートの結果発表です。  
アンケートの結果、

一位、辰子  
二位、京、由紀江  
三位、燕

となりました。二位が二人いたので困ったのですが、結局両方二位にして、次の燕もヒロイン入りさせちゃいました。テヘ・・・気持ち悪いですねすみません。

そして京がヒロイン入りしたことによって、ルートは自動的に『風間ファミリー』ルートに進みます。

たくさんのご回答ありがとうございました。

それにしても、他のヒロインのほうも強かったですねえ。さて、ここで聞きたいことがあるのですが、

- ・IF話として、他のルートのお話を書くか。(短編で)
- ・ヒロインの追加をするか。

というところですよ。

いや、アンケートをとっておいて悪いんですけど、さっき、「真剣で私に恋しなさい！」のサイトを見てみたんですけど、俺が知らないヒロインもいたんですよ。

これだったら、もう少し増やしてもいいんじゃないかと。まあ、なくても三人くらいですが。

IFのほうは、せっかくアンケートに答えてくれたのにこのままじゃもったいないかなあ、と。

この場合はそれぞれのルートを書くかも知れません。

どう思いますかね？まあいいか。

それでは本編です。今回はこの小説のメインヒロイン？が登場。それではどうぞ！！

前回のあらすじ

四季君の幼稚園での華麗（笑）なる生活をお送りしました。

### 第三話 白の少女ですか。

第三話 白の少女ですか。

サイド：四季

こんにちわ。篠宮四季だ。

今日は休日。ただいまここ川神市を探検している。

なぜかというと、父さんが昔から世話になっている人に頼まれてお手伝いにいつてるから、修行がお休みなのだ。なんでも犯罪者の縛や組織の殲滅などの仕事らしい。

大丈夫かな。（相手が）……………とりあえず相手はトラウマになることは間違いないだろうな。

俺が多摩川の近くを歩いているというと、

（ん？なんだあれ？）

目の前から、一人の女の子が前から歩いてきた。

その少女の髪は白髪で、その肌もまるで雪のような白さだった。確か、アルビノっていうんだっけ

（やけにふらふらしてんなあ。大丈夫か？）

話しかけてみようかと小走りで近寄ると、

ばたり  
「!？」

女の子が急に倒れた。つて、

「解説してる場合じゃねえ!？」

俺は急いで女の子に近寄って様子を見る。

四季は少女の体の状態を見る。

( 氣の流れが大分乱れているな。それに腕の細さから見るに……  
……… 栄養失調症かなにかか?)

救急車を呼びたいところだが、生憎自分はまだ五歳。  
携帯の所持は許されない。

( だったら………!?)

四季は少女を背負って走り出す。

母が待つ自宅へと少女を助けるために………。

これが、後に『戦鬼<sup>オーガ</sup>』と呼ばれる少年、篠宮四季と、榊原小雪の出  
会いである。

サイド：小雪

知らない天井だ。

「あれ〜、……ここどこ〜？」

ぼく、榊原小雪はいつも通りお母さんにご飯を抜かれて  
それでお腹がへって、それを紛らわすためにお腹がへって。それで  
道端に倒れたはず。

それが何で、外じゃなく、知らない部屋にいるんだろう？

小雪が自分の置かれた状況について考えていると、

ガチャ

「（ビク!?）」

部屋のドアが開き、そこから一人の少年が入ってきた。

その赤毛の少年は、小雪が起きているのをみると、安心したように笑いかけた。

「おお！ やつと起きたか、心配したぞ？」

心配？ なぜこの少年が自分のことなんかを心配するのか？

……あんななんて産まなきゃよかった！！

こんな親にもいらな*い*といわれた自分*を*。

小雪が考え込んでいるにも関わらず、件の少年、篠宮四季はそんな彼女の様子を気にした様子もなく、話しを続ける。

「とりあえず腹へってるだろ？ 飯作つたから一緒に食おうぜ？」

そこで小雪は自分の腹の虫の状態を思い出す。

するし、

ぐう〜！

小雪の腹の虫が大きく鳴る。

「ハハ！体は正直だな。下に飯が用意してあるからついて来いよ。」

そういつて、四季は小雪に背をむけ部屋からでていく。

「・・・・・・・・・・。」

一人部屋に取り残された小雪だが、おっかなびっくり彼の後についていった。

もうお腹が限界なこともあるが、彼女は自然に察したのかもしれない。

彼が自分がいま一番欲しいもの、

「優しさ」を与えてくれる」てを……………。

サイド：四季

「ばくばくばくばくー!」

「ほらほら、そんな急がなくてもだれもとらないから。」

いま、目の前で俺が拾ってきた女の子がものすごい勢いで用意された飯を平らげている。

よほど腹がへってたんだろう。用意した食事はみるみるへっていった。

母さんはそれをにこにこ見ている。

(しかし……)

なんでここまでになるまで、何も食べないでいたのか。見れば俺と同じ年、まだ親に庇護されている年頃だろう。

親はなにをしていたのだろう。こんな小さい子が倒れるまでほっとくなんて。

俺がまだ見ぬ少女の親に内心憤っていると、

「あ……あの……。」

白い少女がこちらを見ていた。どうやら自分の世界に入っていたらしい。

「どした？」

「あの、なんで助けてくれたの？」

「あん？」

何でってそりゃあ、

「困ってるやつがいたら助けんのが当然だろ？お前みたいな女の子ならなおさらだ。」

「っ！？そ、そう。」

本当にどしたんだ？

「あ、あの、これ？」

そういつて少女が差し出したのは、一つのマシユマロだった。ずっとポケットの入れていたのだろう。ぐちゃぐちゃになっていた。

「マシユマロ食べる？」

「くれるのか？」

「(コケ)」

「ちゃんきゅ。」

そういつて俺は少女からマシユマロを受け取り口に含む。甘さが口に広がる。まあ、形は味に関係ないからな。なかなかうまい。

そういえばまだこの子の名前を聞いてなかったな。

「なあ、まだ名前聞いてなかったよな？俺の名前は篠宮四季だ。」

「あらあら、四季君お母さんを仲間外れにしちゃいやよ？私の名前は篠宮晴美っていうの。よろしくね？」

「ぼ、ぼくは榊原小雪っていうの……。」

「そうか、いい名前だな。俺のことは四季でかまわない。よろしくな。」

そういつて俺は小雪に手を差し出す。

「??えつと?」

「握手だよ。これから友達になるんだから。」

「と、友達?」

小雪は戸惑っている。

「そ、前にテレビで見たんだけど、友達するのは相手の目を見て名

前を呼び合えば慣れるらしい。俺はお前と友達になりたいんだ。」

リリ〇ノでも、あれは名言だと思っただ、俺は。

「ぼ、ぼくと?」

「おっ。」

俺がそういうと小雪は黙った俯いてしまった。どうしたんだろう? . . . . .っは!ひよっとして俺と友達になるのがそんなに嫌だったのか?

「悪い、嫌だったか?」

そういつて手を下ろそうとするが、小雪は慌てて俺の手を握る。なんだなんだ。

「そ、そんなことない!ぼ、ぼくも四季と友達になりたい!」

おお、よかったよかった。てっきり嫌われたのかと思った。

「それじゃあ、これからは友達だな?よろしくな小雪!」

「っ!っ!うん!よろしくね、四季!」

それから俺は小雪とゲームをしたり、いろんな話をしたりしてその日を過ごした。小雪は本当に楽しそうにっていて、この笑顔を見ただけで小雪と友達になってよかったと思った. . . . .

「あら、もうこんな時間。小雪ちゃんもう帰ったほうがいいんじゃない？」

母さんの声に、時計を見る。

午後4時30分。少し早い気もするが、確かに小雪くらいの年齢の子供ならそろそろ帰らなければいけない時間だろう。

小雪のほうを見ると、

「・・・・・・・・。」

表情が暗くなっている。おかしいな。大体この年頃の子どもなら残念がることはあってもこんな反応はしないはず・・・・・・・・。

「なあ、小雪。お前なんか家にあるのか？」

「っ!?!?」

小雪がビククリしたようにこちらを見ている。やっぱり。

「なあ、俺でよかつたら話してくれないか？俺は友達が困っているのに放っておくなんてできない。」

俺は小雪の手を握り、目を見つめる。俺の気持ちを伝えるのはこうするのが一番いいと思ったからだ。

小雪は悩んだ。

小雪にとって、四季は初めてできた友達。そんな四季に嘘はつきたくない。でも母親を裏切ることとはしたくない。

小雪は悩んだ。さんざん悩んだ。

小雪はいままでずっと耐えてきた。母親から暴力を受けても、存在を否定されても。どんなことをされても、自分は母親のことが好きだったから。

しかし、篠宮親子に出会い、そのやさしさに触れたため、その我慢も限界がきたのだらう。結局小雪は篠宮親子に話すことにした。今まで自分がどんなことに耐えてきたを……。

「実は……。」

ひどい。

最初に出てきたのがそんな感想だった。

実の母親が娘に暴力を振るい、あまつさえ存在を否定するなんて。

「（ギリっ！）」

俺がまだ見ぬ小雪の母親に憤っているよ、

ふあさ

「（ビクっ!?!）」

母さんが小雪のことを抱きしめていた。

「あ……?」

「大変だったわね？苦しかったわね？もう無理しなくてもいいのよ？」

母さんがそういうと、

「ふえ。」

小雪の目じりに涙が溜まりだした。

「もう……泣いてもいいのよ？」

そういうと、小雪の目にどんどん涙があふれてくる。晴美の優しさによって、小雪の心の堤防が決壊してしまった。

「ふ、ふえーん。痛かったよー、さみしかったよー」  
「!!」

「そうそう、その調子。」

「うえーん！」

小雪の鳴き声はしばらく続いた。

「まったく」

母さんにはかなわない。

それからのことを話そう。

小雪が泣きやんだ後、俺たちは話し合った。

「小雪をこのままにしておけない」と。

それからの俺たちの行動は早かった。

一度小雪を家に送り、小雪を虐待している現場を、俺が激写（父さんから隠密術も習った）。その場で取り押さえる。

そして、母さんが川神市の子供相談センターに通報。川神市はこの辺のことは徹底していて、すぐに小雪の家に来て、小雪の母親を連行していつてくれた。

小雪は寂しそうだった。それもそうだろう。小雪はあんなに酷い目にあっても、母親のことを好きだといっていたのだから。

それから、小雪は孤児？になったのだが、『榊原』という老夫婦が小雪を引き取りたいといってきた。

だから、小雪はその老夫婦の元にいったはずなのだが、

「これからよろしくねえ」

「なんでいんだ、お前。」

母さんに詳しい説明を聞いたところ、どうやら小雪のほうから家に来たいといってきたらしい。母さんも、「女の子も欲しかったのよねえ。」とそれを承諾。今に至るというわけである。

「」

小雪は俺の膝に座り、ご機嫌な顔でテレビを見ている。母さんはいかにことそんな俺たちをほほ笑ましそうに見ている。

「……はあ、まあいい。俺が強くなればいいだけの話だ。」

この新しい家族を守るために。

ちなみに小雪の話聞いて、犯罪組織を即効で潰して帰ってきた父さんを見て、小雪がその姿にもものすごい怯えてしまい、それに父さんがとてもショックを受けていたのは余談である。

第三話 白の少女ですか。 終わり

### 第三話 白の少女ですか。(後書き)

そうして榊原小雪は、篠宮小雪になったとさ

なぜ、小雪を小学生前に救済したかというと、そうしたほうがどのルートにいつても対応しやすいからです。

でも今回は無理矢理感がすごいorz……………文才欲しい……………。

風間ファミリーに接触するタイミングがつかめない。(泣き

まあ頑張りますけどね。

以上、ラドウでした!!

第四話 初めての試合ですか。 少し修正しました。(前書き)

ヒロイン追加の件ですが、マルさんを入れてみようかと思えます。クリスだけ立てるとなんか不自然になる気がして。

他は心はどうやって入れるか思いついたら。主人公はFに行かせるつもりなんで、なかなか難しいですよ。

千夏さんは、ヒロインより、見守るお姉さんキャラのほうが似合うと自分では思うんですよ。

一子は………どうしよう。ヒロインにしたい気もするし、忠勝との絡みも見たい気がするし。

というか、このままじゃヒロイン10人越えて、主人公がただの女たらしになる気が………。まあがんばりますけどねww

今回は作品最強のあの人が登場!………ファミリーより先にだして大丈夫かな。まあいいか。

それではああとぞ!!

前回のあらすじ

小雪救済

第四話 初めての試合ですか。 少し修正しました。

第四話 初めての試合ですか。

サイド：四季

いま俺の目の前には一人の女性がいる。

艶やかな黒髪に整った顔立ち。

意志の強そうな瞳は赤く、まるで宝石のような輝きを宿してる。

まさしく絶世の美少女とっていいだろう。

………。口元に浮かべる捕食者のような笑みがなければ  
だが。

「やっちゃんえ〜四季〜！」

道場の隅から、川神院の師範代や修行僧の傍にいる小雪の声援が聞こえてくる。

気楽にいいやがって、目の前にいる女はそう簡単にいくほど甘くないっての。

俺が心の中で愚痴っていると、

「そろそろいいかのお、四季君や。」

この道場の主であり、トビウオの常連の一人でもある川神鉄心さんが俺に訪ねてきた。

「あ、すみません。もう大丈夫です。」

「ふむ、ならば両者位置についてえ！」

鉄心さんの声で、俺と黒髪の少女は位置につく。

俺は目の前の少女を見ながら考える。

「これより、鬼道流、篠宮四季と、

川神流、『川神百代』<sup>かわかみももよ</sup>の試合を行うー！」

（なぜ、こうなった……。）

小雪が家の子供になってから数カ月。  
俺も六歳になったが、  
割と平穏な日々を送っている。

小雪を忠勝たちに紹介したり、小雪と新しい料理に挑戦したり、父  
さんから鬼道流の奥義を教わったり、まあ比較的平和な日々だった。  
そんなある日、

「他流試合？」

「そ、前に四季ちゃんってたじゃない？自分の今の強さがよくわ  
からないって。」

ああ、確かにそんなこといった気がする。

しかし、

「よく相手が見つかりましたね？」

実際はわからないが、鬼道流なんてあまり知名度がなさそうな流派。  
相手にしてくれそうなどころなんてなさそうだが。

「ああ、それなら大丈夫。うちの常連の鉄心ちゃんは知ってるわね  
？」

「？ええ、知ってますけど？」

川神鉄心。

うちの常連の一人で、父さんとは、「奉山ちゃん」「鉄心ちゃん」とよぶなかで、俺もお小遣いやお菓子をもらったりと、可愛がってもらっている。

しかし、普段の態度からは想像もつかないが、かつては世界最強とも呼ばれた武術家で、現役を引退した今でも、その実力は健在らしい。

今はこの川神市で、後進の教育に熱をいれているようだがって、まさか！

「父さん、まさかとは思いますが、その他流試合の相手って。」

「察しがいいわねえ。そ、他流試合の相手は、

川神院よ」

……おーまじっつと。

【川神院】

日本三山の一角に数えられる武術の最高峰ともいえる道場。

その強さは、ただの修行僧でもそこらの武術家程度なら手も足もでないほどだという。

そして今現在俺たちは、

「・・・・・・・・・・。」

「おつきい〜！」

その川神院の前に立っていた。ちなみに小雪はおもしろそうだからとついてきた。他人ごとですか、そうですか。

(なんでこうなった)

川神院つてあれだろ？かめはめ派とか、目からビームとかがデフォの流派だろ？そんなところの人間と試合なんて俺死んじゃうじゃん！？（君も同じようなことできるでしょ！？by作者）

俺が密かに戦々恐々としていると、

「たのも〜！連絡しといた篠宮ですけど〜！！」

ちよっ！まっってお父さま！？まだ心の準備が！？

ギィィ

「（ビク！？）」

中からでてきたのは、恐らく二十代過ぎの青年。

「はい、はいどちらさま〜？」

けだるげな雰囲気だが、俺にはわかる。

（強いっ！？）

恐らく今の俺ではもって五分ほどだろう。

そんな俺には目をくれず、その青年は父さんの顔を見て驚いていた。

「こいつあ、おどろいた。誰かと思ったら奉山さんじゃあないですか。」

「久しぶりねえ、釈迦堂ちゃん。」

ん？父さんの知り合いか？

「見た感じ大分強くなったみたいねえ？さすが、川神院の師範代と  
いったところかしら？」

師範代！？川神院の！？どおりで強そうな訳だよ。

「ハハハハ！あなたに誉められるとは光栄ですわ。それで？今日は  
どういったご用件で？というか、」

そっちの小僧はだれです？

ぞあ!?!

気当たりというものがある。自分の気に指向性をもたせて相手を威嚇するという技だが、達人になるとそれだけで格下の相手を失神させることができるという。

そんな達人の一人である釈迦堂形部の気当たりを四季は、

ギンっ!

「ほう……。」

「ふう……。」

はねのけた。

鬼道流、【鬼返し《きがえし》】

これは、相手の鬨気に自らの 鬨気を少しずらしてはねのけ、相手のリズムをくずす技。

それに釈迦堂は感心したような声をだす。

（なんつう小僧だ。今の技もそうだが、その技を使用可能にした精

密なまでの気の制御能力。それだけなら師範代に届くかもしれん)

「今日はうちの息子と鉄心ちゃんの孫娘で試合をしようとおもってねん・・・ていうか、その様子じゃ知ってたでしょ。うちの四季ちゃんのことを試した見たいだし。」

そういつて奉山は笑う。目は笑ってなかったが・・・。

そう、今日の試合、『百代VS四季』の他流試合は師範代である釈迦堂もちろん知っているわけである。そこで、奉山と直接面識があった釈迦堂が案内役を買って出た。わざわざ釈迦堂が案内役を買って出たのはかつて自分を完膚なきまでに負かした奉山の息子に興味があつて、試してみたわけである。

結果は予想以上だったが・・・。

「ハハハ、奉山さんの息子っていうから興味がでてきちまってね。だからまあそんなに睨まないでくださいよ。」

釈迦堂は笑っているが、額に冷や汗が流れている。

いくら川神院の師範代といえど、鉄心と同格の武術家のプレッシャーはきついようだ。

それに、実は釈迦堂は奉山と戦闘した経験があり、完膚なきまでに叩き潰されたため、その時の記憶も働いているのだろう。

もっとも戦闘狂の釈迦堂のこと、やるとなったら、喜んで奉山とや

りあつたろうが。

「それじゃ、そ「釈迦堂さん!」・・・百代。」

釈迦堂を呼ぶ声が聞こえたのでそちらのほうをむくと、そこには四季と同年代ぐらいの少女がいた。

「なにしてた、修練場で待ってるっていったらうが・・・。」

「いや、さつき、大きな気がしたんで気になって。お!お前が今日の対戦相手か?」

そういつて少女、川神百代は俺の顔を覗き込んだ。

端正な顔立ちだが、そんなことよりも気になったことがある。

(目がキラキラしてる。)

まるで、獣のような、なにかに飢えているような目が気になった。なにが彼女にこんな目をさせているのだろうか。

百代さんは俺を見て、満足そうな顔(なにがは知らないが)をして、

「うん、合格だ。」

・・・

「は、はあ。」

なにがだろっ？

「よし、じゃあさっそく道場に行くぞ！」

そういつて、百代さんは俺の手をとり、走りだす、って!?

「ちょっ! まっ!?!」

「ハッハー！」

そうして俺は百代さんに連れ去られた。

ちょっ! 足がもつれる!

俺が百代さんの行動に困惑していると、

「じつらー!!」

「いたー!?!」

百代さんの頭の上に拳が落ちていた。

「……は？」

俺が突然の事態に驚いていた。いったい何が起こったんだ？

「こら、もも。貴様修練場で待つとけといたのに、なにをしておるか!!」

「っ!？」

いつの間にかそばに世界にその名を轟かす武神、川神鉄心がそこにいた。

(いつの間にか?)

気配を探る術は父さんに教わったはずなのに・・・

俺が川神院のレベルの高さに驚いていると、

「いきなりなにすんだじじい!？」

鉄心さんの拳を受けて沈黙していた百代さんが復活した。

「なにもこうもあるか! いいつけはちゃんと守らんか、このバカ孫が!!」

「だからってあそこまで力入れて殴ることないだろ!!」

「やかましい! 罰として今月の小遣いを減らすぞ!!」

「ちよっ、それはないだろ、じじい!!」

「・・・・・・・・・・。」

鉄心さんたちは俺を置いて、喧嘩を始めてしまった。

その後ろではそれを呆れた目で見てる父さんと釈迦堂さんがいる。

「はあ・・・・・・・・・・。」

なんかいろいろ考えてた俺がバカみたいだ。

(とりあえず、)

今はあれをとめよう。

(小説はなしがすすまないし)

最近、ナチュラルにメタ発言をかます、四季であった。

それから、鉄心さんに非礼を詫びられ、修練場に連れてこられて、

今に至るといふことである。

周りには見学の修行僧たちがいる。

たくさんいるなあ。と思っていると、

「おい。」

おっと自分の世界に入っていたようだ。

「何ですか？」

見ると彼女、川神百代は不満そうにこちらを見ていた。

あれ？何か気に障ることもいったらだろうか？

「構えないのか？」

そういわれて俺は自分の状態を見直す。

両手を脇に下げ、だらんと下げている。いわゆる自然体というやつだ。

ああ、なるほど。これは傍から見たら、構えてないように見える（  
・・・）な。

「ああ、大丈夫です。これはそういう構えなんで。」

鬼道流【無構え】

鬼道流は最速の武術。  
その速さはあらゆる武術に勝る。  
故に構えはいらす、  
故に【無構え】。

まあようするに、鬼道流においては、構えないことこそが構えということである。

「まあ、そういうことなら。」

と、百代さんは納得したのか自分の位置に戻って行った。

俺は百代さんを見る。

川神百代

武神、川神鉄心の孫娘にして、川神一門きつての天才。  
さつき、修行僧の人に聞いたところ、その才能は将来的には鉄心さんを超越することが確実視させるほどだという。

（おもしろい・・・）

川神院に来る前はあまり乗り気ではなかったが、今の四季は体中の血が滾っていた。

それは、才能チートをもらったために、力に酔ってしまったのかもしい。

それは、雄としての本能かもしれない。

それは自らの体の中に入っている、『鬼神』奉山の血なのかもしれない。

ない。

まあ、そんなことを考えてもしかたがない。今、篠宮四季を支配しているのはたった一つ。

強者と戦う喜びただ一つなのだから。

自然に口に笑みが浮かぶ。百代さんのほうを見ると、  
ニイイ。

百代さんも笑ってた。

ふふふ、望むところだ。

「東方、川神百代!!」

「おう!!」

さあ、川神百代!

「西方、篠宮四季!!」

「はい!!」

俺と真剣<sup>マツケン</sup>で、

「それではしあいいいいいいいい、かいいいいいい!!」

死合おうかあああああああ!!

今川神院で、未来の『武神』と『戦鬼』がぶつかりあった!!

第四話 初めての試合ですか。

第四話 初めての試合ですか。 少し修正しました。(後書き)

主人公。プチ戦闘狂化(笑)

というか、こういう作品に入ると、少なからず、戦うのを楽しいと思つ心はでてくると思つんですよ。

今回はそれをだしてみました。

今回は主人公と百代の試合です。百代目線からスタートです。

とりあえずじっくり考えようかな。今回クオリティ下がった気がするし。ははは・・・はーあ。

最近また書いてみたいネタができた。リリカルなのは世界で転生者を狩る話して、

ゼロ魔の烈風カリンがリリカルなのは世界に転生。ベルカ式の魔導師となり、欲望にまみれた転生者たちと戦う。その名も『リリカルまじかる烈風カリン!?!』みたいな感じで。

「烈火の将」というので、なんかこういうのを思いついた。「烈火がありなら烈風もありじゃね?」という感じで。

まあ、この場合は、女の子のままにして百合にするか、男の娘にして、ハーレムもどきにするか。

まあ、作るとしてもまだですけど。

ではまた次回。

以上、ラドウでした!!

閑話 『未来の武神は歓喜する』（前書き）

すみません。前回対百代との予告をしましたが、そのまえに閑話を入れました。

今回は前回の話の百代サイドの話です。

百代と四季が対戦するまでの過程の話です。百代の心情が難しい。出来はあまりよくありませんけど、それでもよかったら見てください。

それとヒロイン追加の件ですが、マルギツテをヒロインに追加します。

心は試しにフラグをたててみて、そのままヒロインにいけそうなら、そのままヒロイン入りに。

それと、風間ファミリーの話はまだ始まってませんが、忠勝をファミリー入りさせようと思います。

それでは今回のお話をどうぞ。

閑話 『未来の武神は歓喜する』

閑話 『未来の武神は歓喜する』

サイド：百代

私の名前は川神百代。

武神・川神鉄心の孫娘にして、武道の総本山、川神院の跡取り娘。武道家の娘として、今より幼いころから修練を積んできた。

そのことについては文句はない。武道家の家に生まれた身としては当然だし、私自身も強くなる喜びを味わうのにのめりこんでいった。なにより、強者との戦い。あれは格別なものがある。なんと吹き飛ばされても、なんと叩き伏せられても、それでも私の中の楽しいという感情はなくならず、ますます強くなっていった。

しかし、最近気づいてしまったことがある。。

まだ7歳の私とともに修練している中年の修行僧。彼は何年ここで修業しているのだろうか。彼はなぜ、

『自分より弱いのだろうか？』

そう、本来なら武のエリートと呼んでもいい、川神院の修行僧たち、その修行僧たちの実力を、自分は齡7歳にして超え始めてしまった。今では修行僧でもトップクラスの人間でしか、私の相手は務まらない。なくなっていた。

しかし、それも後数年で超えてしまうという確信が私にはあった。

敏捷性、瞬発性、筋力、持久力、反射神経、そして気の総量。武神の孫としての血は、あますことなく私の体の中にあつたからだ。

今はまだいい。まだ修行僧の兄弟子たちでも私の相手はできるし、師範代の猛者たちに総代のジジイもいる。だが、五年後は？十年後は？

それは生まれながらにして最強の名を約束された武神。それゆえの孤独。彼女はそれが将来的に自分を襲うことがわかっていたのだらう。

故に彼女は焦っていた。

自分についてこれるものはいないのかと。

故に彼女は飢えていた。

自分と対等に戦えるものはいないのかと。

だから彼女は恐れていた。

自分は一人になるのではないかと。

そんな思いを抱えて修練の日々を送っていると、

「他流試合？」

ジジイの部屋に呼び出されて申し渡されたのは、他流試合の話だった。だが、その手の話だったら、特にめずらしくもない。

川神院は武道の総本山と呼ばれているため、世界中の腕自慢たちが挑戦してくるのだ。もっとも、そのほとんどが修行僧にすら勝てない腕なのだが……。

しかし、他流試合に私自身はまだでたことがない。実力うんぬんの前に、私自身の年齢がまだ一桁台であるため、「川神院では子供しか戦えないのか。」と、川神院が軽くみられる。もしくは、相手に対して非礼にあたるという理由からだ。

少なくとも川神院で準師範代クラスの實力にならないと他流試合の場には立たせてもらえない。そのはずである。

なのに、

「私がか？」

「うむ。」

ジジイが頷く。いったいどういうことなんだ。とりあえず、どんな相手が聞いてみるか。

「ジジイ一体どういう相手なんだ？」

「子供じゃ。」

「……………は？」

「……………」

ジジイの言葉にすつとんきょうな返事をしたのは、川神院で師範代を務めている釈迦堂さんだ。もう一人の師範代である、ルー師範代も釈迦堂さんのように声はだしてないが困惑しているようである。

「総代、冗談きついで？百代の相手はトップクラスの修行僧でも最近きつくなってるんだ。子供に百代の相手が務まるかよ。」

そう、私は今まで、川神院の跡取りとして厳しい修練を積んできた。そりゃあ、他人より才能はあると思うが、少なくとも同年代には敵はいないと思っっている。

普段は釈迦堂さんと、その武術に対する姿勢から反発しあっているルー師範代も同感とばかりに頷いているし。

しかし、ジジイもそれは予想の範囲内だったらしく、気にしたようすはない。

ルー師範代がさらに言葉を紡ごうとしたとき、ジジイが呟いた。

「それが『鬼神』の息子だとしても、かのお？」

「「っ!？」」

師範代の二人の空気が変わった。

な、なんだいったい。

困惑している私を放置して、二人はジジイを問い詰める。

「て、鉄心様！鬼神とは、あの篠宮奉山殿のことでもいいのデスカ。」

「ふおおおお、わしは少なくとも、それ意外に鬼神と呼ばれているものはおらんよ。」

「こいつは、驚いた。あの人に息子がいたなんて知らなかったぜ。」

「そういえば釈迦堂は奉山ちゃんとは面識があるのじゃったのう?」

「いえまあ、やんちゃしてたときに完膚なきまでに叩き潰されましたね?あの容姿とあいまって、忘れられませんよ。」

「ふおおおお、それもそうじゃのう。奉山ちゃんはいんぱくのある見た目じゃからのう。」

「ふうむ。それが本当なら確かに百代の相手が務まるかもしれないネ。」

ええい!私を置いてけぼりにするな!!

「おいジジイ!いったいその奉山というのは誰なんだ。私にわかるように説明しろ!」

「ジジイとはなんじゃ、ジジイとは!そういえばモモには話したことがなかったのう。」

そうしてジジイは篠宮奉山のことについて話しはじめた。

曰わくジジイにはライバルと呼べるものが二人いて、

一人は『ヒューム』。ジジイと表舞台で最強の座を争った男で、今は日本三大名家の一つ、【九鬼家】に仕えているという。

そしてもう一人が話にでてきた『篠宮奉山』であるらしい。

彼は呂家という武術家集団の一員で、その集団とは、簡単にいえば「流派の枠を超えて最強の武術家を目指す」という集団であり、奉山はその呂家のトップ、「奉先」の称号を持つ武術家であり、その実力は裏世界最強といわれているという。

私はそれを聞いて喜んだ。

まだみぬ猛者の話を聞いたのもそうだが、それほどの武人の息子ならば、もしかしたら、……

私はその試合を受けた。

そして試合当日。私は修練場で待っているといわれていたがまちぎれず、大きな気の気配を感じたので、その気配にむかっていった。

そこにいたのは予想以上の存在だった。

一人は色黒の肌をした筋骨隆々の男。女言葉を使っていて少し気持ち悪かったが、その立ち振る舞い。釈迦堂さんを圧倒する威圧感から、そいつが噂の篠宮奉山だということがわかった。

(そして……)

その側にいたのが、あいつが篠宮四季なのだろう。

近くで観察してみた結果、

予想以上だった。

重心、配置の取り方、筋力バランス等々。

気の総量も申し分ない。

見た目は優男だが、間違いない。

こいつは私の同類だ。

強者に生まれた人間だ。

そして今、私は修練場でそいつとむきあっている。

そいつは両手を脇に置き、ただ立っているように見える。

初めは舐められているのかと思ったが、相対してみても初めてわかる。

(攻撃が通るイメージが沸かない!?)

そう、いつもなら攻撃が通るときはしっかりとそのイメージが沸くの  
に今回はそのイメージは沸かなかった。

ニイイ

思わず顔に笑みが浮かぶ。

(これだ、これを待っていた!)

私を包む感情は歓喜。

体中の血が燃えているようだ。

ふと、四季のほつを見ると

ニヤリ

奴も嗤っていた。

嬉しそうに。

楽しそうに。

私と同じように。

ハハハハ。そうか、お前も私と同じか。

何故だろう。心が温まる。

孤独じゃないということがこんなに嬉しいことだったとは。

「両者構えい！！」

ジジイの声が聞こえ、私も構える。

四季も例の構えない構えをしている。

その隙が有りそうで無い構えを見ると感情が高ぶるのを感じる。

奴はどんな技を魅せてくれるのだろうか？

奴はどんな力を魅せてくれるのだろうか？

まあいい、直ぐにわかることだ。

「東方！川神百代！！」

「おう！！」

ジジイの呼ぶ声に気合いを入れて答える。

さあ篠宮四季。

「西方！篠宮四季！！」

「はい！！」

私と真剣で、

「それでは、しあiiiiiiiiiiii、かiiiiiiiiiiii……！！」

死合おうかあああああ！！

今川神院で、未来の『武神』と『戦鬼』がぶつかり合った！！

閑話 『未来の武神は歓喜する』終わり

閑話 『未来の武神は歓喜する』（後書き）

どうでしたでしょうか。

百代の心情を搔いてみたのですが。上手く書けたか心配です。なんか意味分かんないところもあるしorz・・・。

次回はとうとう対百代戦。作者の初、戦闘描写！・・・自身がねえ（おい。

というわけで、以上！ラドゥでした！！

第五話 未来の武神との真剣へマジく勝負へバトルですか。(前書き)

どうも、ラドウです。連投します。

今回はとうとうVS百代戦。そして作者の初戦闘描写となります。下手くそだとは思いますが、時間つぶしにでもなれば幸いです。

後、お気に入り登録が200件超えたのですが、記念になにかやっただほうがいいですかね？

なにかやっってほしい場合はリクエストをくれるとうれしいです。

あと、今一子を主人公のハーレム入りをさせるか忠勝と絡ませるか迷っています。個人的に忠勝も好きなんです。そこらへんご意見いただけたら幸いです。

それでは本編をどうぞ！

前回のあらすじ

川神院で、川神百代との真剣勝負が始まった。

第五話 未来の武神との真剣〈マジ〉勝負〈バトル〉ですか。

第五話 未来の武神との真剣<sup>マジ</sup>勝負<sup>バトル</sup>ですか。

サイド・三人称

初めに動いたのは百代。

「ハアアアア!!!」

その拳は川神院の準師範代にもひけをとらないもの。

そこらの武道家ならそれだけで吹き飛ばすそれを、

ガキイン!

「なっ!?!」

四季は片足で抑えた。

百代が驚愕しているが、それは四季にとって大きな隙となる。

「はああああ!」

百代の拳を踏み台に繰り出すのは右後ろ回し蹴り。

「!?!?くっ!?!?舐めるなあ!!」

四季の奇襲を百代はかるうじて受け流した。

蹴りを外された四季に、大きな隙が生まれた。

はずだった。

「まだまだあ!」

「な!?!」

四季は体を捻り追撃を加える。

一撃目を防いで安心していた百代は、防げないと分かるとっさに後ろに飛び、ダメージを軽減する。

「ぐっ!?!?」

ダメージを軽減させたはずなのにこの威力。百代の額に冷や汗が浮かぶ。

今度攻めるのは四季。

足に気を纏い、一瞬で百代との距離を詰める。

(早い!?)

【縮地法】

気を使い、相手との間合いを詰める歩法である。

これは、鬼道流の技ではなく、四季が漫画を思い出しながらやった  
らできた技である。

今では、埃が殆どでないほど上達している。

「シッ!」

「ぐあ!?!」

四季の拳が百代の腹を捉える。

しかし、

ガシィ

「なっ!?!」

「つゝかまゝえた」

百代の腹に刺さった四季の拳を、百代が掴み取る。

何故百代が平気でいるのか？

それは、百代が腹に気を集中させ四季の拳の衝撃を抑え込んだためである。

これはいわば賭けだった。四季の攻撃力は百代に匹敵。いや、種類によってはそれを上回るものだ。

防御が薄い所をつかれると、それだけで試合が終わる可能性がある。

しかし、百代はその天性のバトルセンスで賭けに勝ったのである。

この絶好の機会、百代は今自分が使える最強の技で攻撃する。

「川神流奥義」

「やばー!」

大技が来ることを悟った四季はとっさに気の防御幕をはる。

しかし、

（無駄だ！）

「川神武双正拳突き！！」

ドゴオオオン！

「ガアアア！」

川神流の奥義は、防御壁ごと四季を吹き飛ばした！

「……………」

百代は四季が吹き飛ばされたほうを見ていた地点をつまらなそうに見ていた。

（見込み違いだったか。）

こいつなら、私も満足できると思ったんだが……………。

自分の奥義を至近距離でまともに食らったのだ。起き上がれるはずはない。

まあ、今後の成長に期待だな、と百代は鉄心に試合終了の合図をさせるためにその場から背をむけた。

まだ死合いは続いていたのにも関わらず).....)

トン。

「余所見とは余裕だな。」

「!？」

まさか!？

百代が首だけ振り向くと、



やばかった。

今のはやばかった。

新しい技を覚えていなかったら負けてたな、おい。

四季が何故無事でいるのかというと、鬼道流の奥義の一つを発動したからだ。

鬼道流奥義【鬼流し（きながし）】

相手の気の流れに自分の気を使って干渉し、受け流す技。

まさかこれを六歳児に使うとは思わなかった。

ていうか、なんだあの人。六歳であれほどって！絶対あの人も転生者だろう！！

攻撃自体も完全には受け流し切れなかったし。

俺は百代さんが吹き飛んでいったほうを見つめた。

普通ならあれで終わっただろう。

しかし、四季には確信があった。百代は、あの武神の卵は、確実に起き上がってくるだろうと。



「ふん！私のような美少女が誘ってやってるんだ。男ならそれにし  
っかり応えて見せる！！」

自分で自分を美少女とかいっつか普通。

あながち間違ってないところがムカツクし。

でも まあ、

「そこまでいわれたら、応えてみますかねえ。」

俺は静かに気を高める。

「くくく、それでいい！」

百代さんの気も、俺に呼応するかのようにながっていく。

「いくぞ、川神百代！」

「いい、篠宮四季！」

「うおおおおおおおおおおおおお！！！！」

武神と戦鬼の闘いは、激しさを増していく！！

サイド：小雪

「おお……。」

すごい、すごいよ四季。

ぼくは目の前の光景に目を輝かせる。

相手の女の子が四季のことを殴ったと思ったら、今度は四季がそれを避けながら蹴り、それを女の子が受け止める。

その動きはどんどん速くなって行って、ぼくの目じゃ見えなくなっていく。

「こいつはあ……たまげたぜ。できるとは思っていたがここまでとはな。」

「まったくネ。まさか百代が押されるとはね。」

なんか隣に座っている二人のおじさん（しゃかどつとルーっていったっけ？）がなんかいつてる。よくわからないけど、四季をほめていることだけはわかるぞ。さっすが、四季だね

「あそこまでだと、仕込むのに大分苦労したでしょう、奉山さん。」

お養父さん《おとうさん》は、えっと、しゃかどつ？のおじさんの言葉に、苦笑い。どしたの？

「実はそうでもないのよねえ。……あの子が武術を初めて

まだ1年なのよ?」

「!?それは本当ですか!?!」

「おいおい、それであの錬度かよ。とんでもねえなあ。」

おお〜!なんかわからないけどやっぱり四季すごいや〜!!

「でも、百代ちゃんも負けてないわよ?四季の攻撃にもしっかり反応してるし。」

そういうお養父さんの視線の先には、四季の攻撃を防いでいる、モヨヨさん?がいた。

むむむ、がんばれ四季!

「ああ、確かに。百代もこの闘いで強くなってってるようだし、それにあわせて四季の坊主のスピードも速くなってってる。」

「確かニ。これはどちらが勝つかわからないヨ。」

むむむ、聞き捨てならないぞ〜!!

「勝つのは四季だよ!!絶対だもん!!」

ぼくがそういうと、しゃかどうおじさんがおもしろそうな目でぼくのことをみしてきた。

「ほづ。譲ちゃんはどつしてそう思っただ?」

へっへーん!そんなの決まってるよ!

だって、だって四季は、

「だって四季は

ぼくのヒーローだもん!」

そう、四季はぼくにとってヒーローなんだ。だから、

「がんばれー!四季ー!」

勝つのは四季だ!」

サイド：四季

「はあはあ、あはあはあ。」

「はあはあ、はあ、なかなかしぶといなお前。」

「あなたこそ。」

おれと百代さんは息を切らしながら笑いあう。

まったく、ここまでギリギリの闘いになるとは思わなかったぜ。

しかし、これじゃあ、キリがないな。

「ね、え。百代さん。」

「な、んだあ。」

「そ、そろそろ、」

終わりにしません?」

俺が笑いながら百代さんに問いかけると、彼女は不敵に笑う。

「くっ、もう少しこの闘いを楽しみたかったのだがな。」

「いいだろう!」

そういつて、百代さんは両の手のひらをあわせるように重ね、体の脇に構える。

俺も、それに応えるように両の手のひらを前に向けながら重ね合わせ、体の脇に構える。

それを見て、百代さんは少し驚いたように見せた。

「ほう、私の技と同じような技か。」

「そうみたいです。偶然ですねえ。」

「くく、本当にお前は楽しませてくれる。」

百代さんは、くしくもお互いが同系の技を最後に選択した偶然に、楽しそうに笑みを浮かべ、それが終わると真剣な顔で俺に告げる。

「いくぞ。」

「はい。」

「川神流奥義」  
「鬼道流奥義」

修練場の空気が軋む。

「かゝわゝかゝみ」  
「鬼道」

観客が息をのむ

そして、

「波あああああああ！！！！」  
「砲っっっっっっっっっっ！！！！」

お互いの意地いじがぶっかりあった！！！！

サイド：小雪

「うぎゃああああ！！！！」

わわわわ、すごいかぜだあああ。

ぼくが突然起きた爆風に吹き飛ばされそうになると、

がっしっ！

「大丈夫かしら？小雪ちゃん。」

「ありがとう！お養父さん。」

お養父さんがぼくのことを守ってくれたみたい。

ぼくがそれに安心していると、なんかしゃかどうおじさんとルーおじさんが慌てた声をだしていた。

「くっ！まさかここまで衝撃がくるとはネ。子供だと甘くみたまいたいネ誰か怪我しているものはいないカ！！」

「んなもんほっとけ！それよりどっちが勝ったんだ！！」

そうだ！四季は四季はどうなったの！！

ぼくたちは四季たちがいたほうを見る。

けむりがはれていく。

そこにいた人影は一人。

立っていたのは四季だった。

周りが静かになってる。

誰も喋ってない。

でも、

でも、

これだけはわかる。

「そこまで！川神百代戦闘不能！よって勝者は、」

やっぱり四季は、

「篠宮四季!!」

ぼくのヒーローだ!!

鉄心が勝者を告げた瞬間、修練場に歓声が響いた!!

第五話 未来の武神との真剣勝負マジバトルですか。終わり

**第五話 未来の武神との真剣へマジく勝負へバトル」ですか。（後書き）**

いかかでしたでしょうか。今回百代が油断しすぎだとは思いますが、そこはまだ子供ゆえの詰め甘さだということでご勘弁を。

小雪の喋り方がむずい（汗）。

ところどころの会話文ならなんとかありますが、長くなるとボロがでます。気をつけないと。

次回か、そのまた次回に、風間ファミリーと接触です。お楽しみに。

以上！ラドゥでした！！

## 第六話 闘いの後にですか。(前書き)

今回は前回の百代戦の後のお話。少し無理矢理ですが、百代にフラグらしきものをたててみました。

そういえば、このサイトで小説を見ているときに思ったんですけど、タイトルとは別に、「編」とか、ああいうタイトルとは別のところで、文字を入れて区切るのってどうやるんですかね？わかるかたは教えてほしいです。

それでは今回のお話をどうぞ！

## 第六話 闘いの後にですか。

第六話 闘いの後にですか。

サイド：四季

「勝者！篠宮四季！！」

修練場が喧騒に包まれる。

「ふう……。」

俺は鉄心さんの試合終了の宣言を聞き、やっと緊張を解く。

（終わったか。）

危なかった。なんども負けるかと思ったけど。

（……。ってというか、俺一応チート能力持つてるよな？いくら俺がまだ子供だからっていつても、そんな俺に負けを覚悟させるって、百代さんだけだし。さすが鉄心さんの孫娘ってことか？）

俺が、川神一族の理不尽さを嘆いていると、

「四季——————！！」

「は？」

「どーん……」

「ブべらっ!？」

小雪の声が聞こえたほうをむくと、急に小雪が弾丸のごとく俺の胸に飛び込んできた。

鳩尾うつた・・・。

苦悶している俺を無視して小雪が、興奮しながらまくしたてる。

「すごいすごいよ四季！四季って、とっっつっても強いんだね!!--」

うん。褒めてくれるのはうれしいんだが、とりあえず頭を鳩尾におしつけるのはやめようか。

あの闘いのあとにこれはさすがに。ああ!ぐりぐりすんな。

俺が小雪の攻撃?に、男の意地で耐えていると、野太い声が聞こえてきた。

「こゝら、ゆきちゃん。四季君も疲れているんだから、そんなことしちゃだめですよ。」

そういつて、父さんが小雪を抱え上げる。小雪がぶーぶーいつてるが気にしない。あなたの息子でよかったですお父様!

「しっかし、まさか百代を倒すたあな。俺もたまげたぜ。」

「そうネ。素晴らしい闘いだタヨ。」

その声に振りかえると、そこにいたのは二人の男性。一人は俺たちを門で出迎えてくれた釈迦堂さんと、えーと？

「釈迦堂さんでしたよね？そちらのカンフースーツのお兄さんはどなたですか？」

釈迦堂さんと一緒にいたのは、カンフースーツ？を来た細目の男性。みるからに、「アチョー」とかいいそうな見ためだな。

「ああ、そういやちゃんとした自己紹介してなかったな。俺の名前は釈迦堂形部。川神院の師範代の一人だ。そしてこっちの細目が。」

「細目っていワナイ！私はルー。ルー・イー。釈迦堂と同じで川神院の師範代を任されてるネ。よろしく頼むヨ。」

「あ、はい。よろしくおねがいします。」

「ぼくを無視するな〜！」

「ああ、悪い悪い。」

俺たちが雑談していると。

「大分仲良くなったようだの。」

鉄心さんが俺たちのほうにきた。あれ？

「鉄心さん？百代さんは？」

そういえば姿が見えないが。

「ふむ、百代なら今は医務室におるよ。」

「医務室！？大丈夫なんですか！？」

もし、後が残るような怪我でもしてたら！？

「ふおおおお。問題ないぞい。あの程度の怪我なら気の治療ですぐに完治するし。」

まじかー。半端ねえな、気。。。気の治療のやり方教えてもらえないかなー。

「モモの回復力なら、もう治療も終わってるころじゃろ。ほれ、噂をすれば。」

鉄心さんがそういつと、

トトトトトトトトトトトトトトトトトトトズッバーン！！

「私、復活」

修練場の扉が急に勢いよく開いたと思ったら、百代さんがテンション高く復活宣言をしていた。

ていつか、そういうキャラだったかあんだ？

困惑する俺に構わず百代さんはノシノシとこちらに歩いてくる。

なんだなんだ。

百代さんは俺の前に立つと、

バッチーン！

「痛っ!?!」

俺の背中を叩いた。

俺はその痛さに思わず、声を出してしまったが、百代さんはそんな俺に構わず、バシバシ、背中を叩いてくる。

「ハハ！いや〜、強いなあ前！私が同年代に負けたのなんて初めてだぞ！！流石、『鬼神』の息子といったところか？」

『鬼神』ってなんだ？父さんのことか？

ていうか、誉めてくれるのはありがたいんですが、そんなに叩かないで！今思い出したけど、俺は治療受けてないから、さっきの決闘のダメージが残ってんだから！？」

俺が困っているのを察してくれたのか、鉄心さんが百代さんを諫めてくれた。

「これこれモモ。四季君はまだ治療を受けてないのじゃ。そうおもいきりバシバシ叩くでないわ。」

ありがとう鉄心さん！流石、川神が誇る武神！空気が読める！！（関係ない）

百代さんは、よほど興奮していたのだろうか。

鉄心さんにいわれて、やっと俺の状態に気づいたようだ。

気まずそうに謝ってきた。

「おっと、すまない。同年代にこんなに強いやつがいたことについて興奮してしまった。」

「ハハ。それはありがとうございます。俺は大丈夫ですよ。一応鍛えてありますからね。百代さんのほうは？傷のほうは大丈夫ですか？」

「くくく。それは心配しすぎた。あれくらいの傷なら気での治療ですぐに完治する。」

なるほど、そうでもしなきゃ、怪我が怖くて厳しい修練なんてできないもんな。

「それは良かったです。俺も女の子に傷が残すのは嫌ですからね。」

俺がそういうと、百代さんは若干機嫌が悪くなったようだ。

あれ？なんかしくった？

「四季。」

「は、はい」

緊張で声が少し上擦る。

な、なんだろう。

「女の子扱いは嬉しいが、私はその前に一人の武人だ。あまり度が過ぎると私に対しての侮辱と見なすぞ？」

それは生涯を幼いながらも武に捧げようとした少女の覚悟ゆえの怒りであった。

真剣勝負の世界に性別を持ち出すなということだろうか？

（そんなつもりはなかったんだけどな。）

しかし、彼女を怒らせたのが、俺のそんな発言だというのも事実。

ここは、本音を喋りながら謝罪も一応すべきだろう。

「すみません。百代さんを侮辱するつもりはなかったんですが。でも、心配するのも当然ですよ。特に、あなたみたいかわいい女の子はね？」

そういつて百代さんと目をあわせると、

「・・・／／／／／／／／（ボンっ！）」

急に顔を赤くし、つて、赤！？超赤！？

「だ、大丈夫ですか！？百代さん、顔が真っ赤ですよ？」

「だ／／／だ、大丈夫にき、決まってるだろう／／／／／／！！」

いや、ものすごい顔真っ赤なんですけど。

うん。どうしたんだろう？とりあえず、

「ちょっと失礼。」

「へ？ちよっ／／／／！？」

俺は百代さんの額に自分の額をくっつけて熱を測る。

後ろで釈迦堂さんたちが「ほう」とか「へえ。」とかいつてるが、

なんのことだ？

俺はいまだに顔を赤くしている百代さんの額から離れる。んゝ熱はないみたいなんだが。

「熱はないみたいですけど、少し休んできたほうがいいのでは？顔も真っ赤だし。」

「へ？あ、／／／／ああ、そ、そうだな／／／。ジ、ジジイ私は部屋に戻る／／／／／！！！」

そういうと、百代さんは逃げるようにして、修練場を後にした。それはもう、凄まじい勢いで。

「大丈夫かな？」

「ふおふおふお、問題ないじゃろう。あれはただ恥ずかしかっておるだけじゃよ。」

「？恥ずかしがるってなんのことですか？俺は特になにもしていないのですが？」

百代さんの熱を測っただけだと思っただが、そう思ったが、なぜかそんな俺を皆が残念な顔をしていた。

な、なんだよその目は。

「まさか、ここまで鈍感な人間がいるとはねえ。奉山さんも苦労しそうですなあ。」

「あら。それはそれでおもしろいじゃない ひよっとしたら養娘がもつと増えるかもしれないし。」

「ふおふおふお、それはおもしろそうじゃな。」

なんの話をしているんだ。そして、小雪よ、なぜそんなに頬をふくらませて俺を睨む。

「しらな〜い。」

え、俺なんかした？

「・・・四季のぼ〜か。」

理不尽だ!?

第六話 鬪いの後にですか。終わり

第六話 闘いの後にですか。(後書き)

どうでしたでしょうか。まあ百代が初心すぎる気もしますが、このときはまだ子供なのでそういうことに免疫がないということではひとつ。

今回はとうとう風間ファミリーと接触です。お楽しみに。時系列完全無視だな、俺。まあいいか。

以上、ラドウでした!!

第七話 『原っぱの争奪戦』と『風間ファミリー』ですか。(前書き)

すみません。風邪ひいて少しダウンしてました。

今回は原作エピソード？『原っぱの争奪戦』から、風間ファミリー加入まで書いてみました。まあ、原作エピソードっていつでも原作やってないから、他の二次創作から情報集めて書いたので、似通ったところが多々あるかもしれませんが、不快に思われたのならごめんなさい。

それと皆さんのおかげで一気に360件を突破しました。これがマジ恋人気なのか!?

これからもよろしく願います。

それではどぞ。

前回のあらすじ

百代に主人公のフラグが!?

第七話 『原っぱの争奪戦』と『風間ファミリー』ですか。

第七話 『原っぱの争奪戦』と『風間ファミリー』ですか。

サイド：四季

百代さんとの真剣勝負から数年。俺も小学四年生になった。

あれから、俺はモモさん（そう呼んでいる）に懐かれたようで、小雪や忠勝を含めて一緒に遊ぶようになった。

モモさんは二人のことも気に入ってくれたようで、特に小雪とは一緒にお風呂に入ったりするほど仲良しだ。（その時、俺と忠勝も一緒に入れられそうになったので、釈迦堂さんの部屋に匿ってもらったりした。）

ああ、そうそう。

小雪といえば、父さんに武術を習い始めた。

俺とモモさんは、あれから鉄心さんの頼みもあり二人で組み手などをしているのだが、それを見学していたら小雪も混ざりたくなつたようで、それを聞いた父さんが自分の武術を教えることになつたらしい。

といつても、鬼道流の技は、本来自分の子供の中で一人にしか教えられるため、父さんが昔に独自に作った我流の技の一つを教える

らしい。

足技主体のその武術の名前は、『裂蹴拳』れっしゅけん。……どこの仙  
○忍だ。

まあ、小雪は才能があつたらしくどんどん実力をあげているが。

その他には、小雪に「おじさん」といわれてへこんだ師範代の二人  
を慰めたり、

釈迦堂さんと梅屋の豚井とどの組み合わせが正義ジャスティスか議論したり、

ルーさんと一緒に銭湯に行ったり、

鉄心さんと縁側でお茶をしばいたり、

小雪が母さん並みに料理のセンスがないことが発覚して、調理場へ  
の小雪の立ち入りが禁止になったりした。

まあそんなこんなで気づいたら小学生になつていたわけだ。

ちなみに俺が入った小学校は、『川神南小学校』。モモさんと同じ  
小学校で、忠勝と小雪も同じくここに入った。

ただ、甘粕とくまちゃんとは別の学校になつてしまった。ちと残念。

ここに入って、俺はごく普通の平穏な小学校生活を送る……。……  
はずだったのだが、ちよくちよく喧嘩を吹っ掛けられる。それも上  
級生が中心になつて。それは忠勝や小雪も同じようで、どうしてだ  
ろう。と疑問だったのだが、どうやらその理由はモモさんと度々つ  
るんでるのが原因らしい。

モモさんは黙ってれば（ここ重要！）美少女なので、度々告白されるのだが、その全てを断るため、それを逆恨みした男。

また、モモさんは年上でも遠慮なくズバズバものをいう性格のため、（身内といえど、武神たる鉄心さんに「ジジイ」といつているのがいい例である）モモさんのことを生意気に思っている上級生。

まあ、モモさん自体は悪くないのだが、結構敵が多いのである。

まあ、そんな人たちが俺たちに喧嘩を吹っ掛けてくるわけである。

最初は「モモさんに怨みがあるならモモさんのほうにいけばいいのに」と思ったが、モモさんは仮にも川神院の跡取り娘。上級生といっても小学生に負けるわけがなく、この人たちもそれがわかっていうらしく、最近モモさんと特に親しくなった俺たちをいたぶってうさをはらすうという魂胆の人たちのようだ。

まあ俺はそんな人たちの都合につきあう必要もないし、小雪も始めたばかりとはいえ、現「奉先」である父さん直々に教えを受けた身だし、忠勝も将来は巨人さんの後を継ぐため、荒事に慣れておく必要があるので巨人さんに闘い方を教わっている（ときどき俺やモモさんも稽古をつけている）。

まあつまりは俺たちもそんじょそこらの子供に負けるわけがないので、返り打ちにしまくってたら、いつのまにか「川神南小四天王」とか呼ばれるようになってしまった。・・・なんでやねん。

まあそんな小学校生活を送っていたある日の土曜日。

今日はモモさんのたつての願いで、川神院の調理場で「桃のタルト」をおやつに作っていた。・・・名前が「百代」<sup>モモコ</sup>だからって、好物が「桃」<sup>モモ</sup>って、キャラ設定安直過ぎじゃね？（メタ発言）

そんなことを思いながら今は焼きあがるのを待っているところだ。

「四季—————！まだか—————！！」

「まだか〜！！」

「はい、ちょっと待っててー！！」

どうやら待ちきれないらしい。モモさんと小雪の声が聞こえてきた。

「忠勝。もうすぐで焼きあがるから、悪いけど紅茶を用意してもらえるか？」

「ああ、わかった。」

ちなみにアシスタントは忠勝。忠勝が将来継ぐ予定の「代行屋」は料理をすることがあるため、俺が料理をする時は、度々アシスタントになってたりする。・・・あれ？ということは巨人さんも料理できるのかな？・・・まあいいか。

チーン！

おっと、焼きあがったらしい。

オーブンからタルトを取り出す。いい香りだ。

鉄心さんたちの分は、切り分けて冷蔵庫にしまっておく。そして忠勝が入れてくれた紅茶とともにモモさんたちがのところまで持っていった。

「お〜。うまそうだ。」

「うまそうだー！」

待ちに待ったおやつが登場にモモさんたちが歓声を上げる。

さつて、タルトを切り分けて、紅茶を全員分渡して、全員の着席を確認する。

「それでは皆さん、手と手を合わせて？」

『いただきますー！』

料理人的にはこの挨拶があるとないとでは大分違うと思う。どーでもいい？ すいません・・・。。。

現在おやつタルトを食べ終わり、紅茶でまったりタイムを過ごしていた。

今日は川神院の稽古も休みな日なので、どうしようかなと皆で考えていると、

「モモ、今大丈夫カイ？」

「ルー師範代？どうしたんだ？」

ルーさんがモモさん呼びに来た。どうしたんだろう？

「今、君に用事がアルとイウ、男の子が来てるんだけど？今は山門のほうでまっけてもらっているヨ。」

「？わかった。皆はちょっと待っててくれ。」

そう言い残し、モモさんは川神院の山門へとむかっていった。

俺は残った二人に話しかけた。

「何があったのかな？」

「さあ、俺が知るか。」

忠勝はあいかわらずツレナイ。

まあ、確かに俺たちにわかるはずがないんだけど。

「ぼくはモモ先輩への告白だと思うなー！」

ふむ。小雪の意見にも一理ある。最近は少なくなったみたいだが、それでもモモさんのことをよく知らないやつとか、あきらめきれないやつからはまだ告白されているみたいだし。

俺たちがそんな雑談をしていると、

「おーい、お前らちょっと来てくれー！」

モモさんが俺たちのことを呼んでいる。なんだろうと思いつながらも俺たちは玄関へむかった。

-----  
-----

モモさんに用事があった男の子は、「直江大和」という男の子で、どこかニヒルな雰囲気の子だ。俺と同じ四年生らしい。

話を聞いてみると、先週の土曜日に自分たちが原っぱで遊んでたら上級生の6年生たちが突然やってきて、無理矢理場所を奪い取られたというものだった。

直江たちも抵抗しようとしたが人質をとられ、無抵抗のところをやられてしまったらしい。

しかも直江たちのリーダーの男の子はコンパスで耳に穴を開けられてしまったらしい。

ひどいことをすると思い、モモさんを見てみると、

「・・・・・・・・。」

あゝ、かなり怒ってるかこれは。

モモさんは乱暴なところはあるが、さすが武神の孫娘だけあり、卑怯なことゆ、不誠実なことが大嫌いなのである。

まあ、かくいう俺も結構ムカついているのだが。

モモさんは直江の頼みを聞くことにした。

「これをどうぞ。」

直江は献上品としてポケットからモモさんが集めている野球選手のレアカードを差し出した。

（なるほど。ただモモさんの正義感を頼るのではなく、あらかじめモモさんが、何を欲しがっているのかりサーチして報酬として用意する。）

人が感情だけでは動かないことを理解してなきゃこんなふうにはできない。

小学生にしては頭がまわるようだな。」

モモさんにレアカードを献上した直江はモモさんと舎弟契約を結び、成り行きで俺たちもモモさんたちと一緒に、翌日原っぱにむかうことになる。(ちなみにモモさんと直江が交わした舎弟契約には、「解約したらなぶり殺し」という悪魔のようなものであり、俺と忠勝は深く直江に同情したのはいうまでもない。……小雪はケタケタ笑ってたが。)

-----  
-----

まあ、原っぱに来たわけだが、

「ハハハハ！！どした、どしたああ！！！」

「うわあああ！?!」

「な、なんだこいつ!？」

「ちよ！まつ！ぶべら!？」

はい、モモさん無双ですね。

「あはは！！見て見て見て四季！人がごみのようだよ！」

楽しそうですね小雪さん。どこのム〇カだあんた。

まあ、俺たちのほうにむかってきたやつらは大体のしたので、直江の友人らしき女の子と話している  
忠勝のほうへむかった。

「おい、忠勝。」

「四季か、大丈夫だったか。」

「あんなやつらにやられるかよ。それよりさっきから気になってたんだか、知り合いか、その子？」

そういつて俺は忠勝と話していた女の子のほうを指さす。

「ん？ああ、こいつは一子っていつて、俺と同じ孤児院にいたんだ。」

「へー、そんな偶然あるんだな。あ！俺は篠宮四季っていうんだ。よろしくな。」

「うん！私は岡本一子よろしくね！」

俺が自分の自己紹介をすると岡本は元気挨拶してくれた。

「おい、人質とってお前の耳に風穴開けたのはどいつだ？」

モモさんのほうをみるとすでに終わっただけらしい。気がついたらモモさんが上級生の一人を脅してた。

「やめろ、やめろよ。」

「命乞いは、媚びてするものだぞー。」

楽しそうに笑ってんなあ。おい。

ただ笑ってるだけならかわいいんだが。

まあ、上級生の上級生のほうは、モモさんの顔を見る余裕もなさそうだが。

「俺は本当に悪<sup>ワル</sup>なんだ子猫を平気でイジメ殺せる！お、お前も殺すぞくそアマあ！？」

あ、ばか！そんなこというと、

「・・・へえ、悪<sup>ワル</sup>かあ。ステキだな先輩。デートしてくれ。具体的にはあそこの建物の三階まで。」

・・・あゝあ、やっちゃまった。

「あそこの建物の三階・・・屋根まで付き合ってくれ。」

「ありゃ、切れてんなモモ先輩。」

「ああ。たぶん子猫をイジメ殺せるつてのが気に入らなかつたんだろ。」

忠勝の呟きに答える。まったくおとなしくやられてればいいものを。

「……………一応いつとくか。指さした建物へ六年生を引きづりながら移動しているモモさんの背中へ注意を促す。」

「モモさんやりすぎは駄目だぞー。」

「お〜。」

俺の忠告に気のない返事でモモさんが答える。まあ、これで最低限は大丈夫なはずだ。……………たぶん。

「お、おいやべえんじゃねえのか、あれ。」

ガタイのいい男の子が、モモさんの行動に不穏なものを感じたのだろう。不安そうな声をあげる。

「ううん、どうフォローしようか。そんなことを思っていたら、モモさんが連行していった六年生を建物の屋根から突き落とした。……………つて!？」

「あぶな!？」

俺は急いで、落ちてきた六年生を受け止める。……………地面スレスレで。

「ヒ、ヒイイイイ!？」

六年生が悲鳴を上げる。まあ、小学生でヒモなしバンジーを経験することになったのだから当然であろうが。

あ、地面スレスレで受け取ったのは、わざとじゃないよ。別にタダ助けんのが癪だったとかじゃないよ。ホントだよ？

あ、こいつ漏らしやがった！きたね。ぽいっと。

「ぐへ！？」

後ろで、「ひでえ……。」とかいつてるが聞こえない。ふむ。これでもうはむかう気力はないはずだが、一応脅しておくか。

俺はうずくまっている六年生に話しかける。

「やあ、先輩ご機嫌いかがかな？」

「ヒッ！いいいわけねえだろ！？」

へえ。まだ噛みつく元気があるんだ？まあ、相手がモモさんじゃなくて、俺だからかな。まあ、なめられるのわいやだしなあ。

「ハハハ。まあそりゃそうだな。なにせ小学生にもなった小便漏らすような体験をしたんだから」

「！つて、てめえ！！？！」

六年生が顔を真っ赤にして俺に殴りかかるが、

「よつと!」

スッパーン!!」

「ぎゃふん!?!」

俺は六年生の手首をひねって、地面にたたきつけた。てか「ぎゃふん」てww

「ハハハ、元気がいいのは結構だが・・・あんま調子乗んなよ?」

「(ビクッ!?!)」

「さっきのお前さんのセリフにはモモさんだけじゃなくて、俺も結構いらついでだよ。」

「な、な。」

「ああ、喋らなくても良いぜ。俺があんたらにいたいのも二つ。二度とこの原っぱに入らないこと、もうひとつは二度と子猫をイジメ殺すなんてことはいわないことだ。もしこれを破ったら。」

そういつて俺は近くにあった手ごろな石を掴み、

バキンッ!

握りつぶした。

「ピクッ!?!」

「頼んだぜ、先輩？」

「ヒツ・・・ヒイイイ!?!?!?」

六年生は俺の言葉にもものすごい勢いで首を縦に振った。

その後、勢いよく頭を下げた六年生は、意識のある仲間たちで、俺たちがのした他の六年生を抱えて、悲鳴を上げながら原っぱから去って行った。・・・なにもあんなに怯えなくても。

「いや、あれは普通怯えるだろう。」

いつのまにか俺の後ろにいたモモさんが呆れたように俺に声をかけてくる。

「いやいや、屋根から突き落としたモモさんよりはマシでしょう。」

「ほう。それは私が極悪非道だと。」

「いや、そうは言ってないでしょうに。」

「いや、どっちもどっちだろ。」

「どっちもどっちー」

俺たちが雑談をしていると、

「なあ、今大丈夫か？」

その声に振り向くと、直江と岡本を含めた5人がそこにいた。

「どしたあ？」

俺が問いかけると、五人の中からバンダナを着けた一人の男の子が前に出てきた。

あれはたしか、六年生に耳に穴をあけられたやつか？

他の四人の様子を見ると、彼がリーダーらしい。

なんだろうか？

「なああんたたち、俺たち

『風間ファミリー』入ってくれ！」

俺は後に思うことになる。彼らとの絆は、俺の最も誇るべき、大切な宝物になったと……。

第七話 『原っぱの争奪戦』と『風間ファミリー』 終わり

第七話 『原っぱの争奪戦』と『風間ファミリー』ですか。(後書き)

どうでしたでしょうか。

本来ならこの後にちょっとしたもめごとがあるようなのですが、うまく書けなそうなのでカットしました。すいません。

次回かその次あたり、あの子の救済にあたります。

上手く書けるかな。

では以上！ラドウでした！！

## 第八話 「仁」の少女ですか。（前書き）

勝手ながら、主人公と、主人公の容姿を若干変更させていただきました。

といっても、肌の色を色黒に変えたただけなんですけどね。

お気に入りか400件を超えました。感謝感謝の日々です。

それでは、今回の話をどうぞ。

前回のあらすじ

風間ファミリーに勧誘された。

## 第八話 「仁」の少女ですか。

第八話 「仁」の少女ですか。

サイド：四季

あの子の話しよう。

俺たちを仲間に勧誘したのは、風間翔一。「風間ファミリー」という友達グループのリーダーだ。

【風間ファミリー】とは。

「川神南小学校」には、いくつかの有名な、いわゆる友達グループというものがあり、俺たち「川神南四天王」、そして「風間ファミリー」もこれの一つにあたる。

風間ファミリーのリーダー。あだ名はキャップ。風間翔一。

軍師。直江大和

影が薄いツッコミ役。師岡卓也

筋肉担当。島津岳人

ファミリーのマスコット。岡本一子。

以上、俺と同じ小学四年生五人で構成されているグループである。

まあ、結局俺たち四人は風間たちの仲間に入れてもらうことになった。

モモさんはあまり友人はいない。嫌われているわけではないが、その腕っ節から躊躇してしまう人が多いからだ。そのため自分の力を見て、それでも躊躇なく仲間を誘う彼らに興味を持ったためだろう。一番最初に仲間になることを承諾した。

俺が彼らの仲間にはいったのはモモさんと同じような理由。忠勝たち以外の友達はあまりいない。喧嘩を吹っ掛けてきた相手を返り撃ちにしまくってたら、自然に人があまり寄り付かなくなった。まあそれでも何人かいる分にはモモさんよりはマシかもしれないが。

小雪が入った理由は簡単で、俺たちが入るならとかそんな理由だった。まあこれに関しては俺は良かったと思っている。小雪は元々俺たち以外にはあまり懐かないため、これがいいきっかけになればいいと思っている。

意外だったのは忠勝も入ることを了承したことだ。元々忠勝はグループ行動みたいなことがあまり好きではない。俺たちと一緒にいるのも、俺との腐れ縁という部分が多い。

そう思ったのだが、そういえば風間ファミリーには忠勝の孤児院時代の知り合いのワン子（岡本のあだ名。友達になったのだからそう呼んでくれといわれた。）がいたことを思い出した。ワン子に聞いたことによると、昔から自分の世話を焼いていてくれていたというこのことからたぶんワン子を放っておけなかったのが理由なんだなあ。と考え付いた。あいつはぶっくらぼうなところがあるけど結構世話焼きだし。愛い奴め。（本人の目の前でそのことを指摘したら殴られた。理不尽。）

まあ、そんな理由で俺たち四人は、彼ら風間ファミリーに入ることになった。そしてそれから一カ月後、俺は新しい出会いをすることになる。

-----

俺たちが風間ファミリーの仲間になってから一カ月がたったある日。

俺は、ガクトと忠勝。小雪と一緒に川沿いの道を歩いている。普段俺たちが遊び場に行っている空き地に皆でむかっているのだ。

最初は俺と小雪だけだったのだが、途中から二人とあったので、一緒にむかっているのである。

「あー！ちようちよー。」

「「らららら、道路に飛び出すぞとするな。」

「ららららるー。」

「危険な発言もするなよ!？」

我が義妹ながら油断できないな、こいつ。

「いつも大変だな。お前も……。」

小雪の自由奔放さに戦慄していたら、忠勝になんか道場のまなざしをむけられてしまった。

なんか、悲しくなってきたな……。

「しかしお前らが仲間になってからまだ一カ月しかたっていないか?。」

「?それがどうかしたのか?」

「いや、なんか一カ月どころじゃなく、もっと昔からお前らと一緒にいるように感じてなあ。」

「なるほど。」

確かに俺もそう思う。相性がいいというのだろうか。俺たちが風間ファミリーになじむのは思いのほか早かった。

前述したように他人にあまり懐かない小雪がすぐに皆に懐いたのがその証拠だろう。まあ、悪いことではないので別に構わないが。

その他にも、昨日見たアニメの話や、巨人さんがまたふられた話など、適当にだべりながら空き地へむかっていると、

「や〜い！椎名菌〜！」

「あん？」

なんの声だ今のは。

俺がその声の主を探すと、

（あれか？）

河原にいる集団。俺たちと同じくらいだろうか。一人の女の子を三人ほどの男の子が囲んでいた。

どうも仲良く遊んでいる雰囲気ではないな

「あれって・・・椎名か？」

「知ってるのか、ガクト？」

どうやらガクトはあの少女のことを知っているらしい。

ガクトが少女の情報を喋ろうとした時、

「お前の母ちゃん、淫売なんだってなあ。」

「ギャハハハ！淫売の娘かよ。ばっちい！」

「きたねえからこっちくんな椎名菌！！」

おいおい、あれって、

「イジメか？」

「ああ、そつだ。」

俺のつぶやきに答えたのはガクト。その顔にはいつもの快活さはなく、暗い物を感じる。

「あいつは、椎名京しこみやまって行ってな。大和たちと同じクラスの女子で、どうやらいじめにあっているらしい。」

「なっ！？」

俺はそんな話知らないぞ！？

忠勝も同じだったのか、驚いた顔でガクトを見ている。

「まあ、お前らが知らないのも無理ねえ。俺も噂で聞いたただけだからな。まあ、あれを見たら噂が本当だということがわかったが。」

「・・・つち！胸糞わりい。」

忠勝が不機嫌に舌うちする。確かに胸糞悪い話だ。あんな女の子がなんでそんな目に逢わなければならぬ！？

俺が憤っていると、

「おい、なんとかいったらどうなんだ淫売！！」

ドン！！

「きゃあ！？」

バツシャーリーン！！

件の少女、「椎名京」に無視されていらだつたのだろう。三人の男のうち、もっとも体の大きい男の子が、椎名を川へ突き飛ばした。

「！？あのやろっつ！？」

俺が急いで椎名の元へむかおうとすると、

「待て、四季！」

「ガクト！？。なんで止めるんだよ！？」

ガクトに腕を掴んで止められた。

早くしないと椎名が！？

「ここであいつを止めたらお前まで標的にされるぞ！それだけじゃねえ、ファミリーの皆もだ！。それでもいいってのか！？」

「！？」

そうだ。子供は無邪気故に残酷。それゆえに陰湿だ。俺一人なら大丈夫だが、ファミリーの皆に被害が及ぶ。

「くっ……（ギリ！）」

できないっ！ファミリーに害を及ぼす。それだけは！

（でも！？）

俺は椎名を見る。

ボロボロの服にやせ細ったからだ。体中ずぶぬれなのに、一切の表情の変化を見せないその顔は、全てを悟ったような、いやあれは、

――全てを諦めている、そんな顔をしていた。

(・・・なんて顔してやがる！)

ガクトの話が正しければ、あいつはまだ俺たちと同じ小学生のはず。それがどうなったらあの年であんな顔ができるんだ。

助けに行きたい、でもそうしたら皆に迷惑が。

俺が葛藤していると、

「いつてこい。」

「・・・え？今なんて？」

俺は声の主、忠勝に問いかける。

それに対し、忠勝は心底めんどくさそうに答えた。

「だからいつてこいつていつたんだよ。・・・助けてえんだろ？あいつを。」

忠勝がむいたほうには、無表情で男たちの罵声を聞いている椎名の姿が。

でも、あいつを助けたら、ファミリーの皆が!?

「な、なにいつてんだ源さん（忠勝のあだ名）！？そんなことしたら。」

ガクトが忠勝の発言に驚く。

「ああ、余計な恨みを買うかもな。ファミリーの皆にも迷惑がかかるかもしれない。」

「だったら、「あまり俺たちをなめんなよ四季。」っ！？」

凄んだ忠勝の迫力に、俺とガクトは思わず息をのむ。鉄心さんたちのような、実力差からくる迫力でもなく、釈迦堂さんのように禍々しさからくる迫力でもない。

今の忠勝からはそのどれでもない、逆らい難いものを感じた。

「確かにお前は強ええ。同年代じゃモモ先輩くらいしか相手が務まらねえほどにな。そんなお前が俺たちを守ろうとしてくれてんのはわかる。俺たちを大切だと思ってくれてんのはわかる。でもな。」

「――そんなに俺たちを信用できねえか？」

なっ！？

「そ、そんなこと。」

「ああそうだ。お前がそんなこと思ってねえのはわかってる。でもなあ。」

忠勝は俺の胸倉をつかむ。ちよ、くるし!?

「俺たちを信用できないと、そういつていんのと同じなんだよ!!  
なんで俺たちに声をかけねえ。一言あいつを一緒に助けてくれとい  
わねえんだ!」

「そうだよ、四季。」

いつの間にか俺の顔の近くには小雪の顔が。珍しくご機嫌斜めみた  
いだ。

「僕たちは仲間でしょ。だったらもつと僕たちを頼ってよ。」

「小雪……。」

俺が忠勝と小雪の気づかいに感動していると、

「おい!なんとかいったらどうなんだ!」

その感動をブチ壊すような怒声が聞こえた。

みると、声の主は先ほどまで椎名を罵っていた男の一人。どうやら  
椎名が無視し続けたため、堪忍袋の尾が切れたようだ。

それでも椎名は無視を続ける。

「このっ……！」

憤った男が椎名にむかって腕を振り上げる。

危ない！？

「すまない、俺は行く！」

そうして、俺は椎名のところにむかっていった。

サイド：忠勝

四季はすごい速さで椎名の元へむかっていった。

よっぽど行ききたかったんだろうな。助けにむかう四季の口元は弧を描いていた。

「で、お前は行かせてよかったのか。」

「……しゃあないだろ。四季があそこまでやる気になってんだ。止められんのはモモ先輩くらいだ。」

「確かにな。」

四季は普段は温和だが、四季はモモ先輩に勝ったやつだ。それだけにあいつが本気になったら、止めるのは難しい。

「それに俺様だってほんとはなんとかしたかったしな。俺様だって嫌だったんだぜ、あんなことというの。俺様はファミリーのことを思っただな。」

「わかってる、そんなこと。」

こいつは普段はあんな感じだが、その実誰よりも仲間思いだ。椎名に関わらないように四季にいったのもファミリーに害がないようにだろう。

「それで、あの子はどうするの。」

「どっこういう意味だよ、ゆき。」

「四季があいつを助けた後、どうするかってことか？」

「うん。」

確かに。あいつがそのまま終わらせるとは思わないしな。たぶん、

「たぶん、俺たちの仲間にいれんじゃねえのか？」

「まじかよ。」

どうやらガクトは椎名を仲間に入れるのは抵抗があるらしい。

だが、

「僕はいいよ〜」

「ゆき!?!」

ガクトが驚いている。それもそうだろう。小雪は仲間以外にそこま  
で関わるうとしない。そんな小雪が自分から関わるうというんだか  
ら。

「僕も四季が助けしてくれなかったら、あの子と同じでひとりぼっち  
だったから。」

「ゆき……。」

珍しく寂しげな表情を見せる小雪の姿にガクトは息をのむ。

小雪の身の上話は実はファミリー全員が知っている。小雪と四季が  
あまりに似てないことを指摘されたため、小雪が自分から話したの  
である。

四季は無理に話すことはないといっていたが、小雪はそれでも話す  
ことをきめた。

『皆には知ってもらいたいんだ〜』

そういつて小雪は自分の過去を俺たちに話した。・・・随分軽い感  
じで話していたが。

それでも思った以上に重い話に泣いてしまった一子のやつを慰めた  
のは記憶に新しい。

つと、今は関係無かったな。

「小雪は賛成か。」

「源さんは、源さんはどうなんだよ!？」

ガクトのやつが必死の形相で俺に詰め寄る。

そんなにいや、違うな。ガクトが心配してんのはやっぱりファミリ  
ーのことだろ。まあ、それでも俺は、

「俺はべつにかまわねえ。」

「源さん!？」

「幸い、俺たちには四季の他にもモモ先輩がついてる。表だって喧嘩をうるやつはいねえだろうし、幸い一番弱いモロは四季やお前と同じクラスだし、一子は俺や小雪と同じクラスだ。問題ねえよ。」

そう俺がいうと、諦めたのだろうガクトががつくしと肩を落とす。

「まあ、俺らだけの意見だけじゃな。ガクトお前はどうなんだ?」

「へ?」

「そうそう、僕もそれが聞きたいな」

そういって、俺と小雪はガクトのことを見つめつづける。

ジーーーー

「いや、俺様は。」

ジーーーー

「だから、」

ジーーーー

「あああ！？もう！わかった、わかったよ、俺様も賛成だ！！」

観念したのだろう、ガクトは大きな声で賛成の意を示す。

「いいのか？」

「いいもなにも、そんな目で見つめられちゃ他の答えなんてだせねえだろ！？」

「素直じゃないな　ガクト。」

「うるせえ！！」

「きゃ〜。」

小雪にからかわれたガクトは、真っ赤な顔で逃げる小雪を追いかける。

「まったく。」

まあ、一番反対しそうなガクトが賛成したんだ。あとは反対するとしたら大和くらいだが、そんなくらいはあいつにやらせりゃいいだろ。椎名の手を引いてこちらにくる四季をみながら俺はそう思った。

サイド：椎名京（以降、京）

【淫売の子】に【椎名菌】

それが私の学校でも呼び名だった。

発端は私の母親。・・・本当はあいつを母親と呼ぶなんて嫌なんだけど。

あいつは家にいないことが多い。男をあさっているのだ。たまに家に連れ込むことがあり、そういうときはそいつが帰るまで、外にでている。

なんで父さんがこんなやつと結婚したのかわからない。あいつが浮気していることなんて父さんもわかっているはずなのに。

そんなあいつのことは近所に住んでいる人も知っており、まるで汚い物を見るように、あいつと、・・・あいつの子供である私のことを見る。

――なんで？なんでそんな目で私を見るの？

そんな大人を見て、子供たちもわたしにはなにをしても大丈夫だと思っただろう。

私に対して、イジメがはじまった。

――なんで私をいじめるの？

私も最初は抵抗した。

でも抵抗するたびにあいつらはそんな私をおもしろがる。

――私がなにをしたっていつの？

先生にもいった。

でもクラスのほとんどがグルになっていて、私が悪者にされてしまった。

――なんで私がこんな目に。

抵抗してもダメ。助けを求めてもダメ。

――もう疲れた。

私は全てを諦めた。

今日も図書館で本を借りた帰り道。しかし、いつも私をいじめているやつらに遭遇してしまう。

あいつらはさっそく私を殴ったり、蹴ったり、罵声を浴びせたりしてきた。

私はいつものように無言で、無表情でそれに耐える。そうすればこいつらは飽きてそのまま帰っていくはずだった。

しかし、今日は違ったようで、無視を続ける私に憤った男の子が私のことを川に突き飛ばした。

「きゃあ!？」

バツシャーーン!

「あはは、ずぶぬれになってら!」

「いい気味だぜ!」

周りの男の子がはやし立てるのを、

「.....」

私は無感動にみつめていた。思ったのは図書館で借りた本が濡れてしまったことくらい。

少女は慣れてしまったのだ。人の嘲笑に。人の残酷さに。そして、人の悪意に。

ゆえに少女、椎名京は、諦めてしまった。あらがうことを。・・・  
幸せになることを。

だから、

「この・・・!?!」

少年が腕を振り上げ、自分を殴ろうとするのも無抵抗でいた。

全てを諦めてしまったために。

しかし、

「ライダーキック!」

「へ?ぐぺらっ!?!」

自分を殴ろうとした男の子が吹き飛ばされた。

「・・・・・・へ?」

思わず間抜けな声がでてしまったが、それも仕方ないと思う。それ  
くらい突然だったのだ。

すると、

「なーーーにやってんだお前ら。」

みると、私を殴ろうとした男の子が立っていた場所には別の男の子

がたっていた。

黒い肌に、赤い艶やかな髪。きつすぎないぐらいにつりあがった目。

「・・・・・・・・。」

思わず見とれてしまっていたが、そんな私を放って、男の子は話を進める。

「お前らなにをよつてたかって、女の子をいじめてんだ。男として恥ずかしくないのか!!」

え、もしかして私を助けに!? 嘘、今までそんなことって、なかったのに。

「う、うるさい! なんだてめえ!？」

「そつだ、そつだ! そいつの母親は淫売なんだぞ! お前、そいつをかばうのか!!」

私はその声に体をこわばらせた。私を助けてくれたこの子も私をいじる彼らの仲間になるのではないかと。しかし、

「知ったことか!!」

「「「!!?!?!」」」

その男の子は、いじめっこの言葉をその一言で否定する。ってええ！? そんな簡単に!

「こいつの母親がどんなやつなのかは知らねえ。まあ、こんな状態のこいつを放っておく親だ。きつと、お前らがいうとおり、人として最低最悪な、極悪犯罪二ト女に決まってるが。」

「いや、俺ら。」

「そこまでいってないけど。」

うん。私もそう思う。というか一瞬大嫌いなあいつに同情しちゃったし。

困惑する私は、しかし、次の男の子の言葉に衝撃を受ける。

「だけど、けどどな、

親は親、子は子だろう!?!」

・・・え？

「たとえ親が人の道を外れていても。」

うそ、こんな、

「たとえ、親がどんな罪を犯そうとも。」

こんなこと。

「子供には関係ねえ。」

こんなこと、だれにもいってもらったことない。

「だから、こいつがいじめられんのは納得いかねえんだよ！！！！！！」

私はその男の子の言葉が嬉しかった。冷たく凍ったはずの心が温かい熱で溶けていくのを感じた。

その時、

「う、うるせえ！？これでもくらえ！！」

ブン！

赤毛の男の子の剣幕に怯えたいじめっこの一人が、男の子に河原に落ちてた拳大の石を投げつける。

「危ない！？」

しかし、私の心配は杞憂だった。

パシ！

「な！？」

赤毛の男の子は、投げつけられた石をなんでもないように受け止める。

すごい。なにか武術をやっているのかな？

「お、思い出した！こいつ、『川神南四天王』の篠宮四季だ！」

「なにに！？」

篠宮四季！？川神南四天王の！？

川神南四天王は、川神南小学校で、もつとも腕が立つ四人のことを指す。そのなかでも篠宮四季っていえば、川神院の跡取りの、川神百代にも勝ったことのある四天王最強。

この男の子がああ篠宮四季！？

「俺は弱い者いじめはしたくない。せつかく習った技もお前らなんかに使いたくないしな。でも。」

バキン！！

「ひ！？」

「すごい……。」

篠宮君は手に持った石を握りつぶす。つて！？潰した！？砕くじやなくて？子供にできることじゃないでしょ！？

「お前らがこの子をいじめるなら容赦しねえぞ！！」

「「「ヒイイイ！？！」「」」

「わかつたら、とつとと失せやがれ！！」

「う、うわあああ！？！」

「あ、まってよ根元くん！？」

「ちょ、置いてくんじゃねえ！！？」

篠宮君が、脅すといじめつこたちが悲鳴を上げながら逃げて行った。

私がそれを茫然と見ていると、

「ところで、」

「！？」

こちらを振り向いた男の子に私は思わず身構えるが、そんな私をみて男の子は苦笑する。

「そんなに怯えられたら困る。取って食いやしないから。怪我は大

「丈夫か？」

「あ、・・・うん。大丈夫。」

「そっかよかった。」

篠宮君は、心底ほっとしたように胸をなでおろす。でも私は篠宮君に、聞きたいことがあった。

「なんで？」

「うん？」

「なんで、助けてくれたの？」

そう、それが聞きたかった。篠宮君にはなんの得もないはずなのに。

それを聞くと、篠宮君は恥ずかしそうに鼻の頭を掻く。

「俺は、理不尽なことが嫌いなんだ。」

「理不尽なこと？」

「ああ、椎名がいじめられていた理由を聞いたが、お前は全然悪くないように感じたからな。」

「！？あ、ありがと。」

うれしい。こんなにやさしい言葉をかけられたのは久しぶりだ。

「ああ、そういえば、もうひとつ助けた理由があった。」

「？なにそれ？」

そういって、篠宮君は私に手を伸ばす。

「俺と友達になってくれないか？」

「・・・へ？」

今なんて。

「いや〜。俺って結構一緒に遊ぶ友達が少なくてねえ。だからもつと友達が欲しいと思ってさ。」

そういって篠宮君。で、でも、

「私は汚いよ？」

「いや、どーかがよ〜」

「わ、わたし、しゃべるの苦手で、おもしろくないし。」

「一緒に遊ぶからおもしれえんじゃねえか。」

「根暗だし。」

「でもいいやつだ。」

私の言葉を否定する、否定してくれる篠宮君。それでも私は言葉を続けようとする。

「で、でも。」

「ああ！じれったい！！」

「ひゃ！なにを！？」

篠宮君は私の顔に両手を添えて、こちらを向かせる。

うう、なんか恥ずかしいよお／＼／＼。

「椎名京！！」

「ひゃ、ひゃい！？」

急に篠宮君がだした大きな声に、反射的に答える。

「お前は俺と友達になりたいのか、なりたくないのかどっちなんだ  
！！」

・・・あ。

そうだ。簡単なことだったんだ。篠宮君は私がいったことなんて気にしない。肝心なのは私が篠宮君と友達になりたいかなんたかかなんだから。

だから、私は、勇気をだして、篠宮君の問いに答える。

「私は・・・私は篠宮君と友達になりたい!!」

そう私がいうと、篠宮君は笑顔になり、私の顔から手を離すと、再び片手で私に握手を求めてくる。

「んじゃ、あらためて自己紹介だ。俺の名前は篠宮四季だ。よろしくな。」

それに私は急いで、篠宮君の手を握り返す。

「わ、私は椎名京！京って呼んで！」

「おう、俺も四季でいいぞ、よろしくな京！」

――とくん。

篠宮君、いや四季の笑顔に胸が高鳴る。ああ、私はもしかしたら、恋しちゃったのかな。

「うん！よろしくね、四季！――」

この赤毛の王子様に……。

それが、私と、生涯私が愛することになる、『篠宮四季』との出会  
いだった。

-----

サイド：四季

あれから、椎名を連れて、忠勝たちと合流した俺は、忠勝たちに自  
分の考えを話した。

京を俺たちの仲間にしたいと。

ガクトあたりに反対されると思ったが、意外にあっさり賛成された。  
………なんか、「しょうがないやつだ」みたいな表情をされ  
たのは納得できなかつたが。

そのまま空き地に連れて行って、キャンプたちにも話した。

ここでも、思ったより、皆あっさり賛成してくれた。まあ、大和一  
人だけ、反対みたいだったが、他の皆が入れる気満々だったので、  
諦めたみたいだ。

それからは、皆で強力して、京をイジメから助けだした。結構大変

だったが大和の策と、俺やモモさんたちの武力で、なんとか解決することができた。そうして、京は俺たちの正式な仲間になったのだ。

.....

まあ、それはいいのだが。

「四季大好き。つきあつて。」

「京ずるい。僕も僕も。」

「ズルイぞお前ら。私も四季に抱きつく！」

急激に俺に懐いて、抱きついてくる京に、それに対抗するように抱きついてくる小雪とモモさん。

なんだか、それぞれがお互いをけん制しあってるような、そんな感じがするんだが。

「なぜ、こうなった。」

「自業自得だろ？」

「なんでさ？」

俺の問いに帰ってきたのは忠勝たちの呆れたようなため息だけだった。

本当に、

「なんでさー！ー！ー！ー！」

第八話「仁」の少女ですか。 終わり



第八話 「仁」の少女ですか。（後書き）

どうでしたでしょうか。少し長くなってしまったので、ぐだぐだになっちゃったんじゃないかと心配だったんですが。

次はたぶんリュウゼツランの話かな。上手くかけるといいんですけど。

それでは以上、ラドゥでしたー！！

第九話 『リユウゼツラン』ですか。(前書き)

どうもお久しぶりです。ラドウです。

すみません。大学のレポートなどで、更新が遅れました。

それでは、どうぞ！

前回のあらすじ

京救済完了！

## 第九話 『リュウゼツラン』ですか。

第九話 『リュウゼツラン』ですか。

サイド・四季

京が風間ファミリーに入ってからしばらくして、俺たちはそれを見つけた。

いつものように秘密基地のある原っぱで遊んでいた時、キャップからの声がかかったので集まってみると、そこには以前に大和が発見した、他の雑草より背の高い草があった。

「なあ、この草大きくなりすぎじゃねえか？」

「あー。そういわれれば。」

草を指差しているキャップにワン子が答える。

そついや、前見たときは、もっと小さかったな。前も大きいには大きかったが、せいぜい二メートルくらいだったし。

「前見たときは二メートルくらいだったのに」

「三メートルはありそうだな。」

「ホントだねえ」

ふむそうになると、一カ月で一メートルは伸びた計算になるな。かなりの成長の速さだ。

俺が自然の凄さに感心していると、ガクトとワン子の言い合いが聞こえてきた。

「ワン子も結構いうようになったよね。」

モロ（師岡の呼び名）の言葉に、確かにとと思う。

ワン子は元々、元気が有り余っているという表現がぴったりな子だったが、泣き虫なところがあるため、強くものをいえないところがあった。そのワン子がここまで気が強くなったのはちょっとした訳があつて、

「私に弟子入りしたから当然だ。」

「うん、私強くなる。」

そうワン子がモモさんに弟子入りしたのが大きな要因だろう。

理由としては女の子でありながら凄まじい強さを持つモモさんに憧れたからだそうだ。

モモさんも満更ではなく、ワン子を実の妹のように可愛がっている。

・・・実は後でワン子に聞いたらモモさんに弟子入りしたのは他にも理由があり、昔から世話になっっている忠勝に、もう迷惑をかけたくないというのも理由らしい。

・・・愛されてるなあ、忠勝。

ガン！

「痛っ！？」

な、なんだ、急に殴られたぞ！？

見ると、俺の傍には拳を振り下ろした状態の忠勝が。って！

「いきなりなにすんだ、忠勝！」

「お前が変なこと考えるからだ。」

・・・あれ？

「な、なんでわかつたんだ？」

「ほ、本当に考えてたのか。」

しまった！計られた！

「ひ、卑怯だぞ忠勝！」

「うるせえ。何考えてたのか、キリキリ吐いてもらおうか。」

忠勝の言葉に俺は、

「ぶっ。」

やなごった。」

逃げ出した。

「あ、待てごらー！」

「へ、へへん。追いつけるもんなら追いついて、ってはやっ！？忠勝はやっ！？なんでそんな速いんだ！？（ギャグ補正です。）」

まあ、この日はこんな感じで終わった。

草のことも、皆他のより大きい草くらいの認識で終わった。

その草の異質さに気づいたのは、それから2ヶ月後のことだった。

真夏らしく、日ざしが暑いある日のこと、

「オイオイどんだけでかくなってんだこの草。もう五メートルは超えてんじゃないかねえのか？」

キャップが草の成長の速さに驚きの声をあげる。

それで、皆でこの草がなんなのか、会議を開くことになった。

「実は妙な生き物なんじゃね？」

「どづいづこと？」

ガクトの言葉にワン子が反応する。やめとけワン子。どづせろくなことじゃないから。

「ある日ワン子の姿が消えた……するとこの植物はワン子の身長分伸びていた。」

「怖いでしょうが！」

ガクトの言葉にワン子が体を震わす。いわんこつちやない。

そんなガクトの言葉に便乗するキャップ。

「ある日、ガクトの姿が消えた。するとこの植物が花をつけた時、そこのガクトの顔が！」

「「キヤー！気持ち悪い！！」」

キャップの言葉に反応する、ワン子と小雪。小雪は俺の服を掴み、ワン子はモモさんの後ろに隠れてしまった。

そんな二人を交互に見る、京。どした？

ふと京と目が合う。とてとてと俺のほうに歩いてきて、

「四季、私も怖いから、慰めて？」

「いや、嘘だろそれ。」

おもつくそ、無反応だったじゃねえか。

「……ちっ」

あ、舌うちしやがたった！………だんだんしたたかになってきたな、お前。

意外な反応だったのが、

「ぬぬ………だが物理的に殴れるなら化け物も平気だ。」

と、震えながらいうモモさんだった。

「あれ、姉さんお化け苦手？」

「ふん、うるさいな。………ちょっとだけだ。」

大和の問いかけに、モモさんは、強がって答える。………なんだろう。ちょっとかわいい。

「いたっ!？」

な、なんだ!？

「ふん!?!」

どうやら、小雪と京に脇腹をつねられたらしい。・・・なんなんだよ、もつ。

「化け物を相手にするなら、まだミサイルを撃ち込まれたほうがマシだ。」

「いや、それはどうなのさ?」

モロが呆れてつつこむ。まあ、モモさんらしいっちゃ、モモさんらしいが。

そういえば前に尊敬する人が安陪晴明って言ってたけど、それってそういう理由か?

「ガクトー!!」

おや?あれは確か、

「か、母ちゃん!?!」

ああ、どっかで見たと思ったたら、ガクトの母さんの麗子さんか。

「あなた、また宿題やっていかなかったんだって!先生から連絡があつたよ!?!」

「やつべ!?!」

またかよ、ガクト。

あ、そうだ。

「すみません、ちょっといいですか？」

「ん？おやあ、四季君、相変わらず、いい男だねえ。」

「ハ、ハハ。そ、それはどうも。ちょっと、聞きたいことがあるのですが。」

麗子さんは意外に、物知りなので、ちょうどいいからこの草のことを聞いてみた。

「ん〜。これは竜舌蘭かねえ。」

「りゅうぜつらん？」

ワンスが首を傾げる。しかし、大和はその名前に心当たりがあったようだ。

「なるほど、センチュリープラントか。」

それに麗子さんは軽く驚く。

「おや、大和ちゃん、よく知ってるね。」

ふむ、竜舌蘭に、センチュリープラントか。検索するか。

そうして目を閉じて集中する。

【星の本棚】発動。

これは俺が転生した時にもらった能力のうちの一つで、地球にある記憶を、キーワードを入力することによって、情報として検索することができる能力だ。

こういう、ちよっとした調べ物に結構役に立っている。．．．．．  
本当は作者が使うの忘れてて、今回だただけなんだが。（メタ発言）

ええっと、キーワードは、竜舌蘭に、センチュリープラントと。

ふむ、なるほど。

「リュウゼツラン（竜舌蘭、Agave）」は、リュウゼツラン科リュウゼツラン属の単子葉植物の総称。100種以上が知られている。メキシコを中心に米国南西部と中南米の熱帯域に自生するほか、食用・繊維作物、あるいは観葉植物として広く栽培されている。和名に「蘭」とあるが、ラン科Orchidaceaeに近い植物ではない。

性質 「編集」先が鋭く尖り、縁にトゲを持つ厚い多肉質の葉からなる大きなロゼットを形成する。茎は普通短く太いため、根から直に葉が生えているようにも見える。

気候や土壌にもよるが一般に成長は遅く、花を咲かせるまでに数十年を要するものも多い。あまりの成長の遅さに、100年（1世紀）に一度開花するという誤った認識から、センチュリー・プラント（century plant）という英語別名がつけられている。

（ウィキ参照）．．．．．で、いいんですか？」

「そ、そうだけど、よく知ってるねえ。」

「というか、（ウィキ参照）ってなにさ!?!?」  
気にするな。

「ふーん。で、結局いつ咲くんだ?」

キャップの疑問に、麗子さんは困ったような顔をする。

「さあ、私もそこまではねえ。あ!モモちゃんのおじいさんなら知ってるかもね。」

そういつて麗子さんは用事があるといって去って行った。・・・ガクト曰くお気に入りドラマの時間らしいが。

「ふむ、では呼んでみるか。」

そう宣言すると、モモさんは大きく息を吸い込む。って、やば!?

俺たちは反射的に耳を塞ぐ。

「ボケはじめのブルセラジジイ!?!?!?!」  
「モモ!お前いい度胸しとるのう!?!?!」

・・・おい、どこから現れたんだ、一秒もかかってないぞ!?

「一瞬で来ちゃったよ。この一族はまったく・・・。。。」

モロの言葉は、ものの見事に全員の気持ちを代弁していた・・・。。。

代表して、大和が鉄心さんに事情を話す。

鉄心さんのいうところによると、この花は確かに『竜舌蘭』だということ。この花は五十年に一度咲くということ。今の花はその時の子株だということ。竜舌蘭は個体によって咲く時期が違うということ。そしてこの花が明後日ぐらいで咲きそうなのが分かった。

話しあった結果、皆で写真を撮ろうということになった。楽しみだなあ。

しかし、竜舌蘭の開花予定日、

ざあああああ!

ごおおおおお!

「・・・・・・・・。。。」

台風が川神市に来襲していた。

激しい雨が窓ガラスに打ちつけられ、風は全てを吹き飛ばしそうな

勢いだった。

あ、看板が飛んでる。

あのタオルは誰かの洗濯物かな？

うわあ、瓦が飛んでるよ、危ないなあ。

あ、モモさん。……………モモさん！？

俺は急いで窓を開ける。雨水が入ってくるがそんな場合じゃない。

「モ、モモさん！？どうしたのさ、いったい！？」

合羽を着て、家の前に立っていたモモさんに話しかける。

そついうとモモさんは口元を三日月に歪めながら、

「キャップからの召集だ！原っぱに急ぐぞ！！」

「……………は？」

「うわあ、凄い風」

「楽しそうだな、お前。」

三人で原っぱに到着すると、すでに他のメンバーが揃っていた。

モモさんのいうことだと、キャップから竜舌蘭のことで召集をかけたので、ついでに俺と小雪を迎えにきたということだ。

無茶しやがって……。

全員が集合すると、キャップが召集した目的を発表する。

どうやら、竜舌蘭の花がちんと咲けるように保護するつもりらしい。

そのキャップの言葉に、大和が反対する。

「……全く、この台風の中無茶苦茶だ！なあ竜舌蘭は普通に栽培されてるらしいぜ。今回ダメでも、どっかでそれを見ればよくね？」

確かに大和の言葉は正論だ。第一、こんな嵐の中、子供が外を出歩いている時点でおかしいのだが。しかし、

「あの花は、あの花だけなんだ。かわりなんてねえ。空き地に咲いているあの花を、みんなで見たいんだ。」

「アタシも！」

キャップの言葉に、ワン子が同意する。他の皆も、常識人の忠勝でさえ、同意しているようだ。

「分かっているさ俺だって！ただ危険すぎるって事だ！」

自分以外の全員が同意したことに、大和は少しだけ声を荒げる。

まあ、大和の意見が一番正しいんだけどなあ。ここにいる奴はだれ一人帰ろうとしない。

「ま、諦める、こうなったらこいつらは絶対ひかねえ。」

「源さん……。」

大和を慰める忠勝。いや、お前も同意してただろうに。

「大和×源さん。いや源さん×大和もいいかも。はあ、はあ。」

そして、京。目をキラキラさせながら、息を荒げてへんなことをいうのはやめろ。

っていうか、そんなキャラだったか？お前。

忠勝に慰められた大和は、大きいため息をついた後、一雨で濡れた髪を掻きむしり、モモさんと俺に顔を向けた。

「こうなったら姉さん、兄弟、よろしく頼む。」

「ああ、私が皆を守る。必ずな。」

「ま、大船に乗ったつもりで任せとけ。」

即答した俺たちに、大和は思わずといったようにつぶやく。

「なんと心強い。」

そりゃよかった。

まあ、がんばりますかね。

花卉が飛ばされないようにビニールで覆った竜舌蘭を囲むように、キャップ、大和、モロ、ガクト、京にワンス子を配置し、その周りに俺とモモさん、それと、この中では俺たちに次いで武力の高い、忠勝と小雪を置いた。

「周りは基本俺と、忠勝。小雪が守るから、モモさんは皆を頼んだ。」

「了解だ。」

「久しぶりに、僕たち四天王の出番だね。」

ああ、そついやそんな設定あったな。(メタ)ry

「その名前で呼ぶんじゃないか！」

小雪の言葉に忠勝は不機嫌そうに返す。ああ、そついや忠勝はこの呼び方嫌ってたなあ。

そんな話をしながら、しかし突風で吹き飛ばされてきた飛来物を、撃ち落とす。

「ふは、ふは、ふははははははは！」

この状況で楽しそうにしているモモさんがちよつと怖かったのは秘密だ。

まあ、そんな感じで花の保護を無事に終えることができた俺たちは、自分たちの家に帰って行った。

………家に帰ったら、嵐の日に外出したことで、父さんたちに思いつきり絞られてしまった。あまりの母さんの迫力に思わず泣きそうになってしまったのは余談である。

次の日、

「おお、咲いてる咲いてる。」

俺たちが守った竜舌蘭は、黄色い花を咲かせていた。

正直、必死になって保護したわりには特別綺麗な花というわけでは

なかったが、五十年に一度に咲くという特異性のせいだろうか。なにか、感慨深い物を感じるなあ。

「ほら、写真撮るから並んだ、並んだ。」

シャッター役を頼んだ麗子さんが、カメラを構えて俺たちを急かす。

そんなこんなで、俺たち10人は思い思いの格好で竜舌蘭の前に並び写真を撮った。

そして、次にこの花が咲く時である五十年後、今と同じ格好でもう一度写真を皆で撮ろうと誓い合ったのだった。

そっぴやモモさんが、「たとえ五十年経っても、私は鍛えて若いままにいる。」っていつてたけど、さすがに無理だよなあ。……  
・無理だよ……な？

第九話 『リュウゼツラン』 ですか。終わり



第九話 『リユウゼツラン』ですか。（後書き）

どうでしたでしょうか。これで大丈夫かな。

最近、就職活動が始まりました。・・・鬱だ。超めんどくさい・・・。

まあ、働きたくはありませんが、ニートにはなりたくないので頑張りますかね。

今回はどんな話にするかはまだ未定です。・・・位置で、ファミリのキャラ設定とか書いとくべきかな？まあいいや。

以上！ラドゥでした！！

更新を期待していた方ごめんなさい。人物紹介です。

原作とは違うところがあるので一応書いておきました。

久しぶりにお気に入り登録を見たら500越えという事実・・・。

素直に喜ぶべきか、最初に投稿した遊戯王より上なことに残念だと思うべきかちょっと複雑な気分です・・・でもいうと思ったか！・・・すいませんって見たかっただけなんです。普通に嬉しいです。

この人物紹介はマジ恋Sの人物紹介を参考にしていますが、こちらの都合で変わっている部分もあるのであしからず。

最近ワンピースの映画が多いですねえ。なんかワンピースの二次も作りたくなってきましたよ・・・そんなことはどうでもいいですね。すいません。

## 登場人物紹介二【風間ファミリー（初期）編】

少しネタばれあり。飛ばしてま

しのみや しき  
篠宮四季

この小説の転生オリ主。風間ファミリーのお兄さんポジション。現在小学五年生。

武術家団体、『呂家』の筆頭である父と、元呂家の武術家である母を持つ。

父、奉山から、武術『鬼道流』を習い、現在も修業中。その腕は、すでに川神院の上位の腕を持つ修行僧にも勝てる百代と互角に戦えるほど。

しかし、本人は武術の世界で食っていく気はなく、せいぜい自分と身の回りの人を守るかなくらいには強くなりたくないくらいにしか思っていない。

二代目『トビウオ』店主として料理のほうも修業中。その腕は父には及ばずとも、十分料理人としてやっていけるほどに成長している。

神様、ダンにもらったチート能力は以下の通り。

・ 答えを導く者 アンサー・トーカー

・ 成長限界突破

・ 最強の気

・ 努力すればなんとかなる程度の能力

・ 幸運 A

・ 完全記憶能力

- ・星の本棚
- ・『刀語』の見稽古

いつの間にか『川神南四天王』と呼ばれるメンバーの一人になってしまった。

好きな食べ物は父親の料理と梅屋の豚丼

好きな飲み物はほうじ茶

趣味は料理、読書に新メニュー開発と新技開発

特技は料理

大切なものは、家族と仲間

苦手なものは、母親と小雪の料理、怒った母親

尊敬する人は、両親

現在攻略（笑）したヒロインは、小雪、京、百代の三人。

風間翔一かま しょういち

風間ファミリーのリーダー。あだ名は「キャップ」。現在五年生。

将来の夢は冒険家で、自由気ままな性格をしている。

かなりの幸運をもっており、その幸運値は神様から幸運Aをもらっ

ている主人公をしのごほど。

やる時はとことんやるがモットー。

好きな食べ物はお菓子

好きな飲み物はコーラ

趣味はいろんなものを見ること

特技はいろいろと器用にこなせるということ

大切なことは自分が自分であること

なまえ やまこ  
直江大和

風間ファミリーの軍師。現在五年生。

中二病気味だったが、主人公の指摘により、改善傾向にある。

ファミリーの仲間以外には、ただの知り合いという認識。

やどかりをこよなく愛する男だが、そのきっかけは実は主人公がヤドカリを見つけてそれを大和がもらったことからだったりする。

好きな食べ物は割となんでも

好きな飲み物は割となんでも

趣味はヤドカリ飼育

特技は作戦を練ること

大切なものは仲間

苦手なものは自分より狡猾なやつ

尊敬する人は名を馳せている軍師たち

かわかみ ももよ  
川神百代

武士テーマは「誠」。

風間ファミリーの武力担当。現在六年生。

ファミリーの最年長で、時折転生者である主人公より大人っぽい顔でファミリーを見守ってる時もある。

本作のメインヒロインの一人。自分のあまりの才能の高さに、将来に不安を覚えていた時、主人公に出会った。その勝負で敗北した後、主人公とのやりとりにより、主人公を異性として意識することになる。

自分に正直で、かなり破天荒な性格をしているが、筋はきちんと通すタイプ。

大和や主人公によく、構え構えとひつついており、放っておくと拗

ねる少しめんどくさいところがある。

「川神南四天王」の一人。

好きな食べ物は桃まも、四季かじうが作った料理

好きな飲み物はピーチジュース

趣味は、人をからかったり、皆でワイワイ遊ぶこと

特技は殲滅

大切なものは仲間

苦手なものは拳で殴れない化け物

尊敬する人は安倍清明（百代は彼を化け物退治の専門家だと思っている）

おかもと かすこ  
岡本一子

武士テーマは「勇」。

川神ファミリーのマスコット担当。この時点ではまだ川神院に養子に入っていない。現在五年生。

忠勝とは孤児院時代の仲間で、よく世話をしてもらったためかなり懐いている。

百代への憧れ、忠勝に頼りっぱなしの自分を変えるため、百代に弟子入りした。

好きな食べ物は骨付き肉と四季と忠勝が作ってくれる料理

好きな飲み物は牛乳。

ファミリー内の女性では唯一主人公のハーレム入りをしない。主人公に対しては兄に対するような感情を持つ。

この作品では原作より強化する予定。

尊敬する人は川神百代

椎名京しいな みやこ

武士テーマは「仁」。

この作品のメインヒロインの一人。ファミリーのヤンデレ？担当。現在五年生。

母親の浮気癖のせいで学校全体でいじめられていたが、そこから主人公が救ってくれ、風間ファミリーへのメンバー入りを果たした。それがキツカケで主人公に惚れた。

父親は【弓の椎名】と呼ばれる弓の名家の出身で、椎名自身も椎名家の弓術を習得している。

いじめっ子の目から逃れるため習得した気配を消す力は、主人公や

百代が集中しなければ察することのできないほどの精度を持つ。

ちなみにこの作品での京は小学生の時から腐女子の片鱗を見せている。

好きな食べ物は麻婆豆腐（デスチリソース入り）と、四季の作った激辛料理

好きな飲み物は天帝ハバネロカイザードリンク

趣味は読書と四季の観察

特技は気配を消して周囲に溶け込むこと

大切なものは風間ファミリーの仲間（特に四季）

苦手なものは他人（四季のおかげで原作よりはマシになっている）

尊敬する人は篠宮四季

しのみや こゆき  
篠宮小雪

武士テーマは「楽」。

この作品のメインヒロインの一人。現在五年生。

母親の虐待のせいで街中で倒れたところを主人公に保護された。

主人公によって早期に保護されたため原作のように心が壊れること

はなかったが、天然というか電波気味なのはあいかわらず。一人称は「僕」。

お菓子が好きで、特にマシユマロが大好き。

原作通りに榊原夫妻が引き取ることを申し出ていたが、それを断って篠宮家に養子に入った。

主人公の養妹になったが、主人公に惚れていることには変わらないので、妹の立場を最大限に生かし日々甘えている。

蹴り技に才能があり、奉山から彼が独自に作った、【裂蹴拳<sup>れっしゅけん</sup>】を習っている。

ちなみにこの裂蹴拳は、某遊幽なんとかにでてくるものとほぼ同じ。

「川神南四天王」の一人。

好きな食べ物はマシユマロと四季が作ったお菓子

好きな飲み物は特になし

趣味は空をみることと四季と一緒にいること

特技は時間をつぶすこと

大切なものはファミリーの仲間

苦手なものは怒鳴り声

尊敬する人は両親と篠宮四季

しまづ かくと  
島津岳人

風間ファミリーの筋肉担当。現在五年生。

熱血馬鹿で単純一途。この時から女子にモテたいという願望があるが、その鍛えた小学生には似合わない肉体のため女子からは若干敬遠されている。が、本人は気づかない。

椎名のファミリー入りには最初反対の立場だったが、それは椎名をファミリー入りさせることによってファミリーに危険が生じる可能性を危惧しただけであり、決して悪意から反対したわけではない。

同じファミリーのモロとは特に仲良し。秘密だが、モロの着替え姿を見て少しムラつときたときがある。

好きな食べ物は肉、四季が作った料理

好きな飲み物は肉汁

特技は力仕事

苦手なものは、ズバズバものをいう女

尊敬する人はマイク・タイソン

師岡卓也

ファミリーのつつこみ担当。将来的には情報担当にもなる予定。現在五年生。

個性派ぞろいのファミリーのなかで最も一般人に近いため、自然につつこみ役になった。

仲間内の思い入れは強く、いつも皆を気づかっている優しい所も多い。

女子と仲良くしたいが、仲間内以外では目線をあわせることもできないシャイボーイ。現在主人公と特訓中。

原作同様京に思慕の情を持っていたが、主人公に対する京の態度を見て諦めている。

その京を救った主人公に嫉妬と憧れの情を抱いている。

普段は気がよわいが仲間を馬鹿にされたりすると、もの凄い剣幕でキレる。

父親の影響で小学五年生ながらかなりのパソコン知識を持つ。

好きな食べ物は照り焼きバーガーと四季の作った料理

好きな飲み物はシェイク

趣味はマンガ、アニメやゲームなど

特技は父親の影響でパソコンなどに詳しい

大切なものは父からのお下がりのパソコンと仲間たち

苦手なものは現実の女（現在克服のために特訓中）

尊敬する人はゲイツと父親。そして篠宮四季

みなもたかっ  
源忠勝

ファミリーの母親（笑）ポジション。現在五年生。

主人公とはファミリー内では一番古い付き合い。（忠勝によると、

「腐れ縁」）転生者のため精神年齢が高い四季とは結構相性がいい。

巨人に引き取られる年齢が、原作より早い。（ご都合主義）

巨人の幼いころからの指導と主人公たちとの組み手によって原作より武力が高まっている。

「川神南四天王」の最後の一人だが、その名で呼ぶと怒る。

将来代行屋になるため料理ができたほうがいいということで、主人公に料理を習っている。

基本的には群れることはあまり好きではないが、ファミリーにワン子がいること、それと口には出してないが四季がファミリーに入る

ということ、ファミリー入りすることになった。

ワン子とは孤児院のときの仲間によく面倒を見ていた。

攻撃的で気性が荒く、口も悪いためあまりファミリー以外の友人はいないが、やさしいところがあるためファミリーからは懐かれている。

通称「皆の源さん」。

好きな食べ物はご飯と納豆。そして四季の料理。（本人にはいわないが）

好きな飲み物は味噌汁

特技は体を動かすこと

大切なものは孤児院の寄せ書き

苦手なものは馴れ馴れしく寄ってくる奴

尊敬する人は宇佐美巨人。それと篠宮四季。（本人にはいわないが）

「真剣で私に恋しなさい！S公式サイト」参考。



登場人物紹介二【風間ファミリー（初期）編】 少しネタばれあり。飛ばしてま

最近主人公の技名について悩んでいます。

ワンピースっぽく鬼という字を取り入れた感じにしてみました。が、思いのほか俺にセンスが無かったという事実。もしかっこいい技なと思いついたら教えてくれると嬉しいです。

## 第十話 九鬼英雄ですか。 少し修正しました。(前書き)

今回は皆の王様と腹黒従者が登場。まあ、題名でわかると思いますが。

お気に入りかもすぐ600件になる。・・・この間500超えたばかりなのに。これがマジ恋ばうわーかww

そういえば最近fatezeroの二次創作を見ていたんですけど、それを見ていたら新しいマジ恋物を作りたくなってきました。

揚羽メインヒロインで、ディルムッドかランスロットが転生。

紋白メインヒロイン？もしくはほのぼのでヘラクレスが転生。

みたいな。ちょっとおもしろいかも。でも遊戯王のほうもあるし。書く時間がないorz・・・。

だれか書いてくれないかな(人任せ)・・・遊戯王がひと段落したら書くかも。(たぶん。おそらく。めいびー。)

後、今回ちよつとした設定ねつ造があるので、そういうのが嫌な人はUターンお願いします。

それではござ。

前回のあらすじ

竜舌蘭の前で皆で写真をとった。

第十話 九鬼英雄ですか。 少し修正しました。

第十話 九鬼英雄ですか。

12月のある日。それは起こった。

上海にある『上海ニューホテル』

日本三大名家の一つである九鬼家と三大名家には格式は劣るが、最近急成長している新進気鋭の霧夜グループが協同で出資した世界最高のものになるといわれたホテル。

今日、そのホテルが

燃えていた……………。

サイド……………？

くっ！？ぬかったわ。まさかテロリスト如きが九鬼財閥の警備を抜けてくるとは。」

我の名前は九鬼英雄。誇り高き九鬼家の長男である。今日は霧夜グループと共同で出資したホテルの開店を祝つてのパーティがあつた。

我自身は興味がなかつたのだが、九鬼の人間としてこのような場にも今のうちに顔をだしておくべきということで出席したのだが、

「きゃああ！？」

「で、出口はどこだ！？」

「は、早く出してくれえ！？」

このような結果になつてしまった。

くっ！パーティの参加者はどうやら突然の事態に錯乱しているようだ。しかたない！！

我は叫んだ。

「ええい、うるたえるな！！助かるものも助からなくなるぞ！！身を低くして出口にむかえ！！幸い出口は防がれておらぬ。落ち着いていくのだ！！」

ええい！いい大人がうるたえおつて！これだから庶民は！！だが、我はそんな庶民たちを導かねばならぬ。なぜなら我は生まれながらの王にして、皆の英雄ヒーローなのだから！！

我の声を聞いて出口へとむかつていく庶民たちを眺めながら、我は、自然な足取りで、我を守るように《・・・》立っていた給仕へと声をかける。

「その給仕、貴様先程から我のことを気にかけているようだが、  
・・・名をなんといい。」

英雄に声をかけられた給仕は驚いたような顔をしていた。

「あ、ああ。あずみ。忍足おしたりあずみだ。・・・しかし、なんでわかつたんだ？依頼主のいうとおりなら、あんたに連絡はいつてないはずなんだが？」

「ふん！我は九鬼家の人間。その程度のことも見抜けなければ王の一族など名乗れぬわ！」

あずみは自身が自らの護衛だと見抜いたその眼力に驚くべきか、このような修羅場でも自分のペースを見失わない英雄に呆れるべきかわからず、微妙な顔をしていたがもちろんそのようなことを気にする英雄ではなかった。

「あずみよ、そこに霧夜の娘がおるだろう。」

そういつて英雄は一人の倒れている女を指差す。

彼女の名前は霧夜エリカ。霧夜グループの娘で、英雄と同じような理由でこのパーティに来ていたのだが、テロで起こった爆風に巻き込まれ、気絶してしまったのだ。

「こやつ安全も確保せよ。ここで死なすには惜しい存在だ。」

英雄はエリカとは今日初めて会ったのだが、初対面で英雄は理解した。彼女は自分たち九鬼家と同じ、王の道を行く者。いずれは自らの好敵手になる存在。故にここで死なすには惜しいと、英雄は感じたのだ。

「おいおい、私は一応あなたの護衛に雇われたんだが。あなたの護衛を疎かにするような真似はできないぜ？」

「ふん！それくらいやって見せろ！それでこそ九鬼家の臣というものぞ！」

「・・・いや、私はただの傭兵なんだが・・・。」

あずみが呟くが英雄は聞いてない。九鬼家の人間にとって、自らの敵ではない者は、友以外は愛すべき庶民と臣しかいないのだから。

そんな英雄にため息をつきながらも、あずみがしっかりと、エリカを比較的安全な場所に移動させているのは英雄のカリスマ性故か、諦めたからなのか。

そんなとき、

ドガガああああん！！！！

「！！？」

「な、何事！？」

爆発音とともに大きな衝撃が英雄たちがいるホテルを襲った。エリカも今の爆発音で目を覚ましたようだ。

せつかく英雄のおかげで落ち着き始めた参加者たちも再び錯乱し始める。

「いやあ、静かにしていただきましょうか。」

パーティー会場に男の声が響き渡る。見ると会場の入口に戦闘服のようなものを着た男たちに囲まれながら一人の男がでてきた。

真黒なスーツに身を包み、穏やかな笑みを浮かべる男。しかしその爬虫類を彷彿とさせるその目は狂人特有の危険な光を秘めていた。

英雄とエリカ。この二人はまだ幼いながら自らの家から英才教育を受けた身。その中には他人を見極める目を養う訓練もあり、そんな二人だからこそ一目で見抜いた。この男は危険だと。

そんな二人の観察するような目線を感じながらも、それに構わず男は話し続ける。

「こんばんわ、紳士淑女の皆様方。私の名前は、ふむ。そうですね。ジヨン・ドウととりあえずはお呼びください。お見知りおきを。」

そういつて男は一礼する。しかしその礼には誠意のかけらも感じられなかった。テロリストに誠意を求めるのもおかしい話したが。

(それにしても・・・)

ジヨン・ドウ《名無しの権兵衛》とは。元から本名など期待したはおらぬが、あからさまな偽名とその軽薄な態度からこちらが馬鹿にされている印象を受ける。

それを感じたのだろう。参加者の一人の男性が大きな罵声を「ジヨン・ドウ」に浴びせる。

「ふざけるなよ、汚らわしいテロリスト風情が。選ばれし者の祝宴に土足で入りよって！今すぐここからでてゆけ！！」

この中年の男性は、九鬼家や霧夜グループほどではないが、かなりの名家の産まれでそのためか凄まじくプライドが高い男性だった。

自らに奉仕するはずの庶民が自分たち選民のパーティを台無しにしたのが許せなかったのだろう。

いつも自らがやっているように罵声を浴びせた。

これがそこらの庶民や自らの部下なら、この罵声だけで土下座をする勢いで頭を下げるだろう。彼はその程度には地位が高かった。しかし、彼の眼の前にいるのはそこらの庶民でも、彼の部下でもなか

った。故に、

「やりなさい。」

「ハッ！」

パン！

「……へ。」

この結果も（……）当然のことだった。

「きゃあああああああ！?!?!」

パーティー会場に絹を裂くような悲鳴が響き渡った。

サイド：あずみ

「くっ。馬鹿者めが!?!」

目の前にいる九鬼家の御曹司が（英雄っていったか？）悔しそうに唇を歪める。

御曹司の言葉に確かと思う。

テロリストに罵声を浴びせるなど相手を刺激するだけだ。ここは落ち着いてテロリストの要求を聞き、場を鎮めることに力を注ぐべきだろうに。

銃で頭を撃ち抜かれた男を一瞥した後、あずみはこの状況で護衛対象である英雄とエリカをどう逃がすか頭をひねっていたが、次のテロリストの言葉に驚愕した。

「我々の目的はただひとつ、

九鬼英雄の身柄。それだけです。」

（な！？）

あずみは驚くが、実はそれほど不思議なことではない。九鬼家は日本三大名家とうたわれてはいるが、そのカリスマ性と貪欲なまでの人材収集により世界にも大きな影響力がある。

故に将来九鬼家の跡取りになるはずの英雄の身柄を狙うものはそれこそ星の数だけいるのだった。

（まずい！？・・・）

周りを見ると参加者の面々がこちらを見ている。あれは自らが生き  
るために他者を生贄に捧げる者の目だ。あずみは英雄を守ろうと前  
にでるが、

「どけい、あずみ！」

それを押しつけ英雄が前にでようとしてくる。って！

「な、なにやるうとしてるんだお前!？」

「知れたこと！やつは我に用があるのだ！我が相手をするのが道理  
であろう!！」

「なあっ!？」

あずみは驚愕した。彼は自らを害そうとする輩の目の前に姿をさら  
そうというのだから。

「ちよ、ちよつと、までよあんた。相手はテロリストだぜ？何をさ  
れるかわからない。最悪殺されるかもしれないんだぜ!? 護衛とし  
ては許可できねえぞ!！」

「私もそちらの女性に賛成ね。」

起きたばかりだが持ち前の頭脳によって瞬時に状況を把握したエリ  
カは英雄を行かせまいとするあずみに賛成の意を示す。

「霧夜の……。しかし我が行かなければ庶民たちの命が……。」

「それこそ無駄。あの男は私たちの前で素顔をさらしている。それ

は私たちを生かして返す気がない証拠。行っても無駄よ。」

そう、いくら名前が偽名だといつても生存者の証言から似顔絵などを作成されれば、指名手配が行われ、少なくとも目の前の男の活動を大幅に制限させることになる。

故に霧夜エリカは目の前の男が自分たちを助ける気はないと判断した。そのため、英雄にでていく必要はないといったのだ。しかし、

「かまわぬ！」

「な!？」

「確かにこの状況ではやつらが我らを生かして返す可能性はゼロに等しいだろう。」

「なら！」

「しかし！」

「「!？」」

「例えパーセントでも庶民が生き残る可能性があるなら我は行く!それが九鬼家の人間というものだ!」

・・・あずみには理解ができなかった。

あずみは傭兵。

ただ自らが生きるためにのみ戦う存在。そんな彼女が英雄の心を理解できるはずもない。

それ故にあずみは英雄に問いかけた。「なぜそこまでできるのか」を。

英雄は答える。

「それは我が王だからだ。」

「王だから?」

「そう。王とは数多の数の庶民によって支えられている。多くの物の手によって上に立つことが許された存在なのだ。それ故に我は庶民を慈しみ、我の力の及ぶ限り庶民を守ると誓ったのだ。そして……今がその時だ。」

「それで、……あんたが死んでもかい?」

「我は死なぬ!なぜなら我は九鬼英雄。誇り高き九鬼家の人間にして、

皆のヒーローなのだから。」

そういつて英雄は自らの歩みを進めた。

自らの敵を打ち砕くため。そしてヒーローの、王たるものの使命を果たすために……。

ーどくん

あずみは自らの胸が高鳴るのを感じた。

体中の血が沸き立つ。

甲賀流忍者、傭兵『女王蜂』、忍足あずみが終生の主を得た瞬間であつた。

サイド：ジョン・ドウ

「やっとできてきましたか。」

私の前に現れる一人の少年と一人の給仕。あの給仕の身のこなしから察するに彼のボディガードというところでしょうか。

「待たせたな我が九鬼英雄だ。」

「ほう……。」

なるほど。実際の姿より大きく見える。幼いながら彼もまた「王者の家系」と謳われた九鬼家の人間ということか。

「これわこれわ。九鬼家の跡取り殿のご尊顔を拝謁できて光栄の極み。」

「ごたくはいい。要件をいえ。」

おやおや、九鬼家の跡取り殿は気が短いようで。まあ私も要件を済ますとしますか。

「なあに、簡単なことです。我々が欲しいのはあなたの身柄。我々にご同行していただきましょう。」

「私の身柄を使って何をするつもりだ。」

「それをいう義理はありませんねえ。」

まあ、九鬼家との交渉に使うつもりなんですがね。

九鬼英雄は私の言葉に考え込む仕草を見せる。

「ふむ、ならば私の身柄と他の参加者の身柄と交換だ。」

「それはできかねますねえ。彼らには証拠隠滅のため、死んでいただきますので。」

『！』

私の言葉に周りが息を呑むのを感じる。九鬼英雄が出てくれば自分たちは無事で済むと思ったのだろう。

( 浅はかな…… )

私が素顔を晒している時点でそのくらいのごことは想像がつくだろうに。

「まあ、おとなしくついてきていただけならあなたと護衛の方の命は保障「断る。」……なに？」

今なんと？

「断るといったのだ！」

「……理由をお聞かせ願いますか？」

「我は王。民たちを守護する存在。その我が守護すべき民を見捨てて自らの保身に走るなど……ありえぬとしい！！！」

ジョン・ドウは知らなかった。いや侮ったというべきか。九鬼英雄という人間を。

いかに九鬼家の人間であろうとも所詮はいいところのお坊ちゃん。自らの命がかかっていれば簡単にいうことを聞くと思っていたのだ。

「はあ……。」

簡単だと思っていた任務が思いのほか難事だったことにため息をついた。しかし彼は諦めるわけにはいかない。

この任務は必ず必要なこととはいえなかった。しかし成功すれば自らが所属する組織の目標に確実に近付くのは確か。そのために英雄の身柄と交換条件に必ずあの技術を九鬼家から得なければならぬ。故に彼は強行手段にでた。

そう、

「武力」による身柄の確保である。

「いけ。」

自らが連れてきた部下二十人。どれもが組織の精鋭。その内十人が英雄に襲いかかった。

本人たちに殺す気はないといっても精鋭十人の攻撃。少なくとも素人には反応すらできない。そう、

素人には……。

「甲賀流小太刀二刀流、回点剣舞六連！！」

一瞬だった。

幾筋かの剣線が待ったかと思うと次の瞬間、見たのは自らの部下が地に這う姿。

「大義である、あずみ。」

「はっ！」

不思議なものである。この二人は部下になれといったわけでも、使えさせてくれといったわけでもない。しかし二人は自然に、それが当たり前のように主従という形になったのだから。

自らの精鋭を瞬殺されたジョン・ドウ。彼がとつた行動は部下がやられたことで怒声を上げるでもなく、冷静に他の部下に指示をだすでもない。

ぱちぱちぱちぱち

ただの拍手であった。

「いやあ、さすがは九鬼の御曹司。素晴らしい護衛をお持ちのようだ。」

そんなジョン・ドウの観察するような、なめまわすような視線にあずみは気持ち悪そうに自らの体を震わす。

「じろじろ見てんじゃねえぞ、気持ち悪い。」

「ふふふ。それは失礼。」

ジョン・ドウは結論をだした。目の前の女には自らの部下では勝てないと。

それ故に部下をさがらせ自らが前にでる。

「?どうした。まさか諦めたわけではあるまい?」

英雄は幼いながら上に立つ者、「王」の役割をわかっていた。自らの臣のことを信じ、自分は後方で勝利を待つ。人任せに思えるが、これこそが部下の忠義に答える方法と彼は自然にわかっていた。

だから英雄は不思議に思った。ジョン・ドウはいわば敵の王。その王が自ら危険を冒して前にでるにはなにかそうする理由があるはずだと、英雄は考えていた。

英雄の予想は半分ほど当たっていた。

「いやあ、あなたの部下には私の部下が勝てそうになかったので、方法を変えさせていたたくことにしました。」

確かにジョン・ドウが前にでたのは理由があった。しかし決して危険を冒して(・・・)前に出てきたわけではないのだ。

「ほう、しかるほどです。」

「ええ、ですから。」

彼は王キングであると同時に、

「今度は私の相手をしてもらいます。」

切り札ジョーカーでもあるのだから。

「ぐああー!?!」

その攻撃とともにあずみは吹き飛ばされる。

「（・・・ぎり）」

英雄はその光景に齒がみする。それは部下を助けられない自らの力の無さを嘆いてなのか。それとも敵の力量を見抜けなかった自らの間抜けさからなのか。

しかし、英雄がどう思おうが、どうしようが、無傷で立っているジョン・ドウと致命傷は負っていないようだが、血まみれになり息を荒げて膝をついているあずみ。

勝敗はすでに決していた・・・。

「いやあ、危なかったですねえ。死ぬかと思いましたよ。」

「しらじらしいっ・・・！無傷で、たつて、はあ、いながら。」

ジョン・ドウの言葉にあずみは息を荒げながら睨みつける。そんなあずみに見下すような笑みをむけながらジョン・ドウは今度は英雄に視線をむける。敗者にはもう用はないとでもいうように・・・。

「さて、英雄様。あなたの護衛は満身創痍。もはや戦うこともできないでしょう。ご同行願いますね？」

「くっ!?!」

ふふ、さすがに余裕が無くなってきたようですね。

「……しかしあの目は諦めたもの目ではない。いったい何を……なるほど。」

英雄が狙っているものが見当がついたジョン・ドウは残虐な笑みを浮かべる。

「ああ、なるほど増援ですか？」

「っ!？」

そう英雄が待つていたのは九鬼家からの増援。これほどの事態なのだ。すでに連絡がいつていると英雄は踏んでいたのだが、

「増援なら来ませんよ？」

「なに……？」

「この周辺に特殊な妨害電波を発生させました。これで通信機器は使えなくなり、ここから近い航空施設も我々の同志が占拠しています。少なくともあなたが思っているより大分時間が掛かると思いますが。」

「くっ!?!」

英雄の最後の望みは絶たれた。

その顔を見てジョン・ドウは見るもの全てに不快な印象を与えるだろう笑みを浮かべる。

「いいですねえ、その全ての希望を失った顔。実に私好みです。」

「悪趣味がつ。」

英雄が唾棄するようにつぶやく。

「なんとも。それでは「待てよ……。」なに……?」

「待てつていったんだ、……その人に……気軽に……触れんじやねえ!」

あずみは怒りに任せてジョン・ドウに襲いかかったが、

「ふっ!」

「な!がああ!??」

「あずみ!??」

ジョン・ドウに攻撃を捌かれカウンターを食らってしまった。吹き飛ばされるあずみ。

「ふむ、どうやら英雄様にご同行願う前にあなたは邪魔なようだ。」

その言葉に英雄は不吉なものを感じる。まさか……。

ジョン・ドウが指を鳴らすと彼の残りの部下が現れた。

「ここまで弱ってたんだ、あなたたちでも始末できるでしょう。」

やれ。」

「はっ！」

そう返事をする。彼の部下たちは血まみれのあずみに殺到していく。

「やめろおおおおおお！?!」

彼は頭ではなく心で理解していた。今日出会ったばかりの一人の傭兵。そんな彼女が自らの股肱の臣となることを。そして彼は絶望した。その臣を自らのせいで失うことを。

ドガああアン!!

辺りに衝撃とともに土煙が巻き起こる。

「くっ！」

霧夜エリカは目をそらす。彼女にとっては忍足あずみはついさっき出会ったばかりの人間だったが、それでも好感の持てる人物だった。

上流階級の自分たちにも物怖じしない態度に、その戦闘技術。そしてひとたび自らの主と決めた者に対する忠義の高さ。思わず英雄に嫉妬してしまったほどだ。

そんな彼女が死ぬのは見たくなかった。しかし……

「あ・・・ああ・・・」

英雄の顔も青くなっている。

自らをヒーローと、王と称する英雄であるがそれでもまだ小学校も卒業していないような年齢。どれほど精神が熟成していても、どれほど九鬼家の英才教育を受けていてもそれでも自らのために他人が死ぬ場面を見るには彼は、英雄はまだ子供であった・・・。

(くくく・・・)

そんな光景をジョン・ドウは嬉しそうに見ている。人の絶望を見て喜ぶ歪んだ性癖を持つ男なのだ。この場面は彼にとっては極上の美酒に等しき甘美な光景だった。

しかし、そんな光景も長くは続かなかった。そう・・・  
ある男の出現によって・・・。

「やれやれ、物見遊山で来てみれば殺人現場に出くわすとは。さすがに予想外だったぞ。」

土煙が晴れた後、そこにいたのは倒れたジョン・ドウの部下たちと、呆けているあずみ。そして、

褐色の肌をもつ赤い髪の一人の男だった。

サイド：あずみ

くやしい。

今の彼女にある感情はそれだけだった。

いつもと同じように受けた依頼。中身はいいところのお坊ちゃんの護衛。報酬も考えておいしい仕事だと思った。そこで出会ったのだ。

絶大なカリスマを持つあの少年に。

自らの身の安全を顧みず、周りの者たちを守ろうとするその姿にやられてしまった。

この少年に、この若き王一生使えようと、そう決めたのだ。

だからこそ悔しい。ここで死んでいくのが……。

別に死ぬこと自体は怖くない。そんなものはこの仕事で生きていくと思っただけから覚悟している。

あずみがくやしいと思っているのは、自らが終生の主と決めた少年。その少年を守れないでいくこと。それだけだった。

「やれ。」

ジョン・ドウと名乗った男。主を狙う男の命令でやつ部下たちが自らの命を断とうと殺到してくる。いつもなら、万全な状態ならあの程度の男たちなど造作もなく葬れる。しかし今の体調はジョン・ドウ。名無しの男によって万全から程遠い状態。故に彼女は自分が生きるのは無理だと確信した。

せめて主に見苦しい最後を見せまいと目をつぶり、自らに下される死神の裁決を待つ。

「やめろおおおおお！？」

主の叫び声を最後に聞きながら。

(英雄様……。あなたを守れない不甲斐ない私をお許してください)

ドガああアン！！

大きな衝撃音があたりに響き渡る。しかし……。

(死んでない……?)

そう彼女はまだ生きていた。やつらは自らに及ばずともそれなりの精鋭。そんなやつらがまさかあの状況で自らを仕留め損ねる訳がない。そんな時、自らの声が聞こえた。

「やれやれ、物見遊山で来てみればまさか殺人現場に行くわすとは。

さすがに予想外だったぞ。」

（誰だ、この声？）

知らないはずなのに妙に安心する。いつたい……。

辺りの状況を確認するためにあずみはゆっくり目を開ける。辺りはすでに土煙が晴れていて、目に映るのは、こちらを驚愕の目で見ている英雄とエリカ。そして忌々しい者を見る目で誰か《……》を見ているジョン・ドウ。

「……………」

自らの近くには自分にとどめをさそうとしていたジョン・ドウの部下が倒れていた。状態をみると死んでいるわけではなく、ただ気絶させられただけらしい。

そして、自らの目の前には

自分を守るように、一人の男が立っていた。いや、少年というべき

か。

年齢はおそらく英雄と同じくらいだろう。艶のある赤い髪に宝石の  
ような赤い瞳。肌は褐色で、顔は鋭すぎないほどにつりあがった目  
が添えられたその顔つきは、あと十年もすれば多くの女性を引きつ  
ける魅力を発するようになるだろう。

そんな少年がそこに立っていた。

「……………」

ここはいわば血なまぐさい戦場。そんな場所に彼のような少年が立  
っているのは場違いなはずなのだ。はずなのだが、あずみは、いや  
その場にいる誰もがそんな彼をを場違いだとは思わなかった。

まるで戦場に立つ歴戦の武将のような。そんな風格を彼は持ってい  
た……………」

誰もが少年の登場に驚き言葉を失っている中、いち早く口を開いた  
のは、先程まであずみを圧倒していたジョン・ドウだった。

「ぼづや……………」

ジョン・ドウは警戒しながら少年に問いかける。それもそうだろう。

いくら戦闘に気をむけていたからといって、自分とあずみ。二人の達人ともいえる戦闘者に気づかれずに現れ、自らの部下を瞬殺したその腕前。警戒するに越したことはなかった。

そのジョン・ドウの問いかけに少年は一瞬考える仕草をしていたが、すぐに口元に笑みを浮かべると、不敵に答える。

「俺の名前は篠宮四季。通りすがりの

料理人さ。」

そして赤髪の少年は、戦場に降り立った。

第十話 九鬼英雄ですか。終わり



第十話 九鬼英雄ですか。 少し修正しました。（後書き）

次回、四季がなぜ上海にいるかという理由の説明と戦闘シーンにはいるかなという感じですが。次回も見てくれたらうれしいです。

それでは以上、ラドゥでした!!

第十一話 上海に俺参上！ですか。 少し修正しました。（前書き）

いや〜寒くなってきましたねえ。布団から出るのがマジで億劫になります。・・・就職活動もしなきゃなんないのに・・・。

お気に入り登録700件突破。ありがとうございます。これもマジ恋効果か!?

そういえば最近マジ恋のssを見ていたら「カーニバル」という言葉がでてきましたが、これって原作イベントですかね？自分はマジ恋はssしかみたことないのでわからないんですよ。

原作イベントだったら誰がこの「カーニバル」について詳しい情報をくれると助かります。

さて今回の話ですが・・・。すいません、前回四季が上海にいる理由と戦闘シーンになるといいましたがちょっと長くなってしまったため分けました。そのせいでちょっとぐだぐだになってるかも・・・。

それでもよかったですらどうぞ！

前回のあらすじ

テロリストの前に篠宮四季参上！

第十一話 上海に俺参上！ですか。 少し修正しました。

第十一話 上海に俺参上！ですか。

九鬼家と霧夜グループが協同で出資したホテル、『上海ニューホテル』。

この最新鋭の、しかしテロリストのせいで倒壊の危機にあるホテルのパーティー会場で二人の男がむきあっていた。

一人はジョン・ドウ。『名無しの男』と名乗るテロリスト。

黒のスーツに身をつつむその男は、一見そこらにいたただのサラリーマンのようにも見えるが、その目、今は突然現れた正体不明の少年を観察するために細められた目に宿っている光は、明らかに常人が放てるものではなく、その戦闘の腕前も『女王蜂』といわれた傭兵。忍足あずみを無傷で下したことから尋常ではない強さを持っていることがわかる。

もう一人は篠宮四季。

褐色の肌に赤い髪をたなびかせ悠然と立っているその少年。かの川神鉄心、ヒューム・ヘルシングと同じく、世界最強クラスの實力を持つ裏世界にその名を轟かす武術家、『鬼神』篠宮奉山の息子であり、実はとある武人の血もひいているのだが、まあそれはここでは関係ないので、また今度語ることにしよう。

多大なる才能をその身に秘めた、居酒屋『トビウオ』の跡取り息子<sup>チート</sup>。

戦う料理人見習いである。

そのお互いにどうみても場違いな見た目の二人の戦闘者が今ここに対峙していた。

サイド：四季

「料理人ね……。君が何者か知りませんが、どうやってここへ？  
表には一応腕利きの部下を置いておいたのですが。」

「部下？……。ああ、あの人たちなら少し眠ってもらったよ。今頃  
むかいのコンビニで全員昼寝をしてるんじゃないかな？」

「！？ほう。それはそれは……。」

俺の言葉に目の前の男は目を細める。

うーん。警戒されてんなあ。

まあ急に現れたガキが自分の邪魔をしただけじゃなく、十人もの部下を一瞬で倒したんだから警戒すんのが当然だが。

ただ殺気をむけんのはやめて欲しいんだけどなあ。いくらモモさんや釈迦堂さんとの稽古で殺気に慣れてるとはいえ、（あの人がキにも容赦ないんだよなあ）浴びてて気持ちいいものでもないし。

・・・がくがくぶるぶる。」「これは怖いわけじゃないんだから！  
ただの武者震いなんだからねー！！

・・・やめよう。男のツンデレなんて需要ないし・・・。

しっかし、

(なんでこんなことになってんのかねえ。)

俺は自分の置かれた現状について考える。

なんでただの小学生(笑)の俺がこんな殺伐とした場にいるのか。  
それは父さんの発言がきっかけだった。

～回想～

それは俺と小雪が、居間でテレビを見ながら、冬休みをどう過ごす  
うか考えていた時のことだった。

「上海？」

「そ。上海？。商店街の福引きであたったのよ。」

そういつて父さんが見せたのは、『上海一泊二日旅行券』とかいて  
あるチケット。

「ちょうど明日から冬休みでしょ？だから久しぶりに家族水入らずでいきましょう？」

「わゝ。僕旅行なんて初めてだよ！」

母さんの言葉に喜ぶ小雪。確かに家で家族旅行なんてしたことなかったしなあ。それに風間ファミリーに入ってから、ただでさえ店にでているために少ない両親との時間が減ってるように感じていた。・  
・父さんたちに気にしてくれてたってことかな？気にしすぎか。

まあ、反対する理由もないし、いつか。・・・・・なんか嫌な予感がするけど。

きんぐくりむぞん！

まあ、そんな訳で上海に着いたわけなんですけど、ただいま単独行動中です。

なぜかというと、

「迷っちった・・・。」

そう、上海まで着いたのはいいのだが、ホテルから出てファミリーの皆のお土産を買いに行こうと繁華街にむかっていたんだが、物を見るのに夢中になりすぎてホテルの場所がわからなくなってしまったのだ。

まさか前世合わせて三十路過ぎてんのに迷子になるとはorz……。

まあ、最近やっと買ってもらった携帯で両親には連絡してあるし、携帯にGPSもついてるから、なんとかなるだろ。

そんな感じで道を歩いていると、

「ん？お〜！なんだあれ？」

目の前には天を突くように立っている巨大なホテル。俺たちが止まることになったホテルも結構立派だったが、このホテルはそれとは明らかに違う。ただの旅行者が利用するものではなく、なんとというか「ろいやる」な客が使うような感じのする

……「ろいやる」ってなんだよ……。

よく見ればホテルの周りには数人の人。ホテルの人とは違う統一された黒い制服を着た人がちらほら。誰かのSPかなんかだろうか。

本物のSPなんて初めて見たなあと感慨にふけていると、

「ドッグーーン！」

「！？」

突然の爆発音。発生場所は先程のホテルから。

「おい！今のは何だ！？」

「わからない。今確認中だ。」

SPの面々も状況が把握できていないようだ。

突然の事態に俺も困惑していたが、

「ん？」

何かが急速に接近してくる気配がする。おそらく車なのだろう。しかし明らかに尋常なスピードじゃない。

俺はとっさに近くのコンビニらしき店に身を隠した。どうやらさっきの爆発音中にいた客たちはどこかに非難したようだ。店には誰もいなかった。

店の中からホテルを観察していると、

グオオオオオオオオ！！！！

凄まじい轟音が近づいてくる。

「！？なにかくるぞ！！！」

一人のSPが音に気付いて指差した道には急スピードで近づいてくる数台ほどの黒いワゴンが。

「止まれ！止まらないと撃つぞ！！！」

SPの面々がワゴンにむけて拳銃を構えるが、それでも止まる様子

は見えない。さらにスピードを上げて突っ込んでいく。

「撃てえ!!」

『ハッ!!』

恐らくリーダーらしき男の人が全員に号令をかける。

それと同時に発射される弾丸。

パン! パパン!!

S Pが放った弾丸は、しかし、

「な!？」

全てワゴンに弾かれた《・・》。どうやら特殊な造りをしているよう  
うでかすり傷ひとつ負っていない。

スピードを落とさぬままS Pへとむかっていく。

「ぜ、全員退避——!!」

その言葉とともにS Pの面々はあちこちに散っていく。

キュー——!! キュー——!!

ワゴンはS Pのいた場所。つまりホテルの目の前に止まる。って  
うかよくあのスピードで無事に止まれるな。

S Pは警戒しているのか、ワゴンの周りを遠巻きに包囲する。

ガチャ

「くくビク!?」「くく」

戦闘のワゴンからでてきたのは一人の黒いスーツの男と、数人の戦闘服のようなものを着けた男。他のワゴンからも続々とでてくる。

ざっと三十人ほどか。

黒スーツの男はそのままホテルの中に入って行こうとするが、

「ま、待て!」

S Pの一人が我に返ったように男をひきとめる。

黒スーツの男はS Pのほうに顔をむけた。

その顔には笑みが宿っているが、どうにもうさんくさいなあ。あの笑顔は。

「なにか?」

「なにかじゃない!なんのつもりか知らないがおとなしくしてもらおうか!」

そういつとS P全員が男にむかって銃をむける。

黒スーツの周りにいる男たちが男を守ろうとするが、当の本人は「

大丈夫です」と手でそれを制す。

「いやだといったら・・・?」

黒スーツがSPたちを挑発するようについて、

「こつするまでだ。撃て!!」

パン！パパパン！！

その号令で一斉に弾が発射される。

ちよっ！いきなりっすか!?

弾丸は黒スーツの男に直撃すると思っただが。

「なっ!?!」

そこには無傷の男の姿が。SPの面々は驚いているが、俺には見えていた。

男は握っていた拳をSPたちの目の前にかざし、それを開く。

ジャラジャラジャラ

「なんだとお!?!」

男の手から落ちたのは複数の銃弾。そうあの男は、自分にむかってきた銃弾をすべて受け止めていた《・・・》のだ。

あの男、一見サラリーマン風だが、間違いなく達人クラスだ。

男は驚愕しているSPをあざ笑うとホテルの中に入っていく。

「ま、待て！」

我に返ったSPの一人が後を追おうとするが、

「撃て。」

パン！

「ぐあっ！？」

「な！？」

黒スーツの命令とともにそのSPが黒スーツの周りにいる男の一人に撃たれてしまう。

「貴様っ！？」

仲間を打たれたSPたちが黒スーツに銃をむけるが、黒スーツの部下たちも銃を構える。

一色触発の状態。

「私を止めたいのならその部下たちをどうにかするのですね。．．．  
まああなた方には無理かもしれませんが。」

そういつて黒スーツはホテルの中に入って行った。

それを俺はコンビニの中で見ていた。

「さーて、どうしようかな。」

俺は緊張感あふれる現場を緊張感なく見ていた。

え？人が殺される場面を見てなんでそんな平気な顔してるのかつて？

そりゃあ、こちらら一度死んでる身だぜ？それに血だつて父さんの稽古や川神院での稽古でも結構見慣れてるし。釈迦堂さんなんかかなり容赦ないからなあ。子供なんだからもっと手加減してくれればいいのに。まあ、それだけ認めてくれてるってことかもしれないが。

・・・まあ愚痴はここまでにしとくか。問題は俺がここからどうするかだ。

俺は元々無関係だからこのままホテルに戻っても良いんだが、

「あの黒スーツ・・・。」

周りにいた戦闘服の男もかなりの腕だったが、あの男は別格だ。

拳銃の弾丸を受け止めるなんて川神院でも上位の修行僧くらいの腕はないと無理なのに。・・・避けるくらいならかなりいるんだが。・ま、そのくらいは普通だろ（普通ではないですby作者）。

まあ少なくとも見積もってもあの黒スーツはそれくらいの実力はあるということだ。

あの部下くらいならなんとかSPたちで対処できるだろうが、あの男はある程度の実力がないと、いや少し腕が立つくらいでは無理だろう。それこそ川神院の上位修行僧を相手できるくらいの実力がないと無理だろう。そう、例えば俺の《・・・》《ような・・・》。

「はあ・・・。さっさとホテルに戻りたいんだがなあ。」

さっさと戻らないと父さんたちが心配するし。

パン！パパパパパパン！

おっと、ぼつつとしてたら銃撃戦がはじまったら。

「とりあえずあれ止めて中に入るか。」

そしてホテルに帰ったらゆっくり旅行を満喫するんだ。・・・あれ、これって死亡的なフラグ？

そんなことを思いながら俺はホテルへと歩みを進めるのであった。

〈回想終了〉

まあそんな訳で速効で、でていって、それなりに時間をかけたが、銃撃戦を鎮圧し俺はここにいるのである。

まあたぶんかなりの精鋭なのだろうが俺は小さいころから父さんとか川神院の武道家たちと稽古しているから動き自体はすぐに対処できるものだったんだが銃を相手にするのは初めての経験だったのでそれなりに手こずった。

それでもしばらくしたら慣れてきたから全力でぶっ飛ばしてやったんだが。・・・勢いにまかせてSPも二、三人吹き飛ばした気がしたんだが。・・・まあ気のせい・・・だと思っ・・・。

俺はその場から逃げっ、いや、急いでホテルの中にむかった。

まあそれでパーティ会場の中を気配を消して覗いてたんだが、さすがに目の前で人が死にそうになるのは見られなかったから、こうなったわけだ。

ふむ・・・自業自得か・・・orz。

そんな感じで一人で回想に耽って勝手に落ち込んでたんだが、

「それで・・・君はなにが目的で来たんだい？」

おっと、少し回想に耽りすぎたようだ。しかし目的ねえ。なんとなく来たっていつても納得してくれないだろうしなあ。

「遊びのつもりなら・・・死にますよ？」

おおつ。平気そうに見えて相当苛立ってんな。かなりの殺気だ。こんな殺気は釈迦堂さんくらいにしかくらったことないな。・・・あの本当に容赦・・・いや、釈迦堂さんの愚痴はもういったからいいか。

「そ、そうだ！そいつのいうとおりだ。ガキは後ろにさがってる！そいつは私がやる！！！」

そう叫んだのは先程目の前にいる黒スーツと戦ってた給仕服のお姉さん。いや、俺もさがれんならさがりますけどね？無駄に怪我したくないし。でもねえ。

「そのボロボロの体でいわれても。」

「うっ。」

そう、この給仕さんは俺と黒スーツの会話の間に大分体力を整えたようだ。まだ本調子じゃないはずだ。それくらいは気の流れを見ればわかる。

「あなたはあそこにいるあなたの主のところまで休んでればいい。」

「っ！？ガキのてめえを置いてけつてのかよ！！！」

うーん、しつこいなあ。この人なりに心配してくれてんのはわかる

けど。

しかたない。

「そんな心配しなくて大丈夫ですよ。」

そして最低限に抑えてた気を解放する。

「「!？」」

「俺は、結構強いですから。」

給仕さんと黒スーツが俺の解放した気の量に驚いている。まあ今まではあの戦闘服を倒すのに十分くらいの気しか解放してなかったの  
でせいぜい少し強いくらいにしか感じられなかったからあそこまで  
驚いているのだろうか。

「んじゃそういうことで。給仕さんは自分の主でも守っててねえ。」

「あ、おい！」

給仕さんがなにかいってるが聞こえません。俺はそのまま黒スーツ  
の目の前に立つ。

剣術でいうところの一足一刀の間合い。

お互いすぐにも相手に一撃を入れられる距離。

「本気ですか？」

「?なにが？」

黒スーツの声に俺は首を傾げる。

「あなたは本来この戦いにはなににも関係がないはずだ。九鬼家の者でないことは先程の九鬼家の護衛とのやりとりでわかっています。つまり戦う理由があなたにはないはず。」

ああ、そういうことか。

「いっておくがここからは殺し合いです。いくら気の量が高くともあなたはまだ少年。そんな経験は皆無に等しいはず。そんなあなたが・・・俺に勝てるんでも。」

丁寧の仮面を自らはがし恫喝する。

先程の比ではない殺気が俺に叩きつけられる。

・・・うんもつともだ。

いくら殺気に慣れてるといっても。いくら自らが死を経験したといつても。

本物の殺し合いを俺は経験したことがない。それはもしかしたら俺が思った以上に不利なことかもしれない。

でも、

「関係ないね。」

「なに・・・？」

俺が話すのはこの鬼道流《力》を手にするときに誓った言葉。

「俺は正義の味方じゃない。全てを救うなんて不可能だ。・・・でも！」

俺は構える。

無構え。

ただの自然体に見えるその構え。

それは最速の武術だけに許される変幻自在の構え。

「俺は目の前で起きている理不尽だけは許せない！俺が戦う理由はそれだけでいい！！」

それは甘ったるい幻想。

何も知らない子供のような理想。

でも、

これだけは譲れない！！

俺の言葉に黒スーツの男は不快そうに顔を歪める。

「理解できませんね。そんなもの。所詮は子供ということですか。」

「いってる。甘いのはわかってる。理解してもらおうとも思っていない。……もういいだろう?。」

「そうですね。私もひくわけにはいきませんから。」

黒スーツと俺の気で空間が軋む。

「始めよう。」

「ええ。」

そうして俺たちの殺し合いは始まった。

第十一話 上海に俺参上!ですか。終わり

第十一話 上海に俺参上！ですか。 少し修正しました。（後書き）

どうでしたでしょうか。

次はこの作品二回目の戦闘シーン。・・・できるだけ長く書きたいが・・・できるかな？

ていつかすっかりこっちがメインになって遊戯王がおろそかになってるこの現状……。いやこっちのほうが書いてて楽しくて。そろそろあっち書かなきゃいけないんだけど・・・いつそ書きなおすか？まあいいか。

以上、ラドゥでした！！

第十二話 初めての実践 決着！！ジョン・ドウ戦ですか。（前書き）

どうも、更新遅れてすいません。

というか遊戯王が進まない……。まさか、自分の使わないカードを使うのがこれだけ難しいとは……。

今回はあらためて自分が戦闘シーンが苦手だと再認識させられる話でした。というか、ジョン・ドウの使う技も自分で書いている意味わかんないし。

・・・まあ、いいや。それではどうぞ……！

前回のあらすじ

四季が上海にやってきた。

## 第十二話 初めての実践 決着！！ジョン・ドウ戦ですか。

第十二話 初めての実践 決着！！ジョン・ドウ戦ですか。

九鬼家には、かの家を支える多くの従者たちがいる。

この従者たちは優れた人材を愛する九鬼家の日々の活動の成果であり、家事から、諜報。命がけの荒事まで全てをこなす、まさに精鋭とっていい集団である。

彼らは九鬼家に絶対の忠誠を誓っており、九鬼家のためならどんな難事でもこなすが、今そんな彼らでも解決するのにやっかいな出来事が起こっていた。

九鬼家の長男である『九鬼英雄』。彼が上海でテロに巻き込まれたという報告がはいったためである。

ここは、上海テロの情報が入ったときに急遽立てられた作戦本部。そこに数名の人間が集った。見る人が見ればただものじゃないことがわかるその精鋭たちは、九鬼の従者たちでも最精鋭の、『序列一桁台』。いわば九鬼家従者の幹部クラスの人間たち。

円卓に座る彼らを仕切る大柄な男は、『ヒューム・ヘルシング』。

かつて武神、『川神鉄心』とライバル関係にあった間違いなく世界最強クラスの戦闘力を誇る猛者であり、今現在は九鬼家の人間を自分の主にふさわしいと認め、九鬼家従者のトップ、『序列零位』の地位に収まっていた。

「それではクラウディア。現状の報告を頼む。」

「はっ。了解しました。」

そうヒュームに返答したのはヒュームの右腕であり、現在侍従部隊の『序列1位』を拝命しているクラウディア・ネエロである。

彼は戦闘力ではヒュームに劣るものの、どんな難題も「簡単なことでございます。」と言い放ちやり遂げるその執事としての力量はかの「執事学校」を、主席で卒業した経歴にふさわしいものであり、自らが出会う者ほとんどを「赤子」扱いするヒュームすらも信頼を置くほどである。

「まずは事件の発生は9時間ほどまえ、上海に派遣されていた九鬼の諜報部が何者かに殺害されたことからと見るべきでしょう。」

そのクラウディアの報告に円卓の幹部たちがざわめく。

「静かに！報告は最後まで聞け。クラウディア。」

「はっ！この情報は運良くこの襲撃から逃れられることができた見習いからもたらされたものです。もっともその者も奴らの目をかくぐるため、今まで下手に動けなかったよう。その事について申

し訳なさそうにしてみました。」

「確かに九鬼家の人間として少し情けなくはあるが。」

「だがその者は見習いだったのでしょう？彼にそこまで求めるのは酷なのではないかと。むしろ生きて情報を伝えてくれたことを褒めるべきでは？」

幹部たちの意見にヒュームはあごに手を当てて考える仕草をする。

ヒュームは普段の言動から、一見粗暴な印象を受ける場合もあるが、それはあくまで言動だけで実際はとても思慮深く、もちろん「九鬼家のためならば命を惜しむな！」などという玉碎主義とはまったくの無縁であり、故に件の新人従者に対してもヒュームは正当な評価を下した。

「その新人が生き残ったのはただの運のよさのようだが、それでも私怨に囚われず、生き残り我々に貴重な情報をもたらした功は大きい。」

その者の情報が無ければ事態に気づくのがもっと遅れたかもしれないしな、とヒュームは続ける。

「クラウドディア。その者の名前は？」

「名前は武田小十郎。揚羽様の遊び相手を務めていた少年でございます。」

「おお、やつか。」

クラウディオの言葉にヒュームは口の端を歪める。

『武田小十郎』。彼は九鬼家の長女である『九鬼揚羽』の傍役として幼いころより仕えていたが、本格的に九鬼家の従者となるため、修業を開始したばかりである。今回、彼が上海で諜報部と一緒にいたのもその一環であったのだ。

そんな彼は、その揚羽に対する信仰ともいうべき凄まじい忠義心の持ち主として九鬼の従者たちに知られており、失敗は多いがその実直な性格のためか、彼を嫌うものは少ない。

特に彼ら序列一桁台の面々にとっては、未熟だが憎めない彼をできる悪い息子や弟のように思っていた。

「ふむ。ならばやつには今回の褒美として俺直々に鍛えてやるとしよう。」

「ヒューム殿がですか？」

「うむ。やつも揚羽の役に立てるようになるなら喜んでうけるだろう。まあ、ちと厳しくなるかも知れんが、やつは根性だけが取り柄だ。どれだけ成長できるかは知らんが、やつなら最後までやり遂げるだろう。」

ちなみにこのヒュームのいう、「ちと厳しくなる」という言葉の「厳しくなる」度合いというのは、普通の武道家が裸足で逃げ出すほどの厳しさであるが、それに耐えるとヒュームが言葉にしているということは小十郎の根性だけはヒュームは買っているということである。

ちなみにこの「ヒュームのちと厳しい修業」を受けた小十郎は、原作では序列999だったその地位は序列200台になるまで成長したが、それでもところどころで大きなポ力をやる性質はなおらず、その度に揚羽の拳を食らうようになるのは完全なる余談である。

「小十郎の件はそのようにしろ。お前らもそれでいいな！」

『はっ！』

ヒュームの声に幹部の面々が答える。元々小十郎に対し否定的な意見を出した人物も本気でそういつたわけではないのでこの処置には誰も文句をいわなかった。・・・小十郎がヒュームのしごきに耐えられるかどうか心配する者はいたが。

「それでは話を戻すぞ。ヒューム。」

「はい。どうやらやつらの行動は九鬼家への情報の伝達を遅らせることにあつたようで、この他にも様々な手をつっているようです。それは手元にある資料を見てもえればわかると思います。」

クラウドイオの言葉に、面々は手元の資料に視線を落とす。そこにあるのは今回のテロを引き起こした者たちが自分たちの行動を遅らせるために打った手の数々。

敵ながら見事といえる策の数々だとヒュームは思う。これなら我々の元にテロの情報があるのが遅れたのがわかる。

「このせいで我々の行動は後手に回ることになりましたが、このおかげでわかったことが二つあります。」

「それは？」

「一つはこのテロリストが所属する組織が、思いのほか規模が大きく、影響力があるということ。これは我々九鬼の行動をここまで抑え込んだその事実から推測できます。」

九鬼家のことを知らない者からすれば彼らが自分たちの力を過信しているような言い方にも聞こえるが、彼らの力量からすれば、この言葉は限りなく正しい。

「そして二つ目は、英雄さまの少なくとも生存は確實ということですよ。それは「あまりにも九鬼家を警戒したこの策の数々から推測できる・・・か？」その通りです。」

言葉を途中でヒュームに遮られたクラウディオは、しかしそれに怒ったようなそぶりは見せず、称賛するような目でヒュームを見ていた。

それでこそ、自らの上位に立つ者だと。

「ヒューム殿の言った通り、この九鬼家への対策の数々。もし英雄様の身を害するのが目的ならこのような面倒な真似をせず、直接刺客なり、ホテルごとダイナマイトで葬るなどしたほうが早いでしょう。これほどの組織の人間ならば、私たちに足取りを掴ませないよう、手掛かりを消すこともできるでしょうし。これらをせず、わざわざこのような真似をしたということは彼らの目的は。」

「英雄の身柄の確保。そして九鬼家へのなんらかの交渉。といったところか？」

「おそらくは・・・。」

そういつてクラウディオは自らの仕事は終わったとばかりに席に着く。

ヒュームはため息をつき、足を組んで頬杖をつく。しばし目を瞑り思考する。どう行動したらこの事件を効率的、そして英雄を傷つけずに解決するにはどうすればいいのかを。そして再び自らの眼を開けると、目の前にいる自分の部下たちに宣言する。

「今回は、俺自らが乗り込む。」

『なっ!?!?』

その場にいた面々は驚愕する。

『ヒューム・ヘルシング』

前述したように、この男は武神、川神鉄心と同格として知られている男であり、九鬼家の最高戦力でもある。武の象徴といってもいい存在。その男が自ら動くというのだから。

ヒュームが自ら英雄を助けに行こうとしてるのには理由があった。

もちろん、彼が九鬼家に仕える身というのもあるが、彼自身英雄のことをかっているというのもある。

英雄の幼いながら確固とした王としての信念と、そのカリスマ性は、彼の弟子である揚羽とは、また別の輝きを彼に魅せていた。

「それでは他のものは準備を」「それは少し待ってくれんか。」「なに？」

その声は彼らが会議に使っているこの部屋の扉の向こうから聞こえた。

ギイイ

音を立てて扉が開く。

『!?!?!』

「少し待ってくれんかといったのだが。」

扉の向こうにいたのは一人の初老の男。頭に白い物が混じっているが、いまだ若々しいその姿は、しかし、常人には纏えることができない覇気につつまれている。それは武道を極めた達人でも纏えない、産まれながらにして人の上に立つことを義務付けられたものだけが纏えるものだった。この男の名は、

『み、帝様っ!?!』

「そう固くなるな。楽にしてい。」

そう、この男の名は『九鬼帝<sup>くきみかど</sup>』。王の一族、九鬼家の現党首であり、彼ら九鬼家従者たちの主である。

その男の登場に思わず狼狽する面々であったが、それにかまわず、

ヒュームは自らの主に対応する。

「それでさっきの言葉はどういう意味だ、帝。」

・・・主に対する言葉ではないように思えるが、彼の主に対する態度はこれが普通である。まあ、帝自身もヒュームのこのような態度になにもいわず、むしろ彼はこれが好ましいと思っているので問題はないだろうが・・・。

「今回はお前がでなくても問題ない。我が外部の人間に依頼した。」  
ざわっ・・・。

帝の言葉に幹部たちがざわめくが、ヒュームはそれを無視して帝を見つめる。いや、睨みつけてるといったほうがいいのだろうか。

「・・・ふん。俺になんの相談もなしに決めたのは別にかまわん。主は貴様。つまり決定権は貴様にあるのだから。だが、そいつは俺も納得のいく人物なのだろうな。」

それもそうだろう。九鬼英雄の救出。それは絶対に成功させなければならぬ。そのような任務に実力のないものをつけるのは、彼のプライドからも、彼の立場からも許すわけにはいかないのだから。

そのヒュームの心配を帝は鼻で笑う。

「問題ない。その男は貴様もよく知っている人物だからな。」

「なに・・・？」

「篠宮奉山。鬼神と呼ばれた男だよ。」

『っ!?!?』

「ほう……。」

帝の言葉に幹部たちは驚く。ヒュームも一瞬目を瞠るが、今は面白そうなものを見つけたような顔をしている。

『篠宮奉山』。「鬼神」の名で裏世界で知られるその男の名は、表世界ではあまり知られていないが、精鋭中の精鋭である彼らは知っていた。

その武力は自らの長、ヒューム・ヘルシングに匹敵するということも……。

「ふむ。奉山ちゃんがでるなら確かに俺の出番はないな。しかしよくそんな都合よく依頼ができたな。」

「なに、ちょうどよく彼も家族と一緒に上海に旅行に来ているのをメールで知ってな? だから彼に頼んでみたら先程OKをもらったのだ。」

実は帝はヒュームを通じて過去に奉山に会っており、そのときに意外に馬が合い、友人関係になったのだった。……おそらく四季がこの場にいたのなら遠い目をしてこういうだろう。「もう父さんの無茶苦茶ぶりには慣れた。」と……。

「それに彼の息子もいるようなのでな。大丈夫だろう。」

「奉山ちゃんの子息子というと、確か、四季とかいったか？」

「ああ。なんでも教え込んでいる鬼道流もかなりの練度になっており、すでに小学生の身で川神院の修行僧を圧倒する実をつけているとか。」

「ほう……。さすがは奉山ちゃんの子息だ。……。もし機会があったら揚羽との模擬戦を頼んでみるか。」

「ほう、それは見ものだな。」

「だろう?。」

二人はそう笑いながら部屋をでていった。その場にいた面々も自らの持ち場に戻って行った。

自分のできることを成すために…………。

サイド：四季

ぞわっ!?

な、なんだ!？今なんか寒気が。具体的には望んでもないのに強敵との対決をしなくちゃならなくなってしまったような、そんな感じがしたぞ!？

「よそ見とは余裕ですねえ？」

あ、やべ。

俺の首を刈り取らんとする死神の鎌が、凄まじい勢いでやってくる。

ブオオオオン！！

「そおおい！！」

俺はそれをマトリックスの要領で避け、そのまま床に手をつき、体を回転させながら目の前の敵、（ジョン・ドウっていったけ？）それに遠心力のついた変則的な回転蹴りをぶちかます。

「ちいッ！」

ドッゴゴオオオン！！

「ぐっつう！？」

ジョン・ドウは腕を交差し、空手の十字受けの要領でガードしたが、衝撃を受け流しきれなかったようで部屋の壁ごと吹き飛んでいった。

・・・手応えはあったが・・・。

「やったのか・・・。」

と今は他の人と一緒に俺らの戦いを見ていた、額にバツテンの傷が

ある男の子が、と呟く。

って、バカやめろ。それは、

ガラガラガラ

「ふう……。やれやれ、凄い威力でしたねえ……。私でなければ今の一撃で終わってましたよ。一張羅が台無しだ。」

ああ……。やっぱりフラグだったか……。

壁の向こうから現れるジョン・ドウ。

その様子から見るにダメージはほとんどおっていないようだ。（しかし、いったいどういうカラクリだ？）

今の一撃は致命傷にはならないものの、かなりのダメージが期待できる手応えだったはずだ。

それなのに、やつにはダメージがとおった様子がない。

まるでダメージをよそに流しているような。

（ん？よそに……流す……？）

……まさか。

ある一つの考えがつかんだ俺は手元に気を集中させ、ジョン・ドウにむけて放つ。

俺の手から放たれた気弾は、複数の小さな弾に分裂し、散弾銃のようにジョン・ドウに襲いかかる。

【鬼道流 魔弾・鬼礫<sup>おにつぶて</sup>】。

鬼道流の基本技である「魔弾」の応用技である。

「っ!?!? ちいつ!」

ジョン・ドウはそれらを避けようとせず、その場で受け止めた。

ズドドドド!

気で構成された弾がいくつもやつにぶち当たる。

しかし、

「数の多さには驚きましたが、無駄だとわからないんですかねえ。」

やはり無傷。

しかし、今のを【観察】したことでやつとわかった。やつの技の力  
ラクリが。

「ぶっ……。」

俺はいつもと違う行動をとる。

拳を下ろし、その場で跳ねる。

リズムをとるように、トーン、トーンと。

「? いったいなんの、っ!?!?」

ジョン・ドウの疑問の声は、自らの驚愕によって止まる。

何故なら気づいたら四季が目の前に迫っていたのだから。

「くっ!?!?」

今までのスピードとは明らかに違うその速度に驚いたジョン・ドウであったが、避けられないと理解したその攻撃を受け止めるために腰を落としてむかいつ。

それは自らの技術に絶対の信頼を持っているものだからできる行動だった。

それに速いといっても、四季の動きは直線的でよけきれないものの、予測できないものではなかった。

なのでジョン・ドウはいつもと同じ行動にでたのだ。

それが四季の狙い《・・・》とも知らずに・・・。

四季の拳がジョン・ドウの顔面に迫る。予想通りとジョン・ドウは技を発動させたが、

「なっ、なに!?!」

その拳はジョン・ドウを通り過ぎた《・・・》。そのまま四季は床に手をつき、体を捻ると、そのまま蹴りでジョン・ドウの顎をかちあげる。

「がッ!?!」

突然の不意打ちに技が発動できなかったジョン・ドウの体は、そのまま上に跳ね上がる。

それを四季も追う。逃がしはしないと、壁を気を纏った足で駆け上がり、ジョン・ドウの目の前に躍り出る。

「これでいい。ここなら

あなたの技も使えない。」

「っ!?!? 貴様まさか!?!」

ジョン・ドウは驚愕する。まさか、自分の技を見破ったというのか。自らの半分も生きてないような、こんな小僧が！？

「いくぞ、鬼道流室内戦技。」

狩り鬼。

ここで皆さんに質問だが、「跳弾<sup>ちよつだん</sup>」というものをご存じだろうか。

これは銃を使う戦闘技術の一つで、要は障害物を利用し銃弾を跳ねさせ、威力を増した攻撃を、相手の不意を突く一撃をくらわせるといふものである。

今回四季が使用した技。【鬼道流室内戦技 狩り鬼<sup>かりおに</sup>】。これは簡単  
にいえばその跳弾と同じ理論でできた技である。

想定された戦場は今回のような四方が壁に囲まれた空間。つまり「室内戦技」という名の通り、建物のなかでこそ威力の発揮する技であり、今回は、まさにこの技を使うのにぴったりの状況であった。



「どうし・・・で、気づいたの・ですか？」

床にたたきつけられ息も絶え絶えになっていくジョン・ドウが同じく息切れをしている俺に話しかける。あの技、使い時が限定される癖に体力使うんだよなあ。

ていうか、あんだけ痛めつけたのにまだ話す体力があるとか。どんだけタフなんだこいつ。・・・まあ、いいが。

俺はジョン・ドウの問いに答える。

「初めは硬気功を使用しているのかと思ったんだが、それにしてもダメージが無さ過ぎる。通常硬気功というものは体を気の力によって鎧のようにするもので、内部に響く衝撃までは完全には無効にすることはできないはずだからな。そこで俺は思ったんだ。まるでダメージをよそに流しているようだ。」

「・・・なるほど。」

「そこで試しにあの気弾を打った。」

「あれはあなたの推測を確かめるためだったのですか。」

「ああ。結果は俺の推測通りだった。」

お前の

技の正体。それは相手からうけた衝撃を自らの身に纏った気の膜で  
衝撃を地面に逃がしていた。違うか？」

「ふう……。その通りです。」

鬼磔を放ったときに見稽古で観察したら、やつを、とりまく気の流  
れが下にむかっていることがわかった。

そしてやつ足の足に接している地面には、戦闘中には気づかなかつた  
が、大きなひび割れできていた。これは地面に衝撃を流した結果で  
あると推察できる。

つまりは体を覆っている気の膜を利用し、衝撃を地面に逃がす。飛  
雷針と同じようなことをしたのである。

（しかし、解説しといてなんだが、とんでもないことするな、こい  
つは。）

気の膜を利用し、衝撃を地面に逃がす。いつのは簡単だが、恐らく  
とんでもなく精密な気のコントロールを要する技術のはずだ。

少なくとも、気のコントロールだけならこいつは川神院の師範代、  
釈迦堂さんたちよりも上だろう。

「だがその技には弱点、いや条件があった。恐らくその技は地面に接してなければ。そして動きながらでは発動できないのではないか？」

「ええ。その通りですよ。」

ジョン・ドウも、この後に及んで隠すつもりはないのか、俺の言葉に肯定する。

「地面に接してなければ発動できない」というのは、やつが攻撃をその場を動かさずつけとめようとしていたことから推察できた。

やつは避けれる攻撃は全て避けていた。俺の見限り、よけれない攻撃だけそのままつけていたように思えた。

もし、動きながら発動できるなら、わざわざ攻撃を避ける必要はなく、そのまま攻撃を気にせず突っ込んでくればいい。なのに回避行動をとる必要があったということは、回避しながらでは技を発動できないということである。

それにやつを壁にむかって吹き飛ばした時、やつはこういった。「すごい威力」と。

やつは衝撃を地面に流すことができる。それはつまり攻撃の威力を流すということであり、威力を知ることができるわけがない。

あの時、こいつは衝撃を流しきれなかったことになる。つまり、

「お前、壁に吹き飛ばした時

やせ我慢してたろ？」

「あ、ばれました？」

やっぱり。まったくインテリぶつといて根性あんなこいつ。まあ、  
気での身体強化もしていたはずだから、そう俺が呆れていると、

「さて、回復もできましたし、そろそろお暇しますか。」

「なに・・・？」

次の瞬間、倒れていたはずのジョン・ドウの蹴りが俺に迫る。

「くッ!？」

俺はかろうじてそれを受け流し、ジョン・ドウから距離をとる。

そうしてジョン・ドウは幽鬼のようにゆらりと立ちあがる。

今は体の調子を確認めるために体のあちこちを動かしている。

「おいおい、あれだけくらってまだ動けんのかよ。どんだけタフな  
んだよ。」

「いやあ、さすがにまずかったですかね。あなたと話している最中  
に気で回復を図っていただけのことですよ。」

うわあ。俺超つかつじゃん。敵が倒れても警戒して気絶くらいさせ  
るよ俺。

せめて気の動きくらい探つとけばよかった。

「それで、お前はまだあそこの少年の身柄を狙うのか？」

そういつて俺が指差したのは額に？印のある少年。俺たちの注意が自分にむいても、堂々とそこ立っている。

むしろ、護衛の給仕さんのほうが狼狽している。少年を守るかのように自分の背に隠しこちらを、正しくはジョン・ドウのほうを睨みつけている。

その光景を見ながらジョン・ドウは苦笑する。

「いえいえ。回復したといつても全快ではありませんからねえ。せいぜい40%といったところですか。これではあの護衛の方と、いまだ余力を残しているあなたを相手どるのはきついですからねえ。

・・・ここはひかせてもらいますよ？」

「やらせるとでも？」

俺はいつでも動き出せるように警戒する。俺の能力が警告アンサーカードしている。ここでこいつを逃がすのはやっかいな事態を招くと。

「べつにあなたの許可は求めてませんから。ああ、ところでここを私たちが爆破したのは覚えてますか？」

「それがな、つまさかてめえ！？」

「それではさようなら。」

そういつて、ジョン・ドウが手に持っているスイッチを押した。

ドグオオオオン！！！！！

今までで一番の衝撃音が響き渡る。ホテル全体が揺れて、天上の装飾が地面に落ちる。

「くツ！？」

「大丈夫ですか英雄様！！」

「これはまずいわね。」

彼らの慌てる声に一瞬ジョン・ドウから目をそらしてしまった。そして視線を戻したら、

「ッ！しまった！！」

やつはすでに消えていた。どうやら逃げられてしまったらしい。

ド  
ド  
ド  
ド  
ド  
ド  
ド  
ド  
ド  
ド

ホテルの揺れが激しくなってきた。

しかたない。俺は部屋に残っていた客をつれてホテルから脱出した。ホテルの壁をぶちぬいて。・・・まあ、人命のためだ。それにどうせ壊れるんだし、ホテル側には目を瞑ってもらおう・・・。

（しかし、あいつはいつたい・・・。）

あいつ、ジョン・ドウは紛れもなく本物の腕をもった男だった。川神院でもやっついていけるほどに。

あれほどの腕をもった武術家が、なぜテロなんて真似をしたんだろう。

（今回の出来事、テロに詳しいわけではないが、ただのテロリストにできることじゃないし、ましてや、たった一人、あいつ一人ができることじゃないはず。つまりは、あいつの所属している組織はただのテロ組織ではないはず。・・もしかしたら、あいつの目的自体が組織の目的と一致しているのかもしれないな・・。）

俺はこの時は思いもよらなかった。

ジョン・ドウ。またあの男と邂逅することになると。また、やつが所属する組織と、将来的に戦うことになるとは・・。

（まあ、こんなこと俺が考えても仕方ない・・。）

今は、初めての実践で生き残ったことに喜ぶことにした・・・。

ちなみに俺を迎えに来た父さんが、救出した客、特に給仕さん（あずみ）と金髪の女性<sup>エリカ</sup>がものすごい警戒していたのは、割とどうでもいい話である。

「どつでもよくないわよ!?!」

「父さん、うるさい。」

「四季ちゃん、ひどくない!?!」

ちなみに? 印の少年は、全く動じず、興味深げに父さんに話しかけていた。

大物だなあ、こいつ。

まあ、感きわまって父さんが少年に抱きつこうとしたが、それはさすがに給仕のお姉さんが吹き飛ばしていた。・・・まあ、父さんだし大丈夫だろ。

今はそれどころじゃないしなあ。とりあえず、

「ふむ、貴様が奉山ちゃんの息子か。どうやら母親似のようだが、その年で大した練度だ。さすがは奉山ちゃんの息子といったところか。」

「フハハハハ。確かに。ぜひ、九鬼に欲しい人材だな!!!」

目の前にいる、金髪で巨体のおっさんと、少年と同じ、額に？印が入ったおっさん。

この、無駄にオーラのでてる二人のおっさんが俺の目の前にいた。

あんたら……どなたさん？

第十二話 初めての実践 ジョン・ドウ戦決着！！ですか。終わり

**第十二話 初めての実践 決着！！ジョン・ドウ戦ですか。（後書き）**

どうでしたでしょうか。

なんか、グダグダですいません。これが俺の限界なんです（泣き

今回は主人公、ある人物のお宅に訪問です。・・・まあ誰のお宅かは話を見ればわかります。

それでは、以上！ラドウでした。

第十三話 九鬼家訪問ですか。(前書き)

お気に入りか800件超えていました。皆さんのおかげです。ありがとうございます。

投稿遅れてすいません。今回はタイトル通り九鬼家におじゃまします。

それでは、どうぞ。

前回のあらすじ

ジョン君撃波！

## 第十三話 九鬼家訪問ですか。

第十三話 九鬼家にお宅訪問ですか。

サイド：四季

どうも、前回初めて実践を経験した、篠宮四季です。

今俺たち篠宮一家はとあるお宅にお邪魔しています。

「ふはははは。どうだ四季殿。我が家を見た感想は？」

「すごく…大きいです。て、いつか殿はやめてくれっていったる英雄。」

「む。しかし我は尊敬できる人間に対してはこんな感じなのだがな。」

「それでもだよ。同年代に敬語を使われるのはどうもなあ…。」

「むづ…。それなら四季、でよいのか…？」

「ああ、それでいい。」

「じゃあぼくも小雪って呼んで。」

「つむ、ならば我のことも英雄でいいぞ小雪よ。」

まあ、今の台詞でわかるとおり、今回訪問したのは、九鬼英雄君のお宅である。

…いや、まず英雄って誰だよって？

おいおい、ちゃんこの話読んでろよ。

俺がジョン・ドウと戦ってる時に観戦していた？印の少年がいただろ？（後で聞いたら同年齢だったけど）

あの子だよ、あの子。

名前は九鬼英雄。確か日本三大家っていう、やんごとなき身分の家柄とか。…そんなもんあったとは知らなかった…。まあ興味ないからいいけど。

ただ…

「しかし驚いたぞ。四季。まさか、お主の父上が

私の父上と友人関係だったとは……。」

……うん、それだよ。

俺は後ろを振り返る。そこには、

「ふはははは。久しいな奉山よ。」

「本当に久しぶりねえ。前に店の仕入れに海外に行った時に会った以来かしら？ヒュームちゃんも久しぶり。」

「うむ。お主とは四季が生まれる前に一度死合った以来だな。どうだ、また一死合？」

「いやあよ。前やった時は山が半壊したじゃない。呂家の皆に怒られたんだから。」

「ふむ、それは残念だ。我としてはお主とヒュームの勝負を見たかったのだが。おお、そういえば奥方も久しぶりですな。どうですか体の調子は。」

「ええ、おかげさまで。最近はずこぶる調子がいいです。」

「うむ、それは。しかし無理はいけませんぞ？」

もの凄いオーラを出してる中年二人と談笑している俺の父親と母親の姿が。

そう、あの二人は前話の最後（メタ発言）にでてきた例の二人である。

金髪で髭を生やしていて燕尾服を着ている男性の名前は、ヒューム・ヘルシング。

こちらは別にいい。この人の名前は鉄心さんから聞いたことがある。確か父さんと鉄心さんのライバル的存在だったはず……。その強さは溢れ出る気の量からも推察できる。

そして、もう一人。名前は九鬼帝。英雄の父親であり……九鬼家の当主である。

その九鬼家の当主、どうやら俺の父さんの友人だったらしい。…俺の父親はいつたい何なんだろうか。いつもは少しおかしい居酒屋の店主のくせに、呂家なんて組織の幹部だったり、武神なんて呼ばれている鉄心さんと互角の戦闘力だったり、しまいには日本三大名家なんてとこの当主と友人だったり。

「?どうした四季?」

「い、いやなんでもない。」

いけない、いけない。どうやら考えこんでいたらしい。とりあえず、父さんは後でO・H・A・N・A・S・Iだな。

後ろから父さんの、「なんで!?!」という声を無視して、俺は九鬼邸の中に入って行った……。

ここは九鬼本家の応接室。

俺達、篠宮一家は全員ここに通されていた。

この家の外見から考えると意外にシンプルな部屋の造りだが、よく見ると質のいい家具が備わっており、品の良さを感じられる。

同じ金持ちでも、良くドラマなどででてくる金に者をいわせた下品さが、全く感じられなくて、本当の金持ちはこうなんだというものを感じさせられるような部屋である。

そこには帝さんとヒュームさん。英雄やあの時の給仕さん、忍足あずみさんもいた。

あずみさんだが、あの後ヒュームさんに「英雄」に仕えたいという旨を伝えたところ、無事英雄の護衛に抜擢されたようだ。

まあ、本人の実力もちろんあるだろうが、英雄本人の希望でもあるといのが決め手となったのだろう。とても嬉しそうだったなあ。「恋する乙女」のごとく英雄の良さを語られ始めた時はどうしようかと思っただけ。…あんたまだ英雄と出会ったばっかだろうに。

あと、英雄や帝さんに似た雰囲気的女性と少女…幼女か？が二人。おそらく帝さんと英雄の家族なのだろう。…額に？印あるし。

「ふむ、話の前に私の家族を紹介しておこう。」

そういつて帝さんは隣にいる女性に目で催促し、その女性が立ちあがる。

「我は九鬼局<sup>くきくぼ</sup>。英雄の母じゃ。そしてこつちが。」

「われはくきもんしろじゃ！よろしくたのむぞー！」

局さんが静かに、そして紋白ちゃんがげんきよく挨拶してくれた。

「今回は我が息子、英雄の命、救っていただき礼をいわせてもらおう。ありがとう。」

そういつて、九鬼家の面々が頭を下げた。…俺にむかって。

(…え、なにこれ…)

突然のことに混乱した俺。一緒にいたあずみさんや九鬼家の従者っぽい人たちが息を呑む姿がまたそれを拍車させる。

「あ、頭をあげてください。俺は当然のことをしたまですから。」

ありきたりな言葉だが俺の本心だ。俺は積極的に人助けをしたりはしないが、目の前で起きそうになっているころを放っておくほど人でなしではないつもりだ。

「…それでも息子が助かったことには変わりない。なにか礼をした  
いのだが…。」

「いや礼なんていりませんよ。いい稽古にもなりましたし。」

これも本心。確かに命がけだったが、それまで稽古の仲での試合し  
かやっていなかった俺にはいい刺激になった。

あの経験は俺の糧になってくれるだろう。

「しかし…。」

帝さんはそれでも引き下がる様子はない。義理がたいのいいけど本  
当にいららないんだけどなあ。

…そうだ！

「じゃあ、一つだけいいですか？」

「うむ、我のできることなら。」

じゃあ、遠慮なく。

「おいしいご飯が食べたいです。」

シーン。

「……………は？」





激しい物音とともに、巨大な気が近づいてきた！

あずみさんが警戒のためにとっさに英雄さんを自分の後ろに隠そうとするが、心配ないと英雄はあずみさんをおさえる。

ドッパ                    ンッ！！

もの凄い音で扉が開くと、そこに英雄たちと同じ額に？印のついた美女（美少女）が現れた。

「ふはははは。九鬼揚羽降臨である」

突然の事態に固まっている俺にかまわず、その美女、揚羽さんは帝さんに詰め寄る。

「父上！英雄、英雄はどうなったのですか！！」

そんな揚羽さんに帝さんは冷静に対応する。

「落ち着け、揚羽よ。英雄ならほら、そこにいる。」

そうして帝さんは英雄を指差した。

揚羽さんは英雄の姿を視界に収めると、

「英雄                    ！！！」

飛びついた。

「なッ!？」

あずみさんは反応できない。油断していたのもあっただろうが、揚羽さんの動きがあずみさんの知覚能力を超えていたのだ。

(はいッ!!)

見ればわかる。この人は強い。それも百代さんに匹敵するほどに！俺が一人戦慄していると、いまだに英雄に抱きついたままの揚羽さんに帝さんが呆れたような声をかける。

「いつまで、そうしている揚羽よ。英雄が無事なのがうれしいのはわかるが、客人の前だ、自重しろ。」

帝さんの声に揚羽さんは、ハッ!としたような顔になると若干頬を赤らめながらこちらにむき直る。

「ん、んん!失礼した。我の名前は九鬼揚羽。この度は弟を救っていただき…」

揚羽さんの言葉が止まる。不思議に思った俺が揚羽さんの視線の先を見ると、

「へ?」

その視線は俺に釘付けとなっていた。え、え、なにこれ。

ツカ、ツカ、ツカ、ピタ。

ちよつとしたメダパニ状態の俺をよそに、揚羽さんは俺の目の前で止まる。

心なしか頬が赤い感じがする。

「お主、名前は？」

え？

「な、名前ですか？」

「うむ。」

なんだろう、答えたほうがいいのか。…でもなんか嫌な予感がするんだけど。まあ、名前くらいならいいか…。

「えっと、篠宮四季っていいです。よろしくおねがいます。」  
「コッ」

…これでいいのかな。結構無難に挨拶したつもりだけど。

おそろおそろ揚羽さんの顔を見ると、

「……………（ボンツ）！」

真っ赤な顔になっていた。



俺の叫び声が、九鬼家の屋敷に響き渡った…。

くおまけく

風間ファミリー秘密基地のこと。

キュッピ　　ン！

「ハッ！」「」

そこで京と百代の二人が何かを感じとった。

「もぐもぐ。どしたの二人とも？」

ワン子が忠勝の作ったお菓子を食べている。四季がいないときは、彼が風間ファミリーの料理係になっている。

「おい一子、口元についてる。」

「むー。とって、とって。」

「ちッ。しょうがねえな。」

そうやってワン子の口元をぬぐう忠勝はどことなくうれしそうだ。

「それで、どうしたの姉さん？」

話が進まないとはかりにファミリーの軍師である大和が、自らの姉貴分である百代に尋ねる。

「なにか、また新しく四季がフラグを立てた気配がしたんだ。」

「私も！」

どうやら京も同じものを感じたようだ。

それを聞いた筋肉担当のガクトが憤慨する。

「なんだよそれ！また四季ばっかだよ。」

「いやいや、それよりまずそんな事がわかるモモ先輩たちにつっこむべきじゃないかな！？」

今日もモロは絶好調のようだ。

「フラグってなんだ？」

我らが永遠の少年キャップはフラグという言葉の意味がわからないらしい。そのまま純粹に育ってほしいものだ。

今日も川神ファミリー平和に楽しく過ごしていた…。

第十二話 九鬼家にお宅訪問ですか。終わり

第十三話 九鬼家訪問ですか。(後書き)

どうでしたでしょうか。

なんか揚羽様のキャラが違う感じがしたけど、そこは二次創作だからってことで一つご納得を…。

フラグの立て方も無理矢理すぎでごまんなさい。

今回は揚羽VS四季。…また戦闘シーンとかww

それでは以上、ラドウでした!!

第十四話 VS 九鬼揚羽。 未来を賭けた戦い！ですか。（前編）（前書き）

思ったより長くなりそうなので前編後篇にわけましたので、予告し  
といてなんですが、揚羽さんとの戦闘シーンは次回に持ち越しとな  
ります。すいません。

第十四話 VS 九鬼揚羽。 未来を賭けた戦い！ですか。（前編）

第十四話 VS 九鬼揚羽。 未来を賭けた決闘！？ですか。（前編）

ここは九鬼家の従者たちが日々鍛錬に勤しむ場。屋敷の外にあるこの鍛錬場に、今二人の人物が対峙していた。

1人は九鬼家長女、『九鬼揚羽』。武神をして自らのライバルの1人といわしめた、最強執事『ヒューム・ヘルシング』の愛弟子。その実力は恐らく武神の孫である川神百代に匹敵するであろう。その彼女は目をいつになく輝かせ、まるで獲物を狙う肉食獣のような目で目の前の相手を見ている。…鼻息も荒く、少し怖い…。

1人は我らがオリ主、『篠宮四季』。彼の紹介は読者諸君はすでに知っているだろうから省くとするが、その彼はいつになく真剣な顔で相手を見ていた。よく耳を澄ませると、小さい声で、「勝たなきゃ勝たなきゃ勝たなきゃ勝たなきゃ勝たなきゃ勝たなきゃ…」と繰り返している。

彼がここまで真剣なのはとある理由がある。それを知るには前話の最後まで話を戻さなければならぬ…。

サイド：四季

「え、えと…今なんて?…」

「うむ。私の夫にらんかといったのだが?」

「…あー。夫っていうのはあれですよ。配偶者としての夫ですよ?」

「?その夫意外なにあるのだ?」

「ですよー。俺もその夫意外知らないし。」

「どうやら聞き間違いではなかったらしい。いまだに頭が混乱していたが、とりあえずそんな発言が飛び出した理由を聞いてみた。」

「あー。俺ってあなたと初対面ですよ?」

「うむ、そうだな。」

「だったらなんで夫なんて?」

「我の一目ぼれだ!」

.....

.....

.....

ええ…。これといった理由ねえじゃんか…。

まあ初対面なんだからあるほうがおかしいんだけどさあ。

そんな俺を揚羽さんは気にした様子がない。

「で、返事はどうなのだ。」

揚羽さんが鼻息荒くして俺に詰め寄る。ちょっ、顔近いです!?

俺は揚羽さんから距離をとろうとするが、

ガシッ!

「どこに行くのだ?」

あ。そういえば揚羽さんに手を掴まれていたんだっけ。これじゃあ距離がとれない。

「いや、ちょっと近いから距離をとろうと…。」

俺がそういつと揚羽さんが涙目になる。えッ！？俺なんか悪いことした？

「そ、そんなに我のことが嫌いか…?」

「い、いやなんでそういつことになるんですか!?!」

「だって、距離をとろうとした…。」

ああ、そういつことか…。

「揚羽さんの傍にいるのが嫌だったわけじゃないですよ？ただちょっと緊張してしまっただけ。」

「緊張?」

涙目で首を傾げる揚羽さん。ちょっとかわいいな…。

その揚羽さんの疑問符に俺は頬を掻きながら答える。これから話すことが少しはずかしいからだ。

「ええ。ただでさえ女の子と密着状態は緊張するのに、それが揚羽さんみたいな美人ならなおさらですよ。」

「…え?」

揚羽さんは俺の言葉に驚いたように目を見開く。そんな変なこといっただけかな？結構本音なんだけど。

なにやら後ろで帝さんたちが、「お前の息子はいつもああなのか？」  
「そうなのよ」。無意識で女の子をひっかけるから困っちゃって。  
父親としては喜んでいいのやら、悲しんでいいのやら。「ふむ。  
貴様も大変だな。」などとというような会話をしているがなんのこっ  
ちや？

「……………」。

揚羽さんを見ると、黙って下に俯いていた。え？ちよつと目を離し  
たすきになにがあったの？（ちなみにこの時揚羽さんの手はがっち  
りと俺の手を掴んだまま）

「えつと揚羽さん…？」

気になったのでおそろおそろ話しかけてみたら…

ガバツ！

「むぐツ！？」

「お前はなんていい男なんだ四季よ……………！！！！」

急に揚羽さんに抱きしめられた。俺の口元を揚羽さんの胸がふさぐ。  
やわらか…ってやばくねこの状況！？息できねえし揚羽さんの家族  
が見てるんだぞ！？

しかしそんな俺の焦りもなにやら興奮している揚羽さんには届かない。

「決めた、決めたぞ、貴様は今日から我の婿決定だ！異論は認めん  
！！」

「むー！むー！」

（いや、認めるよ。）

俺は心の中で揚羽さんに突っ込んだ。口に出して突っ込みたかったが、揚羽さんのホールドから抜け出せない。っていうか力強いなこの人！俺結構本気でもがいてんだけど！？まあ怪我させるわけにはいかないから気は使ってないが…。

そんな俺の様子に揚羽さんはやっと気づいたようだ。

「おっとすまぬ。」

揚羽さんの体から俺が離れる。

「　　ブハッ！ひ、ひどいですよ揚羽さん！？」

危うく窒息するところだった。…まあ少しおいしい思いもさせてもらったが。

俺が息を整えていると、「では行くつか。」と俺を横抱きに抱えこんだ。…あれ？

「あ、あのー揚羽さん？」

「む？どうした四季よ。」

「俺はなんであなたに抱えられているのでしょうか？」

「そのほうが四季を運ぶのに手っ取り早いからな。」

「運ぶ？俺を？」

「えっと…、なんで？」

「ふむ。暴れられたら困るからな。」

「…ちなみにどこに運ぶ気ですか？」

「私の寝室だが？」

「小学生になにする気だあんた！？」

へ、変態だ！変態がいるぞ！？」

その揚羽さんの言葉にはさすがに動揺したのか、部屋にいる皆がざわめいた。っていうか見てんなら助けるよおい！？」

揚羽さんは俺の言葉をフツと鼻で笑うと、俺に問いかけてきた。

「四季よ。こんな言葉を知っているか？」

「愛に年齢は関係ない。」

「いい言葉だけど使い方間違ってるだろそれ!？」

(まずいまずいまずいこれはまずい!?)

このままでは食われる(性的に)と思い、俺はなりふりかまわず気を使って脱出を試みようとした。その時、

「ダメー……」

小雪が揚羽さんの腕に掴みかかった。

「なっ!？」

とっさのことで反応できなかったのだろう。揚羽さんは俺から手を離した。

「へぶし!？」

突然下ろされたことで俺は床に顔面から落ちることになってしまった。うっ痛い…。

「四季を連れってちゃだめー!！」

「い、いきなりなにをする貴様!というか誰だ貴様!？」

あー。そういえば自己紹介してなかったけ？

揚羽さんの言葉に小雪は胸を張って答える。

「僕は篠宮小雪。四季の義妹だよ！」

心なしか「義妹<sup>きまい</sup>」という言葉**を強調していた気がしたが**…。気のせいだろうか。

「義妹…とな？」

揚羽さんが俺の顔をちらツと見てきたので俺は苦笑しながら答える。

「まあ、いろいろとわけありです。」

揚羽さんは俺の言葉に一瞬眉を顰めたが、結局は「そうか」と返したただけだった。どうやら詮索はしないでくれるようだ。

(こつこつという配慮はできるんだ…。さすがに九鬼家の長女ってところか？)

俺は揚羽さんに変な人くらいしかイメージがなかったが少し見直した。

「それでなぜあんな真似をしたのだ！せつかく私の部屋で四季をおそ、げふんげふんツ！四季と愛し合おうと思ったのに。」

そしてすぐに評価を元の評価より下げた。

本物の変態だこの人…。

「四季は僕のお嬢さんになるんだもん。君なんかにあげないやい！」

「お前はお前でなにをいつてるんだ、おい!？」

お前そんなこと思ってたのか!？というか俺に拒否権無いのか？

そんな俺を放って二人は睨みあい続けている。

「四季が貴様の嬢だと？ふん、なにをいうかと思えば。」

揚羽さんは小雪の体を見てせせら笑う。

「お主みたいなちんちくりんでわ四季を満足させることなどできぬわ!！」

「求めてねえし、そんなこと…。」

ていうかあんたどう見ても中学生以上だよ。大人げなくね？

揚羽さんのその言葉に、しかし小雪は答えた様子もなく鼻で笑う。

「僕はまだ小学生だから成長するもん！四季を満足させるために必要なのは体じゃなくて若さだよ。お・ば・さ・ん?」

「だからお前も何いつてんのおおおお!?!?!？」

というか君、そんなキャラじゃなかったでしょ!？

揚羽さんはそれなりに小雪の発言にいらついたようで額に青筋を浮かべている。

小雪は口元に笑みを浮かべているが目は笑っていない。

「……………」。

二人は無言で先程の比ではないほどの殺気を放ちながら睨みあう。

どうすっかなこれ……。俺が目の前の二人をどうなだめようか考えていると、

「いい加減にせんか……………！！（しなさー……………い！！）」

「……………」

「どわっ！？」

帝さんと父さんの大声が響き渡った。っていうか声でけえ…。

揚羽さんと小雪はそのまま、帝さんと父さんに説教されることになった。

曰く、「自分の気持ちを押し付けるな」、曰く「本当に好きなら本人の意見も尊重しろ」など。これでなんとか助かったかなと思っただが、二人ともなかなか納得しようと思わず、説教している二人に文句をいっている。さすがの二人もこれには困っているようだ。

どうするのだろうかと観察していると、ふと帝さんと目があつた。

「……(にやり)。」

なにか嫌な予感がする笑みを帝さんが浮かべていた…。

そうして俺の嫌な予感は的中することになる。

具体的に言うと、あの後帝さんが一人にこう提案したのだ。「揚羽と決闘して揚羽が勝ったら四季は揚羽の婿になり、四季が勝ったらこの話は無かったことにする」と。

もちろん俺は反対しようとしたのだが、俺が反対する前に揚羽さんがそれを喜々として承諾し、小雪も「四季は負けないから大丈夫！」とその提案を受けてしまった。…信頼してくれんのはありがたいけど、俺の意見も通してくれよ小雪さん…。

それで断るに断れず、話は最初の場面に戻るわけである。

俺は目の前に仁王立ちしている揚羽さんを見る。

「……………(キラキラキラ)」

目がものっそいキラキラしていた。

俺は確信した。…この勝負に勝たなければ食われるとっ!!!(性的な意味で)

俺と揚羽さんは鍛練場の中心でお互いむかいあう。

審判はヒュームさんがやってくれるようだ。

「それではこれより篠宮四季と九鬼揚羽の決闘を行う。両者前へ！」

「はい！」「うむ！」

「それでは始めい！！！」

そうして俺の未来を賭けた戦いが始まった…。

第十四話 VS 九鬼揚羽。未来を賭けた戦いですか。（前編）終わり

第十四話 VS 九鬼揚羽。 未来を賭けた戦い！ですか。 (前編) (後書き)

次回はとうとう揚羽戦。そして再びあの男が？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2940y/>

---

真剣で俺が転生者！？～その男【奉先】

2012年1月9日02時46分発行